

寺宇根遺跡

2008年3月

国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
奥出雲町教育委員会

正誤表

誤

(表目次の下) 奥出雲町と御崎遺跡の位置 → 奥出雲町と寺宇根遺跡の位置
(その頁下) 第1図 御崎遺跡の位置 → 第1図 寺宇根遺跡の位置

正

正誤表

頁・段など		誤	正
例言・24段	除	調査補助員 杉原清一 薩原友子 福田市子 家熊猛 井上賢治	調査補助員 福田市子
例言・4	追	今回の報告に関して自然科学分野・専門的分野の分析などを次の方々・機関に依頼した。 中村唯史 藤田富士夫 (株) 地球科学研究所 赤坂正秀 増永二之 佐藤邦明	本遺跡調査にあたり、理科学的分野の分析・検討は次のように依頼して行った。 特殊石器の材質について 島根大学 赤坂正秀 特殊文化財センター 藤田富士夫 遺構の土壤分析 島根大学 増永二之・佐藤邦明 遺構出土炭化物の年代測定 (株) 地球科学研究所 立地の地質について 島根県三瓶自然館 中村唯史 なお以上各氏からの成果報告は付録として本書に収録した。
例言・5		(有)内田工務店	内田工務店(株)
例言・7	除	写真撮影は伊藤・杉原が行った。	写真撮影は伊藤が行った。
例言・8	除	執筆は野津・福田で分担し、目次に氏名を記した。編集は野津・杉原・薩原・福田が行った。	執筆は野津・福田が行い、目次に氏名を記した。 編集は野津・福田が行った。
表目次の下		奥出雲町と御崎遺跡の位置	奥出雲町と寺宇根遺跡の位置
その頁の下		第1図 御崎遺跡の位置	寺宇根遺跡の位置
1頁・3段		蛇行	屈曲(折)
1頁・10段		であり	であったことにより
3頁・3段		仁多町大字三成	奥出雲町
3頁・3段		X=-87._____	X=-87. 950km
3頁・7段		標高200m	標高220m
3頁・11段		河段台地	河岸台地
3頁・12段	除	314号線	314号
3頁・23段		家の後II遺跡	家ノ後II遺跡
3頁・24段	除	そして本遺跡で計10基を越える埋甕が出 土している。	そして本遺跡で計10基を超える。
3頁・28段		雲南市吉田_____	雲南市吉田町
3頁・28段		本次_____	本次町
3頁・29段		耳飾り	耳栓
3頁・30段		石棒_石斧等	石棒・石斧等
3頁・32段		家の後II遺跡	家ノ後II遺跡
4頁・3段		北部九州の影響も色濃い貴重な	北部九州の影響の色濃い貴重な
4頁・7段		下大山子遺跡	下大仙子遺跡
4頁・周辺の 縄文遺跡の図		番号15 集落跡_____	集落跡?
4頁・周辺の 縄文遺跡の図		番号28 集落跡	複合遺跡

頁・段など	誤	正
5頁・4段	改修工事にかかる約3700m ² を調査対象地としたところである。	改修工事にかかる範囲約3700m ² を調査対象地としたところである。
5頁・8段	名称とする	呼ぶこととする
6頁・8段	縄文草 ^ハ 前期	縄文草～前期
6頁・12段	調査区 ^ガ	調査区にも
6頁・13段	縦断方向では△地形が	縦断方向では基盤地形が
6頁・21段	土器溜り遺構と捉えていたが、	土器溜り遺構と想像していたが、
6頁・22段	進めるうちに竪穴住居跡であると判明し調査を行った。△プランは逆台形状をなし	進めるうちに竪穴住居跡であることが判明した。平面プランは逆台形状をなし
6頁・23段	SI01	この
7頁・9段	削平	削平
7頁・10段	(43-13)	(44-13)
7頁・18段	墓坑である可能性を否定できない。	墓坑の可能性がある。
7頁・33段	川石12個 ^ガ	川石12個を
8頁・25段	50×30—	50×30 cm
8頁・31段	(42-9)	(43-9)
9頁・1段	土坑一覧	土坑一覧
10頁・10段	(47-17)	(48-17)
10頁・13段	L字状に配され ^ハ いた。遺物は縄文土器片・石鏃(42-20)	L字状に配されていた。遺物は縄文土器片・石鏃(43-20)
11頁・2段	(42-22)	(43-22)
11頁・27段	遺構西半 ^ハ は	遺構西半分は
14頁・28段	(42-24)・石鏃(44-6)	(43-24)・石鏃(45-6)
14頁・31段	石鏃(42-12)	石鏃(43-12)
15頁・4段	石鏃(42-14)	石鏃(43-14)
15頁・29段	両方を ^ハ 断割った	両方を截ち割った
15頁・33段	土坑とこと配石遺構1 ^ハ ではある程度	土坑とこの配石遺構1 ^ハ はある程度
18頁・30段	Mg・fe	Mg・Fe
18頁・31段	縋れ	括れ
19頁・31段	縋れる	括れる
20頁・2段	縋れて	括れて
20頁・7段	縋れて	括れて
20頁・12段	縋れて	括れて
21頁・軽質粗粒 分析	縋れるもの	括れるもの
25頁・12段	斧とい△より	斧というより
25頁・15段	追 観察表 ^ハ	観察表とし、法量は分布グラフ(42頁図50)に示した。

頁・段など		誤	正
42 頁・図1周辺の遺跡(範文期)		14. 北原本郷遺跡	14. 北原本郷遺跡
42 頁・表中		偏差値	標準偏差値(±σ)
42 頁・一番下	追		図50 石錘の計測値分布
44 頁・図3地形図	除	国道314号線	国道314号
45 頁・図4調査断面地形図と区割り	除	国道314号線	国道314号
97 頁・11段		富山史埋蔵文化財センター	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
112 頁・3段		貞方(1998)	貞方(1996)
報告書抄録 編著者	除	野津旭 杉原清一 藤原友子 福田市子 藤田富士夫 増永二之 佐藤邦明 中村唯史	野津旭 福田市子 藤田富士夫 増永二之 佐藤邦明 中村唯史
報告書抄録 要約		斐伊川左岸	斐伊川左岸
報告書抄録 シリーズ名		尾原ダム関連埋蔵文化財発掘調査報告書	尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
奥付		尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書



調査前



調査時

遺構全景

序

斐伊川・神戸川総合開発工事事務所では、いわゆる斐伊川・神戸川治水対策3点セットの一翼を担う事業として、斐伊川の上流において尾原ダムの建設事業を進めています。

ダム建設事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分に留意すべく必要な調査の実施、記録保存につとめるものとし、島根県教育委員会、奥出雲町教育委員会をはじめ関係各位のご協力をいただき、平成11年度から計画的に発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成18年度から着手した「寺宇根遺跡」の調査結果をまとめたものです。

本報告書が郷土の歴史教育や地域社会の諸活動のために広く活用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

国土交通省 中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所長 八尋 裕

序

奥出雲町教育委員会（旧仁多町教育委員会）は、国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所の委託を受け、平成11年度から尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査を行っております。本書は、平成17・18年度に実施した寺宇根遺跡の発掘調査記録であります。

ダム建設地が位置するここ斐伊川の上流は、かつて「肥乃河上」と称され、神話の舞台の地として広く知られ、古くからの遺跡がその数を増しつつあります。

今回の調査で、本書に収録した寺宇根遺跡では、4000年ほど前の縄文時代の配石墓が50基以上、堅穴建物跡が1棟見つかり、縄文土器片や石器、石製垂飾り・耳栓等の装身具が多数発見されました。

特に石製垂飾りは島根で2例目、全国でも数少ない貴重な発見となっております。これらの成果は、今後の当地方の歴史解明と歴史学習に活用され、文化遺産の保護に役立つものと期待しております。

終わりに、本調査にあたり国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所、島根県埋蔵文化財調査センターをはじめ、関係の皆様方の格別のご理解、ご協力を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

奥出雲町教育委員会

教育長 若槻慎二

例　　言

1. 本書は奥出雲町教育委員会が、国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて実施した、尾原ダム建設に関わる予定地内の埋蔵文化財について発掘調査した成果報告書である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

奥出雲町三沢791・外　　寺宇根遺跡

3. 調査体制は次のとおりである。

平成17年度～18年度　　現地調査

調査主体者　　奥出雲町教育委員会 教育長 渡部周行 (H17. 4月まで)

若槻慎二 (H17. 5月から)

事務局　　17年度：石見公男（教育課長）　　徳江良弘（教育課長補佐）

　　広野 進（生涯教育係長）　　平田昭憲（社会教育主事）

18年度：徳江良弘（教育課長）　　川本健二（教育課長補佐）

　　平田昭憲（社会教育主事）

調査員　　野津 旭（埋蔵文化財調査室）

調査補助員　　杉原清一　　藤原友子　　佐野木信義　　伊藤正樹　　家熊 猛

（埋蔵文化財調査室）

調査指導　　島根県教育庁文化財課　　島根県埋蔵文化財調査センター

　　蓮岡法暉（日本考古学协会会员）　　山田康弘（島根大学法文学部助教授）

平成19年度　　報告書作成

調査主体者　　奥出雲町教育委員会 教育長 若槻慎二

事務局　　川本健二（教育課長）　　石井 堅（教育課長補佐）

　　森山 昇（生涯学習第2係長）　　平田昭憲（社会教育主事）

調査員　　野津 旭（埋蔵文化財調査室）

調査補助員　　杉原清一　　藤原友子　　福田市子　　家熊 猛　　井上賢治

（埋蔵文化財調査室）

調査指導　　柳浦俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）

4. 今回の報告に関して自然科学分野・専門的分野の分析などを次の方々・機関に依頼した。

中村唯史　　藤田富士夫　　（株）地球科学研究所　　赤坂正秀　　増永二之　　佐藤邦明

5. 現地調査と報告書作成にあたっては下記の方々から助言と協力をいただいた（敬称を略す）。
(株)トーワエンジニアリング (有)内田工務店 国際航業(株)
社団法人中国建設弘済会 金山浩司 佐野靖郎 板倉次郎 佐野木信義(以上技術員)
栗原久美子(事務員)
6. 描図中の方位は、国土第III座標系の値を示したほかは、調査時の磁針で示した。なお調査時の磁針方位は西偏約 $7^{\circ} 10'$ である。高さは標高で示した。
7. 遺物の実測は調査員と補助員が行い、写真撮影は伊藤・杉原が行った。遺物図と図版中の個体Noは同じである。
8. 執筆は野津・福田で分担し、目次に氏名を記した。編集は野津・杉原・藤原・福田が行った。
9. 出土遺物や調査図・写真等調査成果品は奥出雲町教育委員会で保存している。

目 次

I 調査に至る経緯と経過	(野津) 1
II 位置と環境	(野津) 3
1. 位置 2. 立地と地形 3. 周辺の遺跡	
III 調査の概要	(野津) 5
1. 調査方法 2. 遺構・遺物	
IV 土層と堆積について	(野津) 6
V 遺構と遺物	(福田・野津) 6
1. 遺構 2. 出土遺物	
VI まとめ	(福田・野津) 27
土坑について 配石遺構1・2について 双脚状石製品について	
付編I 寺宇根遺跡出土双脚状石製品について	92
富山市教育委員会埋蔵文化財センター	
藤田富士夫	
付編II 寺宇根遺跡埋蔵文化財調査に伴う土壤分析結果	98
島根大学生物資源科学部土壤圈生態工学研究室	
増永二之 佐藤邦明	
付編III 放射性炭素年代測定結果報告	101
(株) 地球科学研究所	
付編IV 立地と自然史	107
島根県立三瓶自然館	
中村唯史	

挿図目次

図1 周辺の遺跡（縄文期）	42	図26 遺物図(5)	67
2 斐伊川中～上流域の遺跡（縄文期）	43	27 遺物図(6)	68
3 地形図	44	28 遺物図(7)	69
4 調査前地形図と区割り	45	29 遺物図(8)	70
5 十層図(1)	46	30 遺物図(9)	71
6 上層図(2)	47	31 遺物図(10)	72
7 寺宇根遺跡II区遺構配置図	48	32 遺物図(11)	73
8 遺構配置図その1	49	33 遺物図(12)	74
9 遺構配置図その2	50	34 遺物図(13)	75
10 SK詳細図(1)	51	35 遺物図(14)	76
11 SK詳細図(2)	52	36 遺物図(15) 粗製	77
12 SK詳細図(3)	53	37 遺物図(16) 粗製	78
13 SK詳細図(4)	54	38 遺物図(17) 粗製	79
14 SK詳細図(5)	55	39 遺物図(18) 粗製	80
15 SK詳細図(6)	56	40 遺物図(19) 粗製	81
16 SK詳細図(7)	57	41 遺物図(20)	82
17 配石中心エリアと周辺のSK	58	42 遺物図(21)	83
18 SK詳細図(8)	59	43 出土遺物 石器(1)	84
19 SK詳細図(9)	60	44 出土遺物 石器(2)	85
20 配石遺構とSK71-1	61	45 出土遺物 石器(3)	86
21 SI01	62	46 出土遺物 石器(4)	87
22 遺物図(1)	63	47 出土遺物 石器(5)	88
23 遺物図(2)	64	48 出土遺物 石器(6)	89
24 遺物図(3)	65	49 出土遺物 石器(7)	90
25 遺物図(4)	66		

図版目次

PL 1	II区全景(上空より)	117
2	配石遺構	118
3	遺構面と土層(フライン)	119
4	12ライン土層	120
5	土坑(1)	121
6	土坑(2)	122
7	土坑(3)	123
8	土坑(4)	124
9	上坑(5)	125
10	下坑(6)	126
11	SI01他	127
12	遺物出土状況	128
13	現況・作業風景他	129
14	縄文土器(1)	130
15	縄文土器(2)	131
16	縄文土器(3)	132
17	縄文土器(4)	133
18	縄文土器(5)	134
19	縄文土器(6)	135
20	縄文土器(7)	136
21	縄文土器(8)	137
22	縄文土器(9)	138
23	縄文・弥生土器	139
24	弥生土器他	140
25	縄文 粗製(1)	141
26	縄文 粗製(2)	142
27	縄文 粗製(3)	143
28	底部	144
29	石器(1)石鎌	145
30	石器(2)磨斧・打斧・凹石等	146
31	石器(3)石錐	147
32	石器(4)敲石・磨石・石皿等	148

表 目 次

周辺の縄文遺跡	4
寺宇根遺跡 出土遺物集計表	5
土坑一覧	9
石鍤観察表	26
寺宇根遺跡 出土土器観察表	29
石鍤の計測値	42

奥出雲町と御崎遺跡の位置



第1図 御崎遺跡の位置

I 調査に至る経緯と経過

寺宇根遺跡は平成12年に島根県埋蔵文化財調査センターの範囲確定調査により、3700m²が調査対象とされた地で、佐々木集落の対岸で斐伊川が大きく蛇行する左岸の近年圃場整備された水田に位置する。

奥出雲町教育委員会は平成17・18年度の2ヶ年にわたり当該調査区域3700m²の発掘調査を実施した。検出した主な遺構・遺物は中段調査区から縄文時代後～晩期を中心とするもので、配石土坑・土坑墓60以上、堅穴住居跡1棟、土器・石器・装身具等であった。

調査の中途ではつきりとした工事計画が示され上段調査区は計画外となり、既に開けたトレンチ調査による土層確認のみとした。また、下流の調査区は密に開けたトレンチの結果、遺構・遺物は皆無（遺物は表土中に若干包含する）であり、ここも調査期間と工事開始時期との関係で、トレンチによる土層観察に止めた。

本遺跡報告書作成業は、同じく尾原ダム周辺の御崎遺跡の発掘調査と一部併行作業となり厳しい時間調整が予想されたが、やっと報告書刊行となった。

なお、本遺跡の理化学的分野等についてはそれぞれ別途鑑定を依頼し、専門的な視点から格別の成果を得ることができた。

以下経過を列記する。

平成16年10月4日 調査区トレンチ調査開始（～10月25日）

10月26日 表土掘削（～11月26日）

11月29日～トレンチ調査結果整理、本調査準備

平成17年4月18日 調査前空撮準備

4月19日 調査前空撮

5月30日 調査開始（～5ライン）

10月3日 調査指導会

　　山田 康弘氏（島根大学法文学部）

　　原田 敏照氏（島根県教育庁文化財課）

10月17日 空撮（配石部分）

11月7日 火山灰等土層鑑定依頼

　　中村 唯史氏（島根県立三瓶自然館）

11月14日 H17年度現地調査終了（～5ライン）

11月15日～調査成果の整理を始める

調査指導検討会 年間随時

平成18年3月29日 成果報告書作成

- 4月3日 整理（内業）調査、報告書作成開始
- 5月8日 H18年度調査開始
- 6月14日 現地説明会（17時30分～ 見学者20名）
- 9月26日 調査指導会
　　勝部 智明氏（島根県教育庁文化財課）
　　伊藤 徳広氏（島根県埋蔵文化財調査センター）
　　蓮岡 法暉氏（島根県文化財保護審議委員）
- 10月12日 調査指導会（9時30分～）
　　伊藤 徳広氏（島根県埋蔵文化財調査センター）
　　中村 唯史氏（島根県立三瓶自然館）
- 10月23日 現地調査終了
　　調査区内出土垂飾りについて
　　露梨 紗子（荒神谷博物館学芸員）
- 10月24日～整理（内業）調査、報告書作成継続
　　調査指導検討会 午間随時
- 11月19日 三沢地区産業文化祭にて出土遺物等展示
- 平成19年1月27日 奥出雲町ふるさと教育展にて出土遺物等展示、案内
（～2月1日）
- 9月13日 調査概報作成 町教委へ提出
- 平成20年3月 調査報告書刊行

II 位置と環境

1. 位置

寺宇根遺跡は島根県仁多郡仁多町大字三成の三沢地区に所在し、国土座標第III系のX = -87, 950km、Y = +75.350km地点が遺跡のほぼ中心に当る。そしてこれは北緯 $35^{\circ} 12' 16''$ 東経 $132^{\circ} 39' 40''$ に相当する。

2. 立地と地形（図1・2）

西に向って蛇行しながら流れ下る斐伊川本流の南側河岸に立地していて標高200mである。南方後背は花崗岩質の山塊で、北に向って張り出す尾根が迫り、川を挟んだ北正面は花崗閃綠岩質の独立山（標高349m）の急な山腹となっていて、斐伊川は交互に狭険な谷地形の両岸を削りながら強く折曲した流れとなっているところである。遺跡はこの流れの平常水位までの落差が約5mで流れの瀬うらに張り出す河段台地で、面積約3000m²の水田である。南側には約4m高く尾根端を通る国道314号線が川に沿って通っている。

3. 周辺の遺跡（図1・2）

奥出雲町寺宇根遺跡（1）は斐伊川本流の河岸段丘に立地する。中国山地を源とする斐伊川は出雲地方のほぼ中央を北流し、下流部では山陰地域最大級の沖積平野を形成し宍道湖へ至る。

この流れの中～上流域にあたる木遺跡周辺の縄文時代の遺跡を概観することしたい。

從来より斐伊川本流・支流には縄文時代の遺跡が知られていたところであるが、近年の尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査の結果、似通った立地で、より濃密に分布していることが判りつつある。

本遺跡から500mほど下流の対岸河岸段丘上には樅屋遺跡（2）、1km上流には暮地遺跡（3）があり、いずれも縄文時代後期を中心とする遺跡で、暮地遺跡は埋甕2基と土偶3体で知られている。埋甕（上器埋設遺構）が確認された周辺の遺跡は、県指定史跡である雲南市三刀屋町の宮田遺跡（28）、雲南市本次町の平田遺跡（9）、北原本郷遺跡（14）、家の後II遺跡（10）、奥出雲町佐白地区的原田遺跡（5）、同町三沢地区的前田遺跡（7）、そして本遺跡で計10基を超える埋甕が出土している。また、土偶の出土した遺跡は北原本郷遺跡で3体、原田遺跡で1体、奥出雲町三沢地区的林原遺跡（6）からは5体見つかっている。原田遺跡出土の品は晩期中葉の人形土偶であるが、他はいずれも後期前葉の分銅形土偶である。その他、原田遺跡、町内三沢地区的下鶴倉遺跡（8）、北原本郷遺跡、雲南市吉田の大原遺跡（30）で線刻甕や石棒が、木次の楨ヶ塙遺跡（10）、本遺跡では朱塗りの耳飾りが出土しており、呪具と思われる遺物が増加しつつある。また、三刀屋町六重地内で出土地不明であるが石棒、石斧等の存在が知られている。

平田遺跡・下鶴倉遺跡では上記の遺構・遺物のほか、大量の石鎌や石斧・石錐・剥片が出土しており、石器工房の可能性があるとされた。北原本郷遺跡および家の後II遺跡では後期から晩期にかけての配石墓、貯蔵穴、竪穴住居跡などの多様な遺構が確認されている。また、垣ノ内遺跡

(13) では中期の土器が纏まって出土している。

下鴨倉遺跡は平出遺跡から阿井川上流1.5kmの河岸段丘上に営まれ、出土した土器は、前期から晩期に至る山陰・山陽の諸様式をほぼ網羅しているばかりか、北部九州の影響も色濃い貴重な資料も出土している。近年の調査で木次町川平I遺跡(12)では早期から晩期までの主要な土器様式がほぼ途切れることなくみてとれる。

図にあげた範囲で最も古いものに分類できる遺跡は、斐伊川上流の旧横田町に所在する、押型文土器が出土した国竹遺跡(20)やド大山子遺跡(21)、小万才遺跡(18)などで、早期に遡ることができる。上記の川平I遺跡でも早期の黄鳥式が出上している。

周辺の縄文遺跡

番号	遺跡名	種別	備考	遺跡地図添
1	寺宇根遺跡	散布地・その他	縄文土器、垂飾、配石遺構、土坑墓、建物跡	N148
2	榎屋遺跡	散布地	縄文土器	N147
3	尋地遺跡	散布地	埋甕、縄文土器、土偶3体、弥生土器、竪穴住居	N56
4	里田遺跡	散布地	縄文土器	N55
5	原田遺跡	複合遺跡	縄文土器、埋甕、玉類、大刀、古墳、石棒、縫刻碑	N135
6	林原遺跡	古墳・集落跡	縄文土器、土偶	N61
7	前田遺跡	古墳・集落跡	縄文土器、埋甕、貯蔵穴、弥生土器	N145
8	下輪倉遺跡	散布地	縄文土器、墓塚、石組、石器、縫刻碑	N5
9	平田遺跡	製鉄遺跡他	縄文土器、埋甕、石器、人骨、土壤、石器工房跡?	Q22
10	楢ヶ坪遺跡	製鉄遺跡他	縄文土器、朱塗耳飾り、製鉄関連遺物	Q77
11	家ノ後遺跡	散布地	縄文土器、埋甕、配石土坑、石器、土師器、輸入陶磁器	Q76
12	川平I遺跡	集落跡他	縄文土器、土坑、石器	Q56
13	垣ノ内遺跡	集落跡	縄文土器、石器、土坑	Q53
14	北原本郷遺跡	集落跡・包含層	縄文土器、埋甕、土偶3体、配石墓、石棒、縫刻碑	Q110
15	宇根遺跡	集落跡	縄文土器、石斧	N2
16	王貴遺跡	散布地	縄文土器、石器、住居跡?	N61
17	宮ノ前遺跡	散布地	縄文土器、土師器	N59
18	小万才遺跡	散布地	縄文土器	M15
19	竹崎井西遺跡	散布地	縄文土器、須恵器、土師器	M7
20	国竹遺跡	集落跡	縄文土器、弥生土器、石器、住居跡	M147
21	下大仙子遺跡	住居跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、炉床	M36
22	神ヶ谷遺跡	散布地	縄文土器、土師器	M38
23	龍ノ駒遺跡	散布地	縄文土器	M1
24	曲谷遺跡	散布地	縄文土器、黒曜石	M42
25	大鍬穴遺跡	散布地	縄文土器、石器	M90
26	栗谷遺跡	散布地	縄文土器、石器、製塙土器	R8
27	宮内遺跡	散布地	縄文土器、石器、玉石	R3
28	宮田遺跡	集落跡	縄文土器、埋甕、土壤、貯蔵穴	R9
29	楢原遺跡	散布地	縄文土器、石器	R5
30	大原遺跡	散布地	土器、石棒	V1
31	宮ノ奥遺跡	散布地	縄文土器、須恵器	V78

* 島根県教育委員会:『島根県遺跡地図 I (出雲・隠岐編)』2003.3による。

III 調査の概要

先年、島根県埋蔵文化財調査センターの行ったトレンチ調査により要発掘調査とされたこの地は、西に向って蛇行しながら流れ下る斐伊川本流の南側河岸に位置し、尾原ダム建設に伴う河川改修工事にかかる約3700m²を調査対象地としたところである。

1. 調査方法

- 1) 事前に川に直交するトレンチを10本入れ、土層を確認した。
- 2) 調査区内に5m単位で小区を設け、川に沿う方向を数字で、川に直交する方向をアルファベットで表記する。以後、区の名称は区の東坑をもってその区の名称とする。

2. 遺構・遺物

- 1) 寺宇根遺跡は調査前段階で、3面の水田3700m²を調査対象域としたところである。上段調査区をI区、下段調査区をII区、下流調査区をIII区と便宜上呼ぶこととする。

島根県のトレンチ調査、また奥出雲町のトレンチ調査の結果、I・III調査区では遺構は皆無で、遺物は耕作上、若しくは流入土中に僅かに認められるだけであった為土層観察を行うにとどめた。遺構・遺物ともII区に集中していたためII区から調査に着手した。

II区で検出した遺構は、いずれも縄文時代後～晩期の配石遺構・配石墓・土坑墓・ピット・竪穴建物跡1棟・自然河道跡等である。

- 2) II区で検出した遺物は縄文時代後期中葉～晩期中葉を中心とする遺物で擬似縄文土器（磨消縄文土器）・凹線文系土器・晩期突帶文土器・粗製土器がほとんどである。僅かであるが、早期に遡る押型文土器・織維土器がみられる。石器では石錐・石鏃・磨石・敲石・石皿・石匙等のほか、詳細は付録に譲るが、県内、ひいては全国的に珍しい形状の石製垂飾りも出土している。

遺物の総数は、14454点。詳細は下記の表のとおりである。

寺宇根遺跡 出土遺物集計表

縄文土器				弥生土器			土師器		石 器						合計			
早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	石錐	磨石・ 敲石・ 石皿	石斧	石鎌	スクリーパー	剥片 (チップ)	その他				
4	8	82	296	粗製 12343	932	0	41	1	53	161	148	18	12	30	2	266	57	14454

IV 土層と堆積について

遺跡の標準土層として横断方向の5ラインT・11ラインT・18ラインT・23ラインT、縦断方向のHラインT・JラインTを示し(図5・6)、これによって概要を記す。

トレンチにより僅かな差異はみられるが基本土層としては、表土・耕作土→客土→黒色土(遺物包含層)→川砂・川疊層となっている。ただ、細かく観ると流水の影響を幾重にも受けているため分層ラインに微砂層を薄く挟む部分も多い。遺物は黒色土中からで、僅かにバミスの多少で分層できるが、下方は縄文後～晩期の遺物、上方は、量は僅かであるが弥生・土師器を含む。また黒色土の下の川疊層には僅かに縄文草前期の遺物が流入していた。

調査範囲が調査時には圃場整備された水田3面であるが、周辺の旧地形は国道の南からのびる尾根が遺跡の東側で斐伊川が強く屈曲する地点に向っていたと考えられ、トレンチ調査の結果からも同一レベルにおいて調査範囲内では下流へいくほど客土は厚くなる傾向がみられた。また、調査区が高低差もあり、傾斜も一様ではないため山手よりの高レベル部分では川(水)による流亡傾向が、北～北西の川寄りでは堆積傾向が窺える。また、縦断方向では地形が7ラインあたりでやや高くなっている。これはやや細尾根状に張り出していた地形で、3～6ラインあたりでの流水の影響と思われる。

V 遺構と遺物

1. 遺構

III章でも述べたように遺構は黒色上下面でII区からのみ検出している。主な遺構として土坑・住居跡がある。土坑についてはII区中央から上流側にやや密に分布し、配石を伴う土坑、上坑のみのもの、II区中央部の円形プランを重ね合せたような配石下にある土坑等様々で70基を数える。竪穴住居跡(SI01)については、当初川端によく見られる土器溜り遺構と捉えていたが、調査を進めるうちに竪穴住居跡であると判明し調査を行った。プランは逆台形状をなし3.9×2.6mを測る。SI01では床面に石圍炉を検出している。

なお、遺構名についてはそれぞれ調査時点の名称をそのまま採用していることを了承願いたい。また、遺物の個体Noは数字のみのものは、粗製土器である。

各遺構の詳細については以下のようなであった。

1) 土坑

II区黒色上中及び下面から60基以上の土坑を検出している。これらには上部に配石・集石を伴うものとそうでないもの、その他大型の配石プランの下に位置するものの3パターンに分けられ

る。これらの土坑はⅡ区中央部の大型円形プランの周囲を取り囲むように配置されている。土坑自体の方向、配列等の方向はランダムであるが、地形（等高線）を意識していると思われる。これらの詳細についてはSK…観察表を載せておいた。なお、土坑・ビット図において上層を入れていないものは単層で、黒褐色土が埋土である。また、ランダムに数基の土坑内の土壤を分析している。詳細については各土坑の説明と付編Ⅱに譲る。

・上部に配石・集石を伴う土坑

SK2G-1（図8・10）

土坑群の東端に位置し、長円形で長径105cm、短径90cm、深さ10cmを測る。浅い土坑だが、20cm弱の川石4個がプラン検出時に認められたが、土坑自体の上端が既に作平されている為だろう。埋土中から安山岩チップと小型石斧（43-13）が出土している。床面直上埋土を土壤分析している（詳細は付編Ⅱ章）。

SK3G-5（図8・10）

土坑群の南東に位置し、楕円形で長径100cm、短径90cm、深さ20cmを測り、断面形は中段平坦面をもつ二段壠状を呈し、プラン上部に30cmほどの平石2個を配す。埋土中に縄文土器片、安山岩チップを含む。

SK3H-6（図8・10）

土坑群の東端に位置し、隅丸方形で、長径110cm、短径100cm、深さ10cmを測る。20~40cmほどの川石を底面に接地した状況で検出した。出土遺物はなく、非常に浅い土坑であるが墓坑である可能性を否定できない。

SK4G-A（図8・10）

Ⅱ区の東側SK3G-5の西隣に位置し、不整形の土坑二つが切合っているが一括して扱う。長径210cm、短径120cm、深さ20cmで、南側に川石が集中し、埋土中に含まれる土器（41他）は北側表面に集中していた。

SK4G-D（図8・10）

SK4G-Aの北西に位置し、長径50cm、短径30cm、深さ10cmを測る平面楕円形で、プラン肩部と底面で10cmほどの川石を検出した。埋土中から縄文土器細片を検出した。

SK4G-C（図8・11）

SK4G-Dの東側に位置し、長径85cm、短径75cm、深さ30cmを測る平面楕円形でやや擂鉢状を呈す土坑で、標石と考えられる30cmほどの川石を表面に配し、底面・埋土中には10cmほどの川石を有す。埋土中・底面近くより縄文土器片（IV-32）を検出している。

SK3H-7（図8・11）

SK3H-6の西側に位置し、長径80cm、短径60cm、深さ20cmを測る。平面形は楕円形で30cmほどの川石12個が底面から積重なる状態で検出している。埋土中から縄文土器細片・安山岩系のチップ

を検出している。

SK4H-1 (図8・11)

SK3H-7の南に位置し、長径145cm、短径110cm、深さ35cmを測る。平面形はイチジク形をなし、周辺に小ピット4つを作り、表面には標石と思われる40cm以下の川石8個を配す。埋土中から縄文土器(IV-27・VI-1・底49)を検出している。また、遺構の南側20cmの位置から双脚状石製品(V-48)も見つかっている。これについては、付編Iで藤田氏に玉稿を賜っているので、ご覧いただきたいが、このような形状の垂飾品は全国的にも数えるほどであるとのことであった。また土坑床面上を別途土壤分析している(付編II章参照)。

SK4H-4 (図8・11)

SK3H-7の西に位置し、長・短径85cm、深さ20cmで、平面形は丸味おびた六角形である。表面上にあったと思われる10~20cm大的川石10個がやや落ち込んだ状態で見つかっている。埋土中から縄文土器片(VI-16)を検出している。

SK4H-3 (図8・11)

SK4H-4の南東に位置し、長径60cm、短径55cm、深さ25cmを測る。平面楕円形、挿り鉢型の堀型で、表面には20~30cmの川石3個と小砾5個が配されていた。遺物は、埋土中から縄文土器片・安山岩系チップが出土している。

SK3I-4 (図8・12)

SK4H-4の北方向、調査区端に位置し、長径160cm、短径110cm、深さ30cmを測る。平面達磨型プランで、二つの土坑の切り合いとも思われたが、土層は分層できず、ここでは一応、一つの遺構として扱う。性格としては自然流跡の可能性も否定できない。表面には、やや落ち込んだ状態で10~30cmの川石6個が配されていた。遺物は埋土中から縄文土器(28・30・48・底40)・安山岩系チップが出土している。縄文土器は大破片のものが多く4個体分以上はある。

SK4I-1 (図8・12)

SK4H-4の北西3mに位置し、長径120cm、短径90cm、深さ55cmで平面楕円形のプランである。北側で別の土坑(41号器浦)を切っている。表面には土坑のほぼ中心に50×30、厚さ10cmの石版とでも言うべきか、印象的な川石が配されていた。土坑壁面にも小川砾数個が含まれていた。遺物は細片がほとんどであるが、縄文土器片(IV-40)・安山岩系チップを検出している。

SK4I-2 (図8・12)

SK4I-1の南側に位置し、長径85cm、短径65cm、深さ30cmを測る略円形プランを呈す。表面には15~20cmのそろった印象の川石が15個集石されていた。遺物は埋土中から縄文土器片(底54)・石鏃(42-9)を検出した。

41号器浦BC (図8・12)

SK4I-1の北西2mに位置し、長径190cm、短径120cm、一番深い箇所で深さ35cmを測る大型の遺構である。表面の石は長さ40cmほどの川石一つで、遺構壁面・底面にそれぞれ一個ずつ同様の大

土坑一覧

土坑名	配石・集石の有無	埋積 (cm) (長径×短径×深さ)	出土遺物	出土遺物 の時序	備考
SK20-1	○	105×90×10	土器片 安チップ		
SK21H-1	なし	130×85×15	土器片 安チップ 石錐		
SK30-A	×	65×55×15			二段塗
SK30-5	○	100×90×20	土器片 安チップ		
SK3H-8	○	110×100×10			底面に平石
SK40-A	○	115×110×20	土器片	後晩期	
SK40-B	×	120×105×25	土器片		
SK40-D	○(ややすれる)	80×60×35	土器片		
SK40-C	○(ややすれる)	50×30×10	土器片		底に石あり
SK40-E	なし	85×75×55	土器片	後期	塗土中にも小レキあり
SK3H-7	○(大石が上から中まで詰まる)	90×70×15	土器片 安チップ	後期未か	
SK4H-1	○(ややすれる)	80×60×20	土器片 安チップ	後期前葉	
SK4H-1	○(ややすれる)	145×110×35	土器片 他	後期前葉	二段塗風 周間にピット 底に石 肩窓側にペンドント
SK4H-3	○	60×55×25	土器片 安チップ		
SK4H-4	○	65×35×20	土器片 小石	後期か	
SK3H-4	○	160×110×30	土器片 安チップ	後晩期	土器多枚 流跡跡か
SK3H-5	なし	100×85×30	土器片 安チップ	後晩期	底に石あり 流跡跡か
SK4-1	○(平石)	120×90×55	土器片 安チップ	後晩期	
SK4-2	○(中にも)	85×65×30	土器片 安チップ 磨	後晩期	
4I溜A	×	90×50×30	土器片 安チップ	後期	流跡跡か 中に石
4I溜B,C	○	— × 125 × 30	土器片 安チップ	後晩期	流跡跡か 底に石
4I溜D	×	80×65×30	土器片 安チップ	後晩期	流跡跡か 中に石
SK5G-1	○(焼石を含む川右輪)	—	土器片		
SK5G-2	○	— × 70 × 20	土器片		
SK5G-3	○	140×125×20	土器片 安石縛		
SK5G-4	○	90×50×20	土器片 安チップ 磨石1		
SK5H-1	○(中心とプラン)	120×110×20	土器片 安チップ		
SK5H-2	○	90×70×30	土器片		
SK5H-3	なし	100×45×20	土器片		塗土中に焼小川石
SK4-5	×	140×90×10	土器片 安チップ 磨石	後期	底に平石あ
SK5-1	○	110×100×10	土器片 安チップ		
SK5-7	○表面に焼小石10個	115×65×10	—		
SK5J-1	○焼石数個含む	85×70×20	土器片 安チップ 石縛		
SK5J-2	偏し	90×85×20	土器片 安チップ		
SK6-1	○	125×100×15	土器片 安石縛 チップ		
SK6-2	崩切に石	85×80×25	土器片 安チップ	後晩期	
SK6-3	上方にあり	110×90×10	土器片 安チップ		
SK6J-1	○(絞取り)	120×60×20	土器片 安・黒チップ		
SK6J-1	○	200×155×15	土器片 安石縛(未)チップ 石縛	中期	
SK8 H-1	無し	100×65×35	土器片		
SK9J-1	○綠石	110×90×30	土器片 黑チップ		
SK9J-1	無し	125×— × 40	土器片		
SK10H-1	○	120 × (120) × 30	土器片 黒・安チップ	突帯文期	
SK11J-1	○	75×75×10	土器片		周間にピット
SK11H-2	○?	90×65×15	土器片		
SK11H-3	○?	105×100×15	土器片 安チップ		川石
SK11H-4	○山石	— × 60 × 10	土器片		川縫1個
SK11H-1	無し	(160×105×10)	土器片 安チップ	後期	複数SKの切合いか
SK11H-2	無し	90×70×15	土器片 安チップ		山縫1川縫1
SK12H-1	無し	95×(65)×20	土器片		
SK12H-2	無し	— × 100 × 25	土器片		突起み
SK7H-1	○焼石含む	75×60×10	土器片		流跡跡か?
SK7H-2	○焼石含む	—	土器片		
SK7-1	上方に配石	150×100×40	土器片		
SK7-2	上方に配石	110×95×35	土器片 安・黒チップ		
SK7-3	上方に配石	130×90×40	土器片 石縛 不明品		
SK7-4	購合うSK7-1-2と共に	110×80×25	土器片 石縛		
SK7-6	上方に配石	100×80×25	土器片 安チップ 石縛	前期	耳栓
SK7-7	上方に配石	170×115×30	土器片 黒チップ 安石縛		
SK7-8	上方に配石	— × 100 × 35	土器片		
SK7-9	上方に配石	— × 70 × 10	土器片 安チップ	後晩期	
SK7-12	○	90×80×30	土器片	中期 後期前	中に石(表面近く) 石皿風
SK8J-2	付近に配石	— × 100 × 30	—		底に川縫6個
SK8J-3	上方に配石	80×70×20	土器片		
SK8J-4	付近に配石	120×85×20	土器片		一つと見なしたが切合いか 床面に焼石・削石
SK7 J-11	なし	90×65×15	—		

きさの石を検出している。遺物は遺構西側の二段塗風堀底の表面に縄文土器の大破片(17・IV-80)が集中していた。性格としては自然流跡であるのかもしれない。

SK5G-1（図8・13）

SK4G-Aの西6mに位置し、焼石を含む川石9個が集石している状態で検出した。壠型プランは不明瞭である。集石の範囲は長径75cm、短径45cmである。遺物は何も出土していない。

SK5G-2（図8・13）

SK5G-1の北2mに位置する。プランは不明瞭ながら直径70cmの略円形かとも思われ、深さは20cm。遺構表面には30cm以下の平石3個を配している。遺物は縄文土器片が1点出土している。

SK6G-1（図8・13）

SK5G-1の西2mに位置し、長径90cm、短径50cm、深さ20cmの平面楕円形をなす土坑である。遺構表面中心部に20cmほどの川石4個を集石する。うち一つは、立石状態で検出している。遺物は縄文土器片・敲石（47-17）が出土している。

SK5G-3（図8・13）

SK5G-2の北西1mに位置し、長径140cm、短径125cm、深さ20cmを測る平面隅丸三角形の土坑である。遺構表面に大川砾8個がL字状に配されていた。遺物は縄文土器片・石鏃（42-20）・凹石を検出している。

SK5H-1（図8・13）

SK5H-2の北東2mに位置し、長径120cm、短径110cm、深さ20cmの平面がほぼ正円に近い土坑である。遺構の肩に川石を6個配し廻らせ、床面中心部では平石が立石状態で見つかっている。遺物は縄文土器片・安山岩系チップを検出している。

SK5H-2（図8・13）

SK5H-1の南西2mに位置し、長径90cm、短径70cm、深さ30cmで、平面洋梨型で断面は擂鉢型をなすものである。遺構表面には20個ほどの大小川石を集積していた。遺物は縄文土器片が埋土中に含まれていた。

SK5I-1（図8・14）

SK6I-1の北東2mに位置し、長径110cm、短径100cm、深さ10cmの平面は円みのある三角形で、検出時には非常に浅いものであった。遺構表面に20～30cmほどの川石4個が配されており、上坑肩部に1個、遺構中心上に3個であった。遺物は縄文土器片・安山岩系チップを検出している。

SK5I-7（図8・14）

SK5I-1の南東2mに位置し、長径115cm、短径65cm、深さ10cmで、平面楕円形の深い上坑である。表面から10cm以下の焼小砾10個を検出した。遺物は出土していない。

SK5J-1（図8・14）

SK5J-2の東2m、調査区北端に位置し、長径85cm、短径70cm、深さ20cmを測る。平面略円形で、遺構表面に20cmほどの川石を2個据える。遺物は埋土中から縄文土器片・石鏃が出土している。

SK6I-1（図8・14）

SK5I-1の西2mに位置し、長径125cm、短径100cm、深さ15cmを測る。平面形は不正形で、遺構

表面上には50×40cmの大礫1個、25～30cmほどの中礫4個を配す。いずれも平石である。また遺構底面から15cmほどの川礫1個を検出。遺物は縄文土器片・石鎌（42-22）が出土している。

SK6I-2（図8-14）

SK6I-7の南西2mに位置し、規模は長径85cm、短径80cm、深さ25cmで、平面形は略五角形で、北（斐伊川）側の土坑の肩上部は流失していると思われる。配石は、遺構輪郭上と周辺にあり、北側の肩では川礫が立石状をなし出土している。遺物は縄文土器片（15）・安山岩系チップが出土している。

SK6I-3（図8-14）

SK6I-1の南2mに位置し、長径110cm、短径90cm、深さ10cmで平面橢円形の浅い土坑である。配石は土坑中心よりやや南側表面に65×35cmの大川礫が1個配されるものである。遺物は縄文土器片・安山岩系チップが出土している。

SK6J-1（図8-15）

SK6I-1を調査区沿いに西に4mの場所にあり、規模は長径120cm、短径60cm、深さ20cmで、平面不整長方形をなす。配石は土坑の長辺の縁取りに20～30cmの平石を配し、隙間を泥と小石で詰めていた。遺物は縄文土器片・黒曜石と安山岩のチップが出土している。

SK8I-1（図9-15）

調査区中心の配石遺構群の西群の南に位置し、規模は大きめで、長径200cm、短径155cm、深さ15cmを測り、平面略円形をなす。遺構表面に東西方向に幅40cmほどで小川礫が集石されていた。出土遺物は縄文土器片（III-15）・石鎌（46-32）が出土している。覆土を年代測定している。

SK9I-1（図9-15）

ST01の南東4mに位置し、もともと二つの土坑が切り合っている状況で検出しているが、ここでは一括して扱う。遺構西側は新しい掘込みで平面形は略方形プランを呈す。長辺縁辺部に10cmほどの川石が配される。これはSK6J-1と同様である。遺構東側は方形プランに切られるため平面規模は不明であるが、深さ40cmである。出土遺物は西側略方形プラン内からの出土のみで縄文土器片・黒曜石チップである。

SK10H-1（図9-15）

調査区西側、T6により遺構西半は消失している。残存部から規模は直径120cm、深さ30cmを測り、平面形はほぼ正円に近い形状をなすものではなかろうか。遺構表面の石は10cm前後の丸平石が3個配される。遺物は縄文土器の大破片（V-22・V-32・46）・黒曜石と安山岩のチップが出土している。また、土坑内土について別途土壤分析をおこなった（付編II参照）。

SK11H-3（図9-16）

調査区西端の土坑群のSK11I-2の南1mに位置し、長径105cm、短径100cm、深さ15cmで平面略台形をなす浅い土坑である。遺構表面から握り拳大の小川礫8個を検出している。遺物は縄文土器片・安山岩チップが出土している。

SK11H-4 (図9・16)

調査区西端の土坑群で、SK11H-3の南東1mに位置し、遺構南半は調査用トレンチで消失している。規模は60cm径で、深さ10cmである。平面略円形で、断面は二段堀状であった。20cmほどの川石が土坑肩部に1個存在する。埋土中に遺物は認められなかった。

SK11H-2 (図9・16)

SK11H-3の北西1mに位置し、規模は長径90cm、短径70cm、深さ15cmを測る。平面形は略円形で表面には山礫と川礫が1個ずつあった。出土遺物は縄文土器片・安山岩チップであった。

SK11H-2 (図9・16)

SK11H-3の西2mに位置し、規模は長径90cm、短径65cm、深さ15cmで平面略楕円形で二段堀状の断面である。表面の石は2個見つかっているが、遺構の縁に意識的に並べられたものの大半が消失している状態であろう。遺物は縄文土器片を検出している。

・上部に配石・集石を伴わない土坑

SK2H-1 (図8・10)

SK3H-6の東2.5mに位置し、規模は長径130cm、短径85cm、深さ15cmで平面不整形の浅い土坑である。出土遺物は縄文土器片・石錘である。

SK3G-A (図8・10)

SK4H-1の南東2.5mに位置し、規模は長径65cm、短径55cm、深さ15cmで平面不整椭円形の土坑で、土構内底面2カ所に小ビットがある。遺物は出土していない。

SK4G-B (図8・10)

SK4G-AとSK4G-Cの中間に位置し、規模は直径80cm、深さ35cmの不整円形をなす深めの土坑である。遺物は表面を中心に粗製土器片が数点出土している。

SK4G-E (図8・11)

SK3G-Aの南1.3mに位置し、長径80cm、短径70cm、深さ15cmを測る浅めの土坑である。15cmほどの川礫が土坑端にあるが、ここでは配石のない土坑として扱う。出土遺物は縄文土器片と安山岩チップである。

SK3I-5 (図8・12)

SK3I-4の南1.5mに位置し、規模は長径100cm、短径85cm、深さ30cmを測る平面椭円形のやや深めの土坑である。床面には30cmほどの平石があり、遺物は縄文時代後期後半から晩期の土器（V-1・V-3・IV-25等）がある程度まとめて出土し、安山岩チップもあった。

4I土器窪D (図8・12)

SK4I-1の北側で接し、切られている。規模は直径80cm、深さ40cmを測る土坑で、覆土中に川石6個を含む。出土遺物は縄文土器（IV-62等）があった。

4I土器窪A（図8・12）

4I土器窪BCの北側の調査区端に位置し、規模は長径90cm、短径80cm、深さ30cmで平面楕円形のやや深めの土坑である。土坑底面に30cmほどの川疊2個があり、出土遺物は底面直上から縄文土器片・安山岩チップである。

SK5H-3（図8・13）

SK5G-3の北側2mに位置し、長径100cm、短径45cm、深さ20cmを測る平面長円形の浅めの土坑である。出土遺物は覆土中からの縄文土器片である。また覆土中には焼石1個も含まれていた。
SK4I-5（図8・14）

SK5J-1の南東2mに位置し、規模は長径140cm、短径90cm、深さ15cmを測る浅めの土坑である。土坑表面に握り拳大の川疊数個があるが配石もしくは集石ではない。土坑底面中央部に35cmほどの平石が据えてあった。出土遺物は縄文土器（IV-93）・磨石片等である。

SK5J-2（図8・14）

SK5J-1の西2.5mに位置し、規模は長径90cm、短径85cm、深さ20cmを測る浅い土坑で不整円形をなす。出土遺物は覆土中から縄文粗製土器片・安山岩チップである。

SK8H-1（図9・15）

SK8I-1の南3mに位置し、長径100cm、短径65cm、深さ35cmを測る平面隅丸三角形で断面掘鉢形の土坑で、覆土中に小礫数個と縄文土器片を含む。

SK9J-1（図9・15）

SI01の北で調査区ライン上で北半がすでに消失した状態で検出した。規模は推定で直径125cm前後、深さ40cmで、楕円形を呈すプランかと思われる。出土遺物は縄文粗製土器1点が覆土中から見つかっている。

SK11J-1（図9・15）

SI01の西2mに位置し、直径75cm、深さ10cmの浅い平面不整形の土坑で、底面に35cmほどの平石が据えてある状態で見つかっている。周辺には小ピット二つがある。出土遺物は縄文土器片2点である。

SK12H-1（図9・16）

SK12H-2の南西1.5mに位置し、南半はすでに失われた状態で検出した。規模は長径95cm、短径は推定で65cmほどか、深さ20cmである。平面形は楕円形を呈すものと思われる。土坑中心底面に20cm径の小ピット様の落込みが認められる。出土遺物は縄文土器細片4点ほどである。

SK12H-2（図9・16）

SK12H-1の北東1.5mに位置し、直径100cmほど、深さ25cmを測る不整形土坑で、二段堀風の断面をもつものである。出土遺物は覆土中に縄文土器細片を含んでいた。

SK11J-1（図9・16）

SK11J-1の南西4mに位置し、複数の土坑の切合いとも思われるがここでは、土層観察により

同一遺構と考える。規模は長径160cm、短径105cm、深さ10cmと不整形の浅い土坑である。覆土中には小川礫も混じるが、縄文土器（IV-61）も含まれていた。

・大型の配石プラン下及び周辺の土坑（図17）

II区中央部の二つの配石群とその下もしくは周辺の土坑（遺構）との関係については後述することとし、ここではまず、上記のように上坑についてみていく。

SK7H-1（図18）

直接は配石群にかからない位置で配石群から南に4mに所在し、規模は長径75cm、短径60cm、深さ10cmの平面橢円形で浅めの土坑である。土構内には焼砾1を含む川砾15個があり、そのうちの平石は安定した状態で見つかっている。土坑の深さは当時この深さであったか疑問である。川砾の状況から遺構上部の配石・集石ではないと思われる。遺物は縄文土器細片が2点である。

SK7H-2（図18）

配石群の南1mに位置し、10~20cm大の川砾（焼石1を含む）を集石している。中心部に一部石がない部分がある。堀型は周開の土と似通っており非常に解りづらく判別できなかった。規模は、集石の範囲で長径50cm、短径40cmである。縄文土器片1点が出土している。

SK7I-1（図18）

配石プランの直下に位置するが、トレチにより西半が消失している。規模は推定で長径150cm、短径100cm、深さ40cmで平面橢円形をなす大きめの上坑で、縄文粗製上器・石錘（45-7）が出土している。また土坑内土について別途土壤分析をおこなっている（付編II参照）。

SK7I-2（図18）

二つの配石群の中間に位置する。規模は長径110cm、短径95cm、深さ35cmを測る。細片のため岡化していないが、出土遺物は覆土中に縄文上器片・黒曜石チップ・安山岩チップがあった。

SK7I-3（図18）

西側の配石群直下に位置し、規模は長径130cm、短径90cm、深さ40cmを測る一ヵ所が突出する不整形を呈し、断面は擂鉢形である。遺物は覆土中に縄文土器片・石錘等があった。

SK7I-4（図18）

西側配石群の北の外れに位置し、後述するSK7I-12と僅かに切合い、その切合部分上方に配石が成されていた。規模は長径110cm、短径80cm、深さ25cmを測り、覆土中から縄文土器片・刃器（42-24）・石錘（44-6）が出土している。

SK7I-6（図18）

二つの遺跡群の北側に位置し、規模は長径100cm、短径80cm、深さ25cmを測る平面略円形の土坑で、縄文土器（II-2）・耳栓（V-47）・石錘（42-12）を検出している。また、上坑床面土を別途土壤分析している（付編II章参照）。

SK7I-7 (図18)

西側配石群直下に位置し、規模は長径170cm、短径115cm、深さ30cmで平面形は隅丸長方形の短辺が一部突出しているような形である。表面から少し落ち込んだ位置に川砾が2個配されている。出土遺物は縄文土器・石鏃(42-14)・黒曜石チップである。

SK7I-8・9 (図19)

東側配石群直下に位置し、遺構南半は消失していた。二つの土坑が切合うちょうど接点で消滅しているため新旧は解らない。SK7I-8は直径100cm、深さ35cmで、表面に川砾一個を配し、底面にも大きめの石二個を置く。縄文土器片が出土している。SK7I-9は直径70cm、深さ10cmの浅い土坑で、表面にはSK7I-8同様の石を配し、底面には小砾数個が認められた。出土遺物は、縄文粗製土器(39-35)・安山岩チップである。

SK7I-11 (図19)

二つの配石群の間SK7I-2の北に位置し、緩いL字型を呈し、床面一ヵ所に二段壠風小ピットがある。規模は長径90cm、短径65cm、深さ15cmである。遺物は出土していない。

SK7I-12 (図19)

SK7I-4に隣接し、土坑表面中央に15cmほどの平石1個が置かれていた。規模は長径90cm、短径80cm、深さ30cmで楕円形を成し、断面橢鉢型であった。出土遺物は覆土中に縄文土器片(III-14・VI-44等)が含まれていた。

SK8I-2 (図19)

西側配石群直下に位置し、土坑南半はすでに消失していたが、推定規模は直径100cm、深さ30cmほどであろうか。底面直上から5cmほどの自然川石6個を検出したが、遺物はなかった。

SK8I-3 (図19)

西側配石群直下でSK8I-2の西に位置する。規模は長径80cm、短径70cm、深さ20cmを測る。出土遺物は縄文土器細片3点である。

SK8I-4 (図19)

西側配石群西端外れに位置し、平面形は不整形で長径120cm、短径85cm、深さ20cmである。底面から10cmほどの川石7個(内焼石1・割石1を含む)を検出。出土遺物は縄文土器細片4点である。

これら図17の土坑と上部配石遺構の関係についてみるために、7ラインのトレーナーにより配石遺構1と土坑(SK7I-1)の両方を断削った。その結果、配石遺構1とSK7I-1の断面の関係をみるとSK7I-1が掘られた当時面より10~15cm堆積した土の上に配石遺構1が造られていることが判つた。この関係は、平面的にも直径2mほどのサークルが4単位接するような配石遺構1において、サークルの真ん中に土坑が位置するのが自然であろうと考えられるが、明らかにずれている。このことからも土坑とこと配石遺構1ではある程度の時期差があると考えられる。その時期幅は出土遺物からは不明瞭である。

2) 配石遺構 1 (図17)

調査当初のトレンチによりその中心部は消失しているが、平面規模は 6×4 mで、その中は40~50cm大の川石で縁取る円形の輪郭が4単位以上重なり合っていた。その輪郭の内側に拳大以下の小石を敷き並べた状態であった。土坑の説明でも言ったように配石遺構1と土坑は配石を取り除き精査し、しばらく土を除去してから土坑を検出するという流れで、土坑を掘った当時面すぐ上に配石している訳ではない。

3) 配石遺構 2 (図17)

配石遺構1のすぐ西隣に位置し、平面規模は 4×3 mで、配石遺構1同様の川石を用いるが、検出時の状況としてはプランというより何本かの列を成している様な印象である。配石遺構1との相違は1は拳大以下の川石を敷き並べていたのに対して、2では検出時には全く認められなかつた。

配石遺構1と2は相違点はいくつかあるが、土の堆積状況から同時期のものと考えるべきものである。

3) SI01 (図21)

II区調査区西端 (10I・10Jグリッドを跨ぐ) に位置し、検出時は夥しく土器が堆積していたため、土器溜遺構という認識で捉えていて調査が進み竪穴住居跡と認識を変えた遺構である。

平面形は川側からみると丸味のある逆台形状をなし、 3.8×3 mである。遺構中央部には石窯炉を検出している。炉右奥床は 1×0.8 mの範囲で硬面となっていた。床面直上の出土遺物から縄文時代後期前葉の遺構と考えられる。床面に石舞が多く認められた。また、床面の大きめの川石には台石・石皿・敲石等も認められた。土器の堆積については建物廃絶後、廃棄した土器もあると思われるが、流込みもあると思われる。SI01西南周辺にピット群を検出しているが、直接SI01と関係するものではないようだ。床面近くの僅かな炭化物を年代測定した結果、縄文時代後期初頭の数値を得ている。(付編III参照)

以上みてきた縄文時代後期～晩期の遺構の他にもII区周辺にピットが存在するが、プランを示さないものや、後世の耕作に關係すると捉えたものは省略する。

2. 出土遺物

II区からの出土遺物を古いものから拾い出している。遺構内または包含層中出土遺物とも、図化できるものすべてを掲載している。

1) 縄文時代早期土器 (図22)

図22の1-1~4は早期の土器である。1はSI01の床面より下の川砂層から出土。表面に橢円押型文を施す黄島式併行である。2は内外面ともに山形の押型文がある。神宮寺式～神並上層式移行期と思われる。3・4は外面に粒の粗い縄文を施し、胎土には纖維を含む。菱根式であろうか。

2) 繩文時代前期土器（図22）

図22のII-1～8は前期の上器である。1・2は地文が条痕地で細隆帯に刻みを施す。2はSK7I-6出土である。西川津式B類。3は外面は口縁から垂下する瘤状隆帯と横・斜方向の押引文を施し、内面はきれいにナデ調整される。西川津式C類。4は外面に斜方向に押引文を施す。5は口縁部に肥厚帯をもち、外面に押引文、内面に条痕文を施す。西川津A類である。6はやや外反する口唇に幅のある刻みをもち、7は内外面とも条痕を施す。断面に織維を含む。これらは長山式である。8は非常に薄い器壁で外面に繩文を施すものである。前期後葉か。

3) 繩文時代中期土器（図23）

図23のIII-1～18は中期の土器である。1・2・4・8は口縁部片である。1は外傾しながら直口する器形で、2は内湾するキャリバー型。何れも外面は粗い繩文を施す。4もキャリバー型の器形であるが、外面は粒の細かい繩文を施すものである。8は直口口縁か。口唇はやや膨らみ上面に断続的な沈線をもつ。11・16はキャリバー型胴部の丸味を有する部位と思われるが、その他は細片の為判然としない。14はSK7I-12、15はSK8I-1出土である。以上は何れも船元式であろうか。

4) 繩文時代後期土器（図24～28）

図24のIV-1～22は後期初頭の精製土器である。1は波状口縁頂部に刻みを3箇所もち、外面は太めの沈線で区画された磨消繩文を施し内面はきれいにナデる、深鉢である。中津式。2・5～15は深鉢で、13以外の外面は何れも磨消繩文を施す。3・4は双耳壺のそれぞれ口縁部と耳部である。16～22は浅鉢。水平口縁のもの（17・21・22・23）、波状口縁のもの（16・18・19）があり、器形もボール型をなすもの（19・22）がある。2・3・15・17・19・22はSI01出土である。以上は中津III式並行である。25～29は中津III式～布勢式移行期の土器である。25は肩部でくの字に屈曲し直口する深鉢である。27は頭部で僅かに屈曲し、外傾気味に短くおさめ、口縁部に突唇に刻みを施す深鉢。内外面とも条痕調整である。30～33は崎ヶ鼻式の深鉢で、30は外反する口縁端部に2条の沈線とそれに囲まれた繩文帯をもつ。33は頭部から胴部にかけての部位で外面は細かい繩文を施す。38・39は口縁部上突起の破片。崎ヶ鼻式である。42～61は彦崎K II式の土器である。43は水平口縁の薄手の浅鉢である。内面白縁部に地紋はナデ調整で結節繩文を施す。48は外反する器形で口縁端部で直口して短くおさめる水平口縁の土器。3条の細めの沈線とその間に擬似繩文を施す深鉢である。彦崎K II。50も同様である。52は壺型土器の胴部である。内外面とも丁寧な仕上げで胴最大径部に細い沈線が巡り、その直上に擬似繩文する。61は小型薄手の壺型土器で胴最大径部はやや低めに設定されているようだ。外面は沈線と刺突による文様で、内面には指頭圧痕が明瞭に残る。62～70は壺型土器若しくは双耳壺である。何れも精緻な作りで細めの沈線と擬似繩文が特徴的である。61はSK11I-1、62は4I土器溜M出土。これらの内の42～48は彦崎K II式のなかでもやや古相を、49～70はやや新相を呈すものである。

71は壺型若しくは注口上器の胴部で最大径部分に巻き貝による扇状圧痕文を施す。72～74は何れも口縁部で頭部から外反気味に開きくの字に曲り内傾する深鉢で、外面には凹線を巡らす。75

は口縁に向けてハの字に開く鉢で外面は条痕調整、内面は口縁部に2条の凹線を施す。76は74のような器形で外面は3本の凹線に扇状圧痕文を施す。77～79は基本的にミガキ調整でハの字に開く浅鉢。口唇内側に何れも刻みを有し、77はその下に細い沈線を巡らせ、79は浅く幅広の凹線を巡らせる。80は腰部で屈曲し立ちあがりながら僅かに外反しおさめる器形の浅鉢で内外面とも磨く。外面腰部上方に3本の凹線文、内面口縁部に刻みを巡らす。81・82は丸味をもった器形の土器で多条の凹線文が巡る。83～92は器形は様々であるが、外面に凹線文を有す。93は削り後ミガキをし、外面に多条の凹線と扇状圧痕文を施す。94・95は口縁外面に沈線をもつもの。96は90の屈曲が緩くなった器形である。以上71・76は宮窓式併行、72～75は元住吉山I式、77～82は元住吉山II式、83～93は元住吉山II式～宮窓式の移行期であろうか。

5) 繩文時代晩期遺物（図29～31）

V-1～48は晩期の遺物として扱う。図29の1は内外面をなで（特に内面はきれいに）、丸味をもつ器形であるが、口縁端部で短く外傾する塊型土器である。2・4・5はやや波状気味の口縁片で、2は口唇に刻みをもつ。6・7・9は外反する器形をもつ深鉢で、6は口唇に刻みを、7・9は口縁部内面に方形の刺突が巡る。1・3はSK3I-5からの出土。13～図30のV-37は突堤文土器である。口縁のうち、直口または内湾するもの（15～17・21・23・24・31・34）、外傾するもの（13・14・22・25～30・32・33・35～37）がある。後者のうち32は口縁部と胴部に2条突堤を有し、18・19は胴部片であるため2条突堤と考えられる。21はSI01、22・32はSK10H-1出土である。図31のV-38～46は条痕が認められる土器片である。このうち調整が櫛状T工具による沈線のもの（38～41）、巻貝条痕のもの（42）、二枚貝条痕のもの（43・44）、太めの凹線のもの（45・46）がある。38～46はもしかすると弥生土器の可能性も否定できないが、応晩期の遺物としておく。47は臼型をした土製の耳栓である。図31の左図の径が2.1cm、耳朶に装着する部分が1.65cmである。圓化した平面と裏面の断続的な沈線内に赤色顔料を塗布した痕跡が残っている。島根県内でこれまで赤色顔料を塗布された土製耳栓が4点出土していて、いずれも縄文時代後期～晩期のもので、本遺跡出土のものも同時期である。形状はキタバタケ遺跡・沖丈遺跡・楨ヶ坪遺跡のものはやや大型であるが、小浜洞窟遺跡のものとは形状も沈線文様の施し具合も沈線内に赤色顔料が残るところも非常に似通っている。また、キタバタケ遺跡・小浜洞窟遺跡・沖丈遺跡のいずれもが、集石遺構や人骨の周辺から出土しており、埋葬行為との関係を窺わせる。本遺跡出土耳栓は、SK7I-6出土で墓と捉える土坑内出土であることから上記の遺跡出土のそれと同様の性格を想わせるものである。48は長さ3.4cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、3.25g測る石製垂飾りである。検出状況はSK4H-1近接した山手の表面から出土している。材質はmg・feを多く含む緑泥石が主要構成鉱物である。⁹ 非常にきれいに磨かれ形状は頸部・上腕部が簡略化され、腰が縫れ、脚が表現された人形（ひとがた）を想わせる品である。なお、48については“双脚状石製品”として富山市教育委員会埋蔵文化財センター 藤田富士夫氏から正稿を頂いており、付編に掲載している。

6) その他の縄文時代後・晩期遺物（図32・33）

細片若しくは当初時期不詳と捉えていた遺物である。図32のVI-1は胴部の最も膨れる部位で刻みを巡らす。布勢式であろうか。2は丸味を帯びた器形で口縁部で外側に肥厚する。3～7は器壁も薄く小振りなミニチュア土器である。あまり実用的ではない品と想われる。8～16は浅鉢である。口唇部の形状で端部が尖るもの（8・9・14・16）、肥厚するもの（12・13・15）、丸または平坦なもの（10・11）がある。調整はいずれも磨き、あるいはなで仕上げでも丁寧なつくりである。17～24は浅鉢より径の小さい塊型上器である。調整がなで・磨きのもの（17・18・24）と二枚貝条痕のもの（19～23）がある。用途によるものなのかもしれない。1・12はSK4H-1、14はSK3I-5、16はSK4H-4、10・11・17～21・23はSI01からの出土である。25は直口する器形で口縁端部でやや膨らむ。SK3I-5出土。26・27は内湾する器形、28は口唇が尖る。27はSK4H-1出土。29～34は口唇・口縁内面に施文されているもので、29・33は縄文を、30～32・34は刻みを施す。35・37は口縁部に2本の沈線をもち、沈線端に施文を有す。後期中葉であろうか。38・39は口縁外面に緩やかな2本の凹線と内面に沈線に区画された刻みをもつ。40～42は壺型若しくは注口土器である。40・41は細い沈線に擬似縄文をもち42は注口部分。後期中葉～後葉か。43・44は緩やかな波状口縁をもち、43は口唇が丸く、44は器形は内湾し端部で肥厚する。内外面とも二枚貝条痕が顕著である。45は試焼きの土製品か。46は直口する器形で平坦な口唇部で刻みを有すもの。28・36はSI01、40はSK4I-1、41はSK71-12からの出土である。

7) 弥生土器・土師器・須恵器等（図34・35）

図34の47・57は非常に小振りな品で47は直口する単純口縁で頸部に4本の沈線が巡り沈線間に刻みを施す。48は壺の肩部で外面に列点文をもつ。49・50・53・58は口縁がラッパ状に開く広口壺の口縁である。54・55は広口壺の頸部であろう。51は壺の口縁、56は内外面とも磨く壺の底部である。59は外面に櫛描沈線文が施される。以上の遺物は弥生時代中期の範疇とみて大過ないだろう。60は外に反る器形の口縁部で、口唇に刻みを有す。弥生時代前期か。61は4×3cmほどの板状土製品で表裏面とも沈線が数条施され、貫通孔を穿つ。用途は不明である。SI01出土。これらの遺物（61以外）は耕作土または直下の流入土からの出土である。図35の62～70は土師器で62・63・65～67は底部が回転糸切りである。64は二次加工した紡錘車である。68は壺の接地部分であろう。69・70は小振りで実用的ではないミニチュア土器である。72は須恵器坏の底部片、73は磁器で71は中世の須恵質土器である。以上は耕作土中からの出土である。

8) 縄文時代粗製土器（図36～40）

縄文土器の大半が粗製土器であったが、図化し得たものは50個体分であった（底部は後述する）。これらのうち口縁が残る42個体分を形状により分類する。器形が腰部で縫れるものをA類、内湾気味ながら直口するものをB類とする。また、口唇についても平坦なものをI類、丸味のあるものをII類、先細りのものをIII類とする。

・A I類(図36-1~7)

腰部で縫れて、口唇部が平坦なものである。

1・2は口径15cmほどで、共に内外面二枚貝条痕である。3・4・6・7は口径23~28cmを測るやや大きめな土器で、3・4・6は内外面とも二枚貝条痕がみられ、7は外面が削り、内面がナデ調整である。

・A II類(図36-8~図37-14・図40-42)

腰部で縫れて、口縁部が丸いものである。

8・10・14は口径15~18cmと小振りな品で、9・11~13は20cmを超えるもの、42は30cmを超える大型のものである。調整をみると、8~12・42は内外面とも貝殻条痕が顕著である。13は内面は条痕調整、外面はナデ、14は内外面とも工具によるナデ(擦痕)である。

・A III類(図37-15・16)

頸部で縫れて、口縁部が先細るものである。

15は口径44.1cmと非常に大きめの深鉢で、内外面ともナデ調整である。16は波状をなす口縁で波頂部でやや肥厚する。口径20.6cm、調整は内外面ともナデる。

・B I類(図38-17~23)

やや内湾若しくは直口する器形で、口唇部が平坦なものである。

17・18は口径27~29cmほどの大きめの深鉢で、17は内外面ともミガキ、18はナデである。19は口径21.5cmを測り、器壁がやや厚い。内外面とも巻貝条痕が顕著である。20・21ともナデ調整のもの。22・23は口径15~17cmと小振りな品で、22は内外面貝殻調整、23はナデである。

・B II類(図38-24~図39-39)

やや内湾若しくは直口する器形で、口唇部が丸いものである。

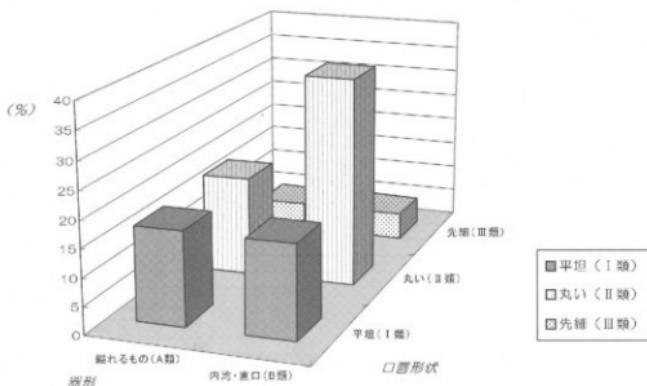
口径で大まかにグルーピングすると24・28・30・31・35・38は口径20cm台のものである。24は内外面とも条痕調整が顕著で、28はナデ、30は内面をナデ外面をミガキ、31は内外面ミガキである。35は口径20.2cm、底径10.5cm、器高25.0cmを測る。内外面とも二枚貝による調整、38は条痕調整後ナデ消す。26・29・32・34・37は口径30cm台のものである。26はナデ、29は内面がナデ外面がケズリで、32は内外面とも二枚貝条痕がみられるが、内面は一部ナデ消す。34は口縁内面に連続刺突を巡らせるもの。37は内面をミガキ外面を削る。補修孔がある。25・27・33・36・39は口径10cm台のもの。25は内外面とも二枚貝条痕、27はナデ、33・36・39は似通った器形で33・39は内面をナデ、外面を削る。36は内外面ともナデる。

・B III類(図39-40・図40-41)

やや内湾若しくは直口する器形で、口唇部が先細りのものである。

40は口径35.0cmを測る人型の深鉢で内外面ともナデる。41は口径28.0cm、内面をナデ、外面を削る。

以上を分類したグラフ・表が以下のとおりである。



棒グラフで表わしたのが粗製深鉢42個を100%とし、器形と口唇形状で分類したものである。このグラフからは本遺跡出土粗製深鉢はB II類が圧倒的に多い。ついでA I類・A II類・B I類とほぼ同数で、A III類・B III類が並んで一番少ない。

次に各類での総数を100%として内・外面調整により分類したものが上記の表である。各類総数は極めて数量の少ないものもあり、分類し傾向をつかむには不十分かとも思われるが、この中でも気づく事を挙げてみる。

まずA類をみていくと、A I類・A II類では内外面とも二枚貝条痕がかなりの優位をしめている。A III類は総数2個と数量が少なく客観性に欠けるだろう。B類ではB I類・B II類で内外面とも丁寧なナデ調整が最も優位を示し、ついで二枚貝条痕となる。B III類は総数が少なく傾向がつかめない。

以上、本遺跡出土粗製深鉢を分類したが、一括して扱ったため時期的なものを含んでいない。上記の傾向も時期的な傾向であるのかもしれない。しかし、もしそうでないとすると、器形と調整の関係、A類は内外面二枚貝条痕、B類は内外面丁寧なナデが優位という傾向は何に起因しているのか。もしかすると器の用途・内にいれる物体に起因するのかもしれない。

図40-43・44・46は深鉢胴部で、43は条痕が顯著、44は内面が条痕、外側がナデ、46は内外面ともケズリである。45は底径7.0cm、やや上げ底で立ちあがりの角度がかなりある。47は底径9.6cmを測り胴部にむかいへの字に開く器形である。内外面削りである。48は膨らみのある器形で内外面ともケズリである。49は底径6.9cmで内外面とも磨く。50は砲弾型の器形で条痕調整である。

A I類		総数7個						
外 面	二枚貝条痕 巻貝条痕 丁寧なナデ 雑なナデ ミガキ ケズリ その他	二枚貝条痕	巻貝条痕	丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ	その他
		72		14				
				14				

数字は%

A II類		総数8個						
外 面	二枚貝条痕 巻貝条痕 丁寧なナデ 雑なナデ ミガキ ケズリ その他	二枚貝条痕	巻貝条痕	丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ	その他
		50						
		12		26				
		12						

数字は%

A III類		総数2個						
外 面	二枚貝条痕 巻貝条痕 丁寧なナデ 雑なナデ ミガキ ケズリ その他	二枚貝条痕	巻貝条痕	丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ	その他
				50				
					50			

数字は%

B I類		総数7個						
外 面	二枚貝条痕 巻貝条痕 丁寧なナデ 雑なナデ ミガキ ケズリ その他	二枚貝条痕	巻貝条痕	丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ	その他
		14						
			14					
				30				
				14				
					14			
						14		

数字は%

B II類		総数16個						
外 面	二枚貝条痕 巻貝条痕 丁寧なナデ 雑なナデ ミガキ ケズリ その他	二枚貝条痕	巻貝条痕	丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ	その他
		19		13				
				6				
				31				
				6				
					6			
				13			6	

数字は%

B I類		総数2個						
外 面	二枚貝条痕 巻貝条痕 丁寧なナデ 雑なナデ ミガキ ケズリ その他	二枚貝条痕	巻貝条痕	丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ	その他
				50				
					50			

数字は%

9) 底部 (図41・42)

底部片で図化し得たものは74個体分（内弥生は33・36・37）であった。これらを形状により分類する。高台状のものを1類、平底のものを2類、中凹みのものを3類、丸底を4類、不明を5類とする。

・1類（高台状）(図41-1～6)

高台状としたものの中には底部外側よりの部分が一部窪んでいるものも含んでいる（1・2）。

・2類（平底）(図41-7～25)

平底としたもので、底部が外に踏ん張る形状のもの（10・12・14・15・16・17・18・19・22・23）と底部へむかってあまり屈曲しないもの（7～9・11・13・20・24・25）がある。

・3類（中凹み）(図41-26～図42-71)

中凹みとしたものの中には明らかに浅鉢であろうもの（27・28・30・70・71）がある。また33・36・37は弥生の底部と思われる。

・4類（丸底）(図42-72・73)

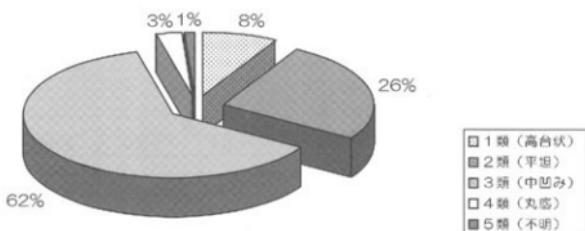
丸底としたもので72・73とも器の大きさのわりには器壁が厚い印象のものである。

・5類（不明）(図42-74)

残りが少なく分類不可能なものである。

以上の総数74個を100%とした時の各類に割合が次の円グラフである。

底部分類グラフ 総数74個



本遺跡出土底部片は、圧倒的に3類（中凹み）が多く6割を超るものであった。ついで2類（平坦）、1類（高台状）、4類（丸底）と続く。

次に各類と内外面調整についてみていく。

1類では総数6個だが内外面とも丁寧なナデが圧倒的に優位を示し、2類は総数19個で、やはり50%以上が内外面丁寧なナデ調整である。3類は総数46個と最も多く、数値がばらっているが、それでも4割が丁寧なナデであった。4類は総数2個と客観性に欠ける。

以上のように底部形状と調整の関係を分類したが、気づいた点を二・三挙げると、3類の数値の散らばりは、中凹みのものには種々の器種が含まれていると考えられる。例えば1・2・4類にはミガキが全くないが、3類では内面だけミガキも含めると13%である。このことは浅鉢、若しくはそれに準ずる盛付け用器を含んでいると考えられよう。また2類の数値はミガキはないものの内面に関しては非常に整形されているものが多いようである。

1類（高台状） (総数6個)

		内 面			
		丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ
外 面	丁寧なナデ	83			
	雑なナデ				
	ミガキ				
	ケズリ			17	
	その他				

数字は%

2類（平坦） (総数19個)

		内 面			
		丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ
外 面	丁寧なナデ	53	5		
	雑なナデ	26			
	ミガキ				
	ケズリ	16			
	その他				

数字は%

3類（中凹み） (総数46個)

		内 面			
		丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ
外 面	丁寧なナデ	39	2	2	7
	雑なナデ	12	5	2	
	ミガキ	9		7	2
	ケズリ	2		2	
	その他	2			7

数字は%

4類（丸底） (総数2個)

		内 面			
		丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ
外 面	丁寧なナデ	100			
	雑なナデ				
	ミガキ				
	ケズリ				
	その他				

数字は%

5類（不明） (総数1個)

		内 面			
		丁寧なナデ	雑なナデ	ミガキ	ケズリ
外 面	丁寧なナデ				
	雑なナデ				
	ミガキ				
	ケズリ	100			
	その他				

数字は%

10) 石器 (図43~49)

図43は石鏃・スクレイバーである。1~5はいずれも凹基式で材質は黒曜石である。5は基部が欠損している。すべて包含層からの出土である。6~23は安山岩で、6~18・23は凹基、19~21は平基式である。22は下部欠損のため不明である。8・9・17・18は基部一部欠損している。24はスクレイバーで片側は自然面を残す。安山岩である。先端部欠損である。9はSK4I-2、12はSK7I-6、13は4I土器溜りBC、14はSK7I-7、17はST01、20はSK5G-3、22はSK6I-1、24はSK7I-4から出土である。

図44は石斧。1~7・12は磨製石斧である。1は全面研磨される。3は片面に自然面を残し、刃部のみ研磨される。5は基部が欠損している。6は刃部がS字となるものである。7は基部が欠損していて、片面は破損面となる。未製品でろうか。8は打製石斧。基部が欠損している。9は細身の品で全面敲打痕が残るが、刃部のみ磨く局部磨製石斧である。10・11も打製石斧。13は磨製のものだが形状・法量から斧といより鑿であろうか。SK2G-1出土。十坑内出土で実用品とは考えづらい。2はSK4G-B出土。その他は包含層出土である。

図45・46は石鍤である。石鍤については木製品、破損品を含めると150個ほどになったが、図化し得たものは55個である。掲載分の詳細については観察表を載せている。

図47~49は凹石・敲石・磨石・石皿・投弾等である。図47の1~10は凹石である。1は平坦上面に凹みがあり、縁辺部一箇所に打欠き痕がある敲石である。2は上面中央がやや凹むが、その周辺は磨面で裏面も粗い磨面がある。材質は花崗岩である。3は上面中央に凹み、裏面は磨面である。花崗岩。4は両面凹面があり端部にも一箇所敲痕がある敲石である。凝灰岩である。5・6・9は上面中央に凹みが認められるもの。花崗岩である。7・8はやや大きめの石で上面中央が凹む。7が凝灰岩、8が花崗岩である。10は上面中央に2cm径の凹みが認められ縁辺部は風化のためボロボロである。花崗岩。図48の11は上面が凹み、裏面は磨痕が認められる。12は全面磨面をもつ石。13は全面磨面だが片端に敲痕をもつ磨・敲石である。14は上面に凹みを2箇所もつ凹石。凝灰岩。15は上部は欠損、下部端に磨痕がある。16は上面に2箇所の凹みをもつ。礫岩である。17・18は敲石で両端とも使用している。17は花崗岩、18は凝灰岩である。19・20は涙型の凝灰岩で用途不明品。23はサヌカイトの石核。24は19・20と同様の形状であるが、下部中央に7mmの円孔が認められるが、非貫通孔で未製品であろうか。円孔以外は川石の自然面のままである。用途は祭祀用とも考えられる。材質は凝灰岩である。25~28は投弾である。

図49の1・2は石皿である。1は上面中央が剥離しているが、周辺は磨面で半分が欠損している。上面が被熱のためか赤変色している。花崗岩。2は表裏面とも凹み、磨面である。軟凝灰岩である。3は長さ29.8cm、幅13.4cm、重量4.05kgを測り、表面はノミ削痕が認められる。粗礫を含む凝灰岩である。包含層出土だが標石・標柱であろうか。

石錘観察表

番	NO	出土場所	長軸(cm)	短軸(cm)	重量(g)	打欠き	材質	備考
45	1	3H	3.9	2.5	13	長軸	珪層岩	擦切り
	2	3G	6.5	4.0	59	長軸	凝灰岩	擦切り
	3	3G	7.4	4.2	68	長軸	凝灰岩	擦切り
	4	11G	6.0	4.1	83	長軸	砂岩	擦切り
	5	3G	6.0	5.5	87	短軸	凝灰岩	擦切り
	6	SK7I-4	7.0	4.2	133	長軸	凝灰岩	擦切り
	7	SK7I-1	8.7	4.5	112	長軸	軽石?	擦切り
	8	6G	7.3	4.3	93	長軸	凝灰岩	擦切り
	9	-	(3.2)	(2.3)	6	-	-	欠損
	10	SI01	8.3	3.8	77	長軸	凝灰岩	
	11	SI01	6.8	4.0	73	長軸	花崗岩	
	12	SI01	9.1	4.5	149	長軸	安山岩	
	13	SI01	7.4	4.1	84	長軸	花崗岩	
	14	SI01	6.8	4.0	87	長軸	花崗岩	
	15	SI01	7.7	4.3	90	長軸	安山岩	
	16	7I	6.8	4.3	87	長軸	泥岩	
	17	SI01	6.7	4.5	100	長軸	安山岩	
	18	SI01	7.2	5.0	110	長軸	安山岩	
	19	SI01	6.8	4.4	113	長軸	花崗岩	
	20	SI01	7.4	5.3	115	長軸	安山岩	
	21	SI01	7.8	5.6	158	長軸	花崗岩	
	22	SI01	8.3	4.9	108	両軸	花崗岩	
	23	SI01	8.2	4.8	109	長軸	安山岩	
	24	SI01	8.0	4.6	112	長軸	凝灰岩	
	25	SI01	10.2	6.2	213	長軸	花崗岩	
46	26	SI01	6.9	5.1	87	長軸	砂岩	
	27	SI01	7.6	5.3	109	長軸	花崗岩	3方か
	28	SI01	7.2	5.5	105	長軸	花崗岩	
	29	SI01	6.8	4.9	93	長軸	花崗岩	4方にも
	30	SI01	6.3	4.8	100	長軸	花崗岩	
	31	SI01	7.2	5.3	107	長軸	花崗岩	
	32	SK8I-1	6.2	5.0	103	長軸	珪質砂岩	
	33	SI01	5.9	4.5	80	長軸	花崗岩	
	34	SI01	7.0	5.7	117	長軸	安山岩	
	35	SI01	7.6	6.1	134	長軸	花崗岩	
	36	SI01	7.4	6.9	140	長軸	凝灰岩	
	37	SI01	7.4	6.2	154	長軸	流紋岩	
	38	SI01	7.7	5.7	120	長軸	花崗岩	
	39	4F	5.5	4.9	102	長軸	花崗岩	
	40	SI01	6.8	6.5	157	長軸	花崗岩	短軸に突出部
	41	SI01	7.0	6.5	120	短軸	安山岩	三角形
	42	6I	6.0	5.9	102	短軸	砂岩	3方か
	43	SI01	6.7	6.3	130	長軸	安山岩	
	44	SI01	6.3	5.0	86	短軸	花崗岩	
	45	10I	5.5	(4.7)	94	長軸	花崗岩	
	46	SI01	5.8	5.6	78	長軸	花崗岩	
	47	6I	4.3	4.1	34	短軸	泥岩	
	48	SI01	5.3	4.8	73	短軸	凝灰岩	
	49	SI01	5.3	4.7	77	短軸	花崗岩	
	50	SI01	6.3	5.0	93	短軸	安山岩	
	51	SI01	6.4	4.4	60	短軸	安山岩	
	52	SI01	4.7	4.3	65	短軸	花崗岩	
	53	SI01	6.2	5.2	71	-	安山岩	自然石
	54	9H	5.5	4.7	39	長軸	凝灰岩	打欠き斜め
	55	4G	8.8	8.0	196	長軸	凝灰岩	未製品か

VI まとめ

寺宇根遺跡の概要について記してきたが、主な遺構・遺物について述べてまとめとしたい。
土坑について

寺宇根遺跡II区において65基の土坑を検出した。中央に配石遺構1・2が位置し、その周辺に配石を伴うもの、伴わないものが、北(川)側にやや密に検出された。山手側では検出面が低いため形状・深さとも不明な点が多いが、径100cmを超えるものも13基あった。性格については土壤分析の結果からもSK4H-1、Sk4I-1、SK7I-1、SK7I-6、SK10H-1については墓坑である可能性が高いという数値を得ている(付録II章参照)。上記以外で墓坑の可能性が高いと考えられるものはSK2G-1、SK3H-6、SK6I-2、SK6J-1、SK9I-1、SK7I-2、SK7I-3、SK7I-4、SK7I-7、SK7I-8・9、SK7I-12、SK8I-2、SK8I-3、SK8I-4である。これらは、配石遺構1・2の真下に位置する、または表面に墓標をもつ、または出土遺物から、または方形プランで縁石を据えるなど、分析していないが、墓坑と捉えるのが自然であろう。65基の内大半が墓坑ではないかと考えるが、検出面が低くやや違和感があるが、落とし穴と考えられるものもある(SK7I-11・SK12H-1等)。またSK3H-7などは検出面から床面まで集石された状態で見つかっているが、この種の例として原田遺跡のSK84、北原本郷遺跡1～3区のSK9・10も同様の遺構と考えられ、貯蔵穴の可能性も否定できない。

配石遺構1・2について

配石遺構1は平面規模は 6×4 mで、40～50cm大の川石で縁取る略円形の輪郭が4単位以上重なり合っていた。そしてその輪郭の内側に拳大以下の小石を敷並べた状態であった。近隣の事例としては原田遺跡でも確認されている。

配石遺構2は平面規模は 4×3 mで、配石遺構1同様の川石も用いるが、円形を描く訳ではなく、何本かの列をなしている状況であった。また、配石遺構1で認められた小石も全く検出されていない。

配石遺構1・2で相違点はあるが、どちらもレベル下位の土坑表面と平均して10～15cmほど堆積が認められ、また、土坑と配石遺構1のプランのズレからも土坑が掘られてすぐに上部の配石遺構1・2が築造されたわけではなく、ある程度の時期差が考えられるものである。

SI01について

平面形は川側からみると丸味のある逆台形状をなし、 3.8×3 mである。床面中央部には石囲炉を検出している。炉に用いられた石の一部は周囲に散乱していた。炉右奥床は 1×0.8 mの範囲で硬化面となっていた。出土遺物は粗製土器片・石錐・石皿・台石・敲石・チップである。遺物から時期は縄文時代後期前葉の遺構であろう。また、チップについては墨曜石、安山岩とも見られたが、SI01のみならずII区全体でも図化していないものもあり、石器の製作が行なわれていたと考えられる。

双脚状石製品について

この石製品については付編Ⅰにおいて藤田氏からの正稿を掲載しているので詳細については御覧いただきたいが、自分がこの遺物を双脚状石製品として報告できるようになった経緯と留意点を述べて、この説明にかえたい。当初は装飾品という認識以外、特に意識していなかった。ただ質感といい、精緻な作りといい奢侈品という印象をうけた。サイズは長さ3.4cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、重量3.25gを測る。形状は頭部・上腕部が簡略化され胸部に円孔が穿たれ、脚が表現された人形（ひとがた）を思わせる品である。当初、この円孔に紐を吊すと天地が逆になることから、脚部が天に向くものだと認識していた。このことについても付編で触れられている。こういった形状の品は全国的に珍しく、島根県でも斐川の三井II遺跡のそれに続く2例目であるとのことである。ただ、もしかしたら既に発掘調査され、コンテナに保管されている遺物の中にこの類ものが眠っているかもしれない、という感じをうけている。実際、今回、自分は荒神谷博物館の露梨さんに指摘されなければ今回のようには報告できなかつたと思うからである。今回の発見はそうゆう意味でも貴重な発見であったと思われる。今後類例が増加し、さらに比較検討できることを期待する。

註

※ 島根大学 赤坂正秀氏の御教示による。

参考文献

- 仁多町教育委員会：「墓地遺跡」『尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 2004
仁多町教育委員会：「埴屋遺跡・外」『尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』 2006
木次町教育委員会：「半田遺跡」『木次町文化財調査報告書 第4集』 1997
仁多町教育委員会：『下柳倉遺跡緊急発掘調査報告』 昭和56年
柳浦俊一：「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の上器編年」『島根考古学会誌』第17集 2000
島根県教育委員会：「楓ヶ坤遺跡」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3.』 2004
島根県教育委員会：「北原本郷遺跡1 - 1～3・6区」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7.』
2005
島根県教育委員会：「原田遺跡（2）-2区の調査」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8.』 2006
島根県教育委員会：「原田遺跡（3）-5～7区の調査」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10.』
2007

寺宇根遺跡 出土土器觀察表

器物番号	写真	出土地名	種別	備註	持土・土器式	通称	器形	口径 (cm)	高さ (cm)	手法・火候	施土	色・調	備考
22 1-1 PL14	SD1	海文土器	浅杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.5 明燒 内 7.5H 3.1 暗燒		
22 1-2 PL14	65	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 4.2 暗燒 内 5H 4.4 にぶい火候		
22 1-3 PL14	能石257	海文土器	盤	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 煙 内 7.5H 6.3 煙	焼成合心	
22 1-4 PL14	7H	海文土器	盤	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 5.4 にぶい火候 内 7.5H 5.1 焼辰		
22 1-5 PL14	6	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 2.1 暗燒 内 7.5H 2.1 暗燒		
22 1-6 PL14	SK3-6	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 5.4 にぶい火候 内 7.5H 5.1 暗燒	焼成工場によると 土器文	
22 1-7 PL14	76	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 5.4 にぶい火候 内 7.5H 5.1 暗燒	外側二段 内側一層	
22 1-8 PL14	9	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 5.4 にぶい火候 内 7.5H 5.1 暗燒	外側二段 内側一層	
22 1-9 PL14	9H	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 5.4 にぶい火候 内 7.5H 5.1 暗燒	外側二段 内側一層	
22 1-10 PL14	40	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 5.4 にぶい火候 内 7.5H 5.1 暗燒	外側二段 内側一層	
22 1-11 PL14	4	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 5.4 にぶい火候 内 7.5H 5.1 暗燒	外側二段 内側一層	
22 1-12 PL14	12H	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 5.4 にぶい火候 内 7.5H 5.1 暗燒	外側二段 内側一層	
22 1-13 PL14	2H	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	小片	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 5.4 にぶい火候 内 7.5H 5.1 暗燒	外側二段 内側一層	
23 1-1 PL14	1	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	1/2以下	-	24.0	-	内・外子	外 7.5H 6.4 混燒 内 7.5H 6.4 混燒	にぶい火候	
23 1-2 PL14	2	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-3 PL14	3	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-4 PL14	4	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-5 PL14	5	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-6 PL14	6	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-7 PL14	7	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-8 PL14	8	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-9 PL14	9	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-10 PL14	10H	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-11 PL14	11	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-12 PL14	12H	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-13 PL14	13	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-14 PL14	12	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	
23 1-15 PL15	SD1-1	海文土器	深杯	神奈佐式 縁無	中周	-	-	-	-	内・外子	外 7.5H 6.3 混燒 内 7.5H 6.3 混燒	にぶい火候	

井番号	番号	写真	出土地點	種別	器種	地盤土壤試験	表面状況	標高 (m)	深度 (m)	手法の特徴		地 土	色 調	備 考
										外 部 特 徴	内 部 特 徴			
23	W-16	PW-15	配石山17	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	2mm以上の 砂粒を多く含む	外 部 578.4	にぶい質感 内 部 578.4
23	W-17	PW-15	91	馬太土器	深鉢	中期	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.4	にぶい質感 内 部 578.4
23	W-18	PW-15	901	馬太土器	深鉢	中期	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.4	にぶい質感 内 部 578.4
24	W-1	PW-16	配石山17	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.5	にぶい質感 内 部 578.5
24	W-2	PW-16	901	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	1/2切下	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.5	にぶい質感 内 部 578.5
24	W-3	PW-15	901	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	3.0	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.5	にぶい質感 内 部 578.5
24	W-4	PW-15	163	馬太土器	瓦片	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.5	にぶい質感 内 部 578.5
24	W-5	PW-15	163	馬太土器	瓦片	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.5	にぶい質感 内 部 578.5
24	W-6	PW-16	10104	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.6	にぶい質感 内 部 578.6
24	W-7	PW-15	9	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.7	にぶい質感 内 部 578.7
24	W-8	PW-15	103	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.8	にぶい質感 内 部 578.8
24	W-9	PW-15	66	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	23.0	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 578.9	にぶい質感 内 部 578.9
24	W-10	PW-16	配石山17	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	1/2切下	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.0	にぶい質感 内 部 579.0
24	W-11	PW-16	901	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.1	にぶい質感 内 部 579.1
24	W-12	PW-16	76	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.2	にぶい質感 内 部 579.2
24	W-13	PW-15	94	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.3	にぶい質感 内 部 579.3
24	W-14	PW-16	91	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.4	にぶい質感 内 部 579.4
24	W-15	PW-16	901	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.5	にぶい質感 内 部 579.5
24	W-16	PW-16	10104	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.6	にぶい質感 内 部 579.6
24	W-17	PW-16	103	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	1/2切下	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.7	にぶい質感 内 部 579.7
24	W-18	PW-16	901	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.8	にぶい質感 内 部 579.8
24	W-19	PW-16	533104	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.9	にぶい質感 内 部 579.9
24	W-20	PW-16	103	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 580.0	にぶい質感 内 部 580.0
24	W-21	PW-16	103	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 580.1	にぶい質感 内 部 580.1
24	W-22	PW-16	901	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 580.2	にぶい質感 内 部 580.2
25	W-23	PW-16	104	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	7.0	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.6	にぶい質感 内 部 579.6
25	W-24	PW-16	配石山17	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.7	にぶい質感 内 部 579.7
25	W-25	PW-16	94	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.8	にぶい質感 内 部 579.8
25	W-26	PW-16	74	馬太土器	深鉢	後期 五重圓筒式 (中古期)	小片	-	-	外 部 ナ 子	内 部 無 欠	砂粒を多く含む	外 部 579.9	にぶい質感 内 部 579.9

地図番号	等級	出土品名	種類	形態	新石器土器形式	直徑 (cm)	口径 (cm)	壁厚 (cm)	手法の特徴	施土	質
33 V-29	Pu22	44	縦文土器	深鉢	Pu22	—	24.0	—	内: ミガキ 外: ミガキ 口部に横溝・縫文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-30	Pu22	4	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ミガキ 外: ナラ 口部に弧と直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-31	Pu22	4	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ナラ 口部に横溝・縫文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-32	Pu22	44	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ミガキ 外: ミガキ 口部に斜溝・直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-33	Pu22	8	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-34	Pu22	11H	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-35	Pu22	10W	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-36	Pu22	S01	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に斜溝	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-37	Pu22	9	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-38	Pu22	配石ニア	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-39	Pu22	7L.T	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-40	Pu22	5K(1)	縦文土器	深鉢	Pu22	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-41	Pu23	3H	縦文土器	深鉢	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-42	Pu23	10H	縦文土器	深鉢	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-43	Pu23	配石ニア	縦文土器	深鉢	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-44	Pu23	S07-12	縦文土器	深鉢	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-45	Pu23	5J	土器底	棒状	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
33 V-46	Pu23	配石ニア	縦文土器	深鉢	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-47	Pu23	B-1	棒生土器	土器	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-48	Pu23	B-H	棒生土器	土器	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-49	Pu23	T-4	棒生土器	土器	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-50	Pu23	5.G	棒生土器	土器	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-51	Pu23	6.1	棒生土器	土器	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-52	Pu23	12.H	棒生土器	土器	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-53	Pu23	4.G	外生土器	土器	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-54	Pu23	6.H	外生土器	広口壺	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-55	Pu23	6.G	外生土器	壺	Pu23	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-56	Pu24	4.1	外生土器	壺	Pu24	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色
34 V-57	Pu24	4.0	外生土器	壺	Pu24	—	—	—	内: ナラ 外: ナラ 口部に直溝文	内部下の 砂粒含むC	褐色

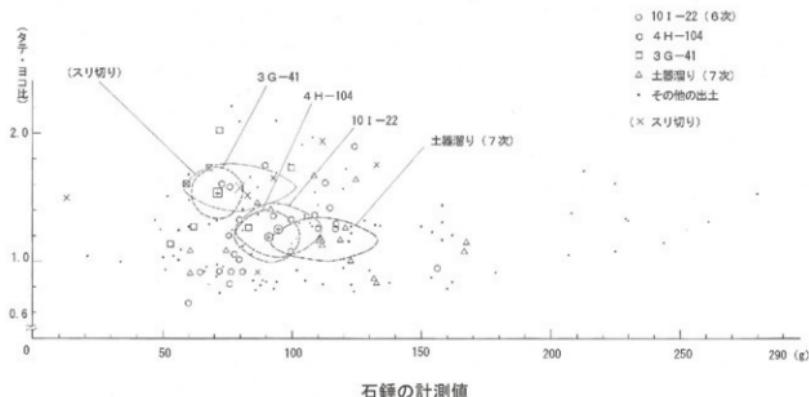
種別	番号	写真	出土場所	埋 引 形 式	附 屬 器 材	調 定 状 況	器 種	口徑 (cm)	底径 (cm)	手取 物	地 土		備 考
											内	外	
香炉	27 14	P425	SKC1	縫文土器 深鉢		1.7cm以下	-	15.8	-	内 ナ子	3.97/6	底2.07cmの外 内 1987.6 無底鉢(?) 1987.6 地質 1.5cm以下	底付高
	27 15	P425	SKC2	縫文土器 深鉢		1.7cm以下	-	44.1	-	内 ナ子	2.57/2	底付鉢(?) 1987.4 地質 1.5cm以下	底付高
	37 16	P425	341	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	29.8	-	内 ナ子	2.97/2	底付鉢(?) 1987.4 地質 2.7cm以下	底付高
	38 17	P425	SK41土器C	縫文土器 深鉢		1.7cm以下	-	29.6	-	内 ナ子	2.97/2	底付鉢(?) 1987.4 地質 2.5cm以下	底付高
	38 18	P425	SK41-6	縫文土器 深鉢		1.7cm以下	-	27.4	-	内 ナ子	3.97/6	底付鉢(?) 1987.4 地質 2.7cm以下	底付高
	38 19	P425	51	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	21.5	-	内 ナ子	2.57/3	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 20	P425	紀石アリゾ	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	18.8	-	内 ナ子	4.98/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 21	P425	SK41土器D	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	-	-	内 ア子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 22	P425	SKC1	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	17.2	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 23	P425	40	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	15.0	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 24	P425	SKC1	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	25.4	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 25	P426	紀石アリゾ	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	18.4	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 26	P426	SKC1	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	21.6	-	内 ナ子	3.97/1	底付鉢(?) 1987.1 地質 1.5cm以下	底付高
	38 27	P426	41	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	-	-	内 ナ子	3.97/3	底付鉢(?) 1987.3 地質 1.5cm以下	底付高
	38 28	P426	SKC4	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	22.8	-	内 ナ子	3.97/3	底付鉢(?) 1987.3 地質 1.5cm以下	底付高
	38 29	P426	SKC1	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	32.8	-	内 ケアリ	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 30	P426	SKC4	縫文土器 深鉢		1.7cm以下	-	25.5	-	内 ナ子	4.98/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	39 31	P426	51	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	20.6	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 32	P426	SKC1	縫文土器 深鉢		1.7cm以下	-	36.0	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	39 33	P426	SKC1	縫文土器 深鉢		1.7cm以下	-	18.2	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 34	P426	新レ12	縫文土器 深鉢		1.7cm以下	-	31.4	-	内 ケアリ	3.97/4	底付鉢(?) 1987.4 地質 1.5cm以下	底付高
	38 35	P426	SKC1	縫文土器 深鉢		1.7cm以下	-	24.6	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 36	P426	301	縫文土器 深鉢		1.7cm以下	-	13.4	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 37	P426	新レ12	縫文土器 深鉢		1.7cm以上	-	32.4	-	内 ケアリ	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	38 38	P426	SKC1	縫文土器 深鉢		1.7cm以上	-	25.0	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	39 39	P426	SKC1	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	18.0	-	内 ケアリ	3.97/4	底付鉢(?) 1987.4 地質 1.5cm以下	底付高
	38 40	P426	341	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	25.0	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	39 41	P426	SK40-A	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	21.0	-	内 ケアリ	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高
	40 42	P426	SKC1	縫文土器 深鉢		6.0cm	-	24.6	-	内 ナ子	3.97/2	底付鉢(?) 1987.2 地質 1.5cm以下	底付高

地図番号	番号	実質	出土地点	種別	器種	焼附土器形式	通断形	断面	口径	通径	手法の特徴	胎土	色調	備考
41	22	P4.27	SK6+1	陶文土器	小片	—	—	外 ナデ	8.4	外 ナデ	外 10.9H 7.4 にいよい質變 内 10.9H 7.3 にいよい質變	外 10.9H 7.4 にいよい質變 内 10.9H 7.3 にいよい質變	外 10.9H 7.4 にいよい質變 内 10.9H 7.3 にいよい質變	
41	23	P4.27	3G	陶文土器	小片	—	—	内 ケズリ	—	内 ケズリ	外 10.9H 7.4 にいよい質變 内 10.9H 7.3 にいよい質變	外 10.9H 7.4 にいよい質變 内 10.9H 7.3 にいよい質變	外 10.9H 7.4 にいよい質變 内 10.9H 7.3 にいよい質變	
41	24	P4.27	4H	陶文土器	小片	—	—	内 ケズリ ナデ	—	内 ケズリ ナデ	外 10.9H 6.2 底削開	外 10.9H 6.2 底削開	外 10.9H 6.2 底削開	
41	25	P4.27	4H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 6.2 底削	外 2.5H 6.2 底削	外 2.5H 6.2 底削	
41	26	P4.27	10K	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 6.2 底削	外 2.5H 6.2 底削	外 2.5H 6.2 底削	
41	27	P4.27	10K+10	陶文土器	小片	—	—	外 ナデ	18.2	外 ナデ	外 2mm以下 内 2mm以下	外 2mm以下 内 2mm以下	外 2mm以下 内 2mm以下	
41	28	P4.27	S10K	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	29	P4.27	SD1	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	30	P4.27	4H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	31	P4.27	4H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	32	P4.27	S101	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	33	P4.20	1G	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	34	P4.20	1G	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	35	P4.20	1H	陶文土器	小片	—	—	内 ケズリ ナデ	—	内 ケズリ ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	36	P4.20	1H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	37	P4.26	12H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	38	P4.26	8G3	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
41	39	P4.26	9H	陶文土器	小片	—	—	内 ケズリ	—	内 ケズリ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
42	40	P4.26	9H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
42	41	P4.26	7~8H	陶文土器	小片	—	—	内 ケズリ	—	内 ケズリ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
42	42	P4.26	7H	陶文土器	小片	—	—	内 ケズリ	—	内 ケズリ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
42	43	P4.26	7H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
42	43	P4.26	4H	陶文土器	小片	—	—	内 ケズリ	—	内 ケズリ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
42	44	P4.26	9H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
42	45	P4.26	7G	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
42	46	P4.26	7H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	
42	47	P4.26	9H	陶文土器	小片	—	—	外 三万	—	外 三万	外 10.9H 7.4 にいよい質變	外 10.9H 7.4 にいよい質變	外 10.9H 7.4 にいよい質變	
42	48	P4.26	8H	陶文土器	小片	—	—	内 ケズリ	—	内 ケズリ	外 2.5H 6.2 底削	外 2.5H 6.2 底削	外 2.5H 6.2 底削	
42	49	P4.26	9H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 6.2 底削	外 2.5H 6.2 底削	外 2.5H 6.2 底削	
42	50	P4.26	6H	陶文土器	小片	—	—	内 ナデ	—	内 ナデ	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	外 2.5H 7.2 底削	

42	51	P-28	蛇石工17	獨立土壘		小片	-	-	4.5 外 内 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	52	P-28	67	獨立土壘		小片	-	-	5.8 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	53	P-28	104	獨立土壘		小片	-	-	10.0 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	54	P-28	Ska-2	獨立土壘		小片	-	-	7.6 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	55	P-28	44	獨立土壘		小片	-	-	5.3 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	56	P-28	119	獨立土壘		小片	-	-	5.9 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	57	P-28	139	獨立土壘		小片	-	-	6.0 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	58	P-28	45	獨立土壘		小片	-	-	8.0 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	59	P-28	44	獨立土壘		小片	-	-	7.4 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	60	P-28	44	獨立土壘		小片	-	-	7.6 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	61	P-28	44	獨立土壘		小片	-	-	8.4 外 イズリ ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	62	P-28	Ska-1	獨立土壘		小片	-	-	9.6 外 不明	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	63	P-28	Ska-1	獨立土壘		小片	-	-	9.4 外 イズリ	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	64	P-28	Ska-1	獨立土壘		小片	-	-	7.1 外 イズリ ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	65	P-28	35	獨立土壘		小片	-	-	9.2 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	66	P-28	12	蛇石工17	獨立土壘	小片	-	-	7.6 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	67	P-28	12	獨立土壘		小片	-	-	8.8 外 不明	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	68	P-28	119	獨立土壘		小片	-	-	8.0 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	69	P-28	44	獨立土壘		小片	-	-	9.8 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	70	P-28	35	獨立土壘	瓦砾	小片	-	-	6.0 外 不明	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	71	P-28	111	獨立土壘	瓦砾	小片	-	-	6.2 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	72	P-28	5C-6	獨立土壘		小片	-	-	- 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	73	P-28	108	獨立土壘		小片	-	-	- 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	
42	74	P-28	50	獨立土壘		小片	-	-	5.0 外 ナ子	内 2.37 8.0 外 5.98 6.0 内 10.98 7.0	にぶく黒縁付~10.6 6.0 滴液	



図1 周辺の遺跡（縄文期）



石锤の計測値

出土地	個体数	平均 値 (M)		偏 差 値	
		重量 (g)	タテ・ヨコ比	重量 (g)	タテ・ヨコ比
10 I-22 (6次)	14	94.79	1.247	25.00	0.300
4 H-104	10	91.20	1.193	18.61	0.314
3 G-41	7	71.00	1.530	14.85	0.298
土器溜り (7次)	15	112.33	1.175	31.65	0.250
斧切り	8	81.00	1.570	33.80	0.280

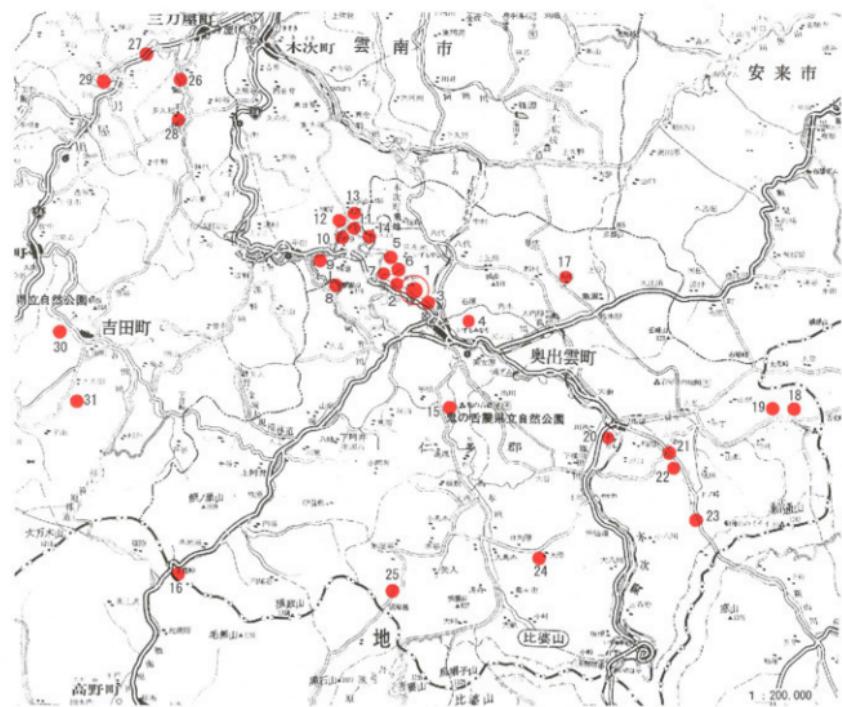


図2 斐伊川中～上流域の遺跡（縄文期）

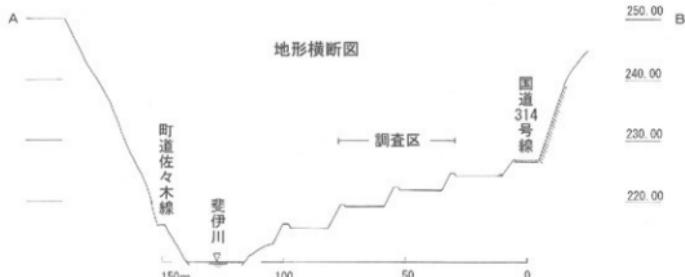
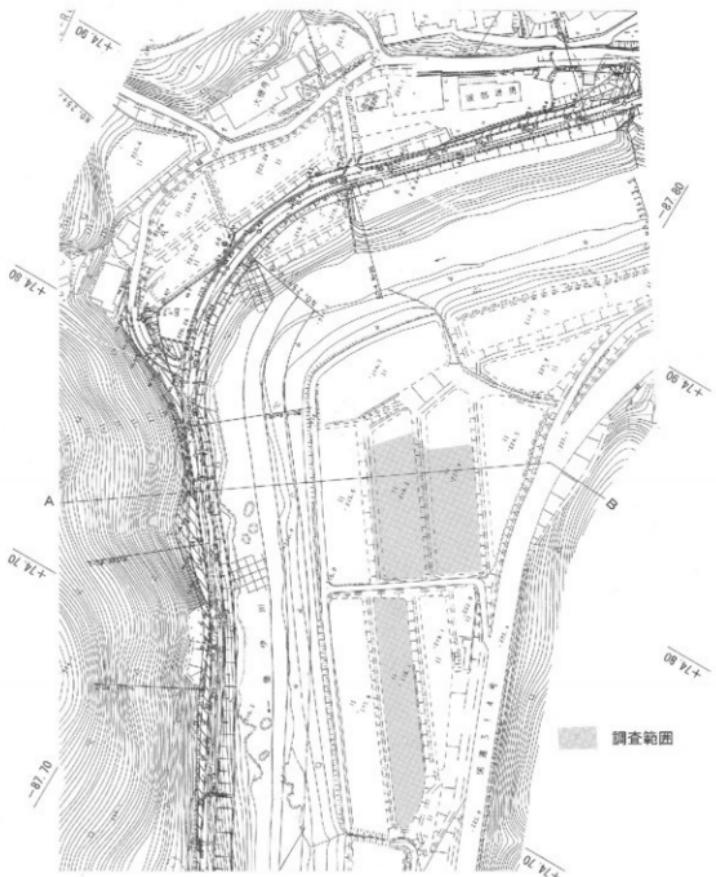
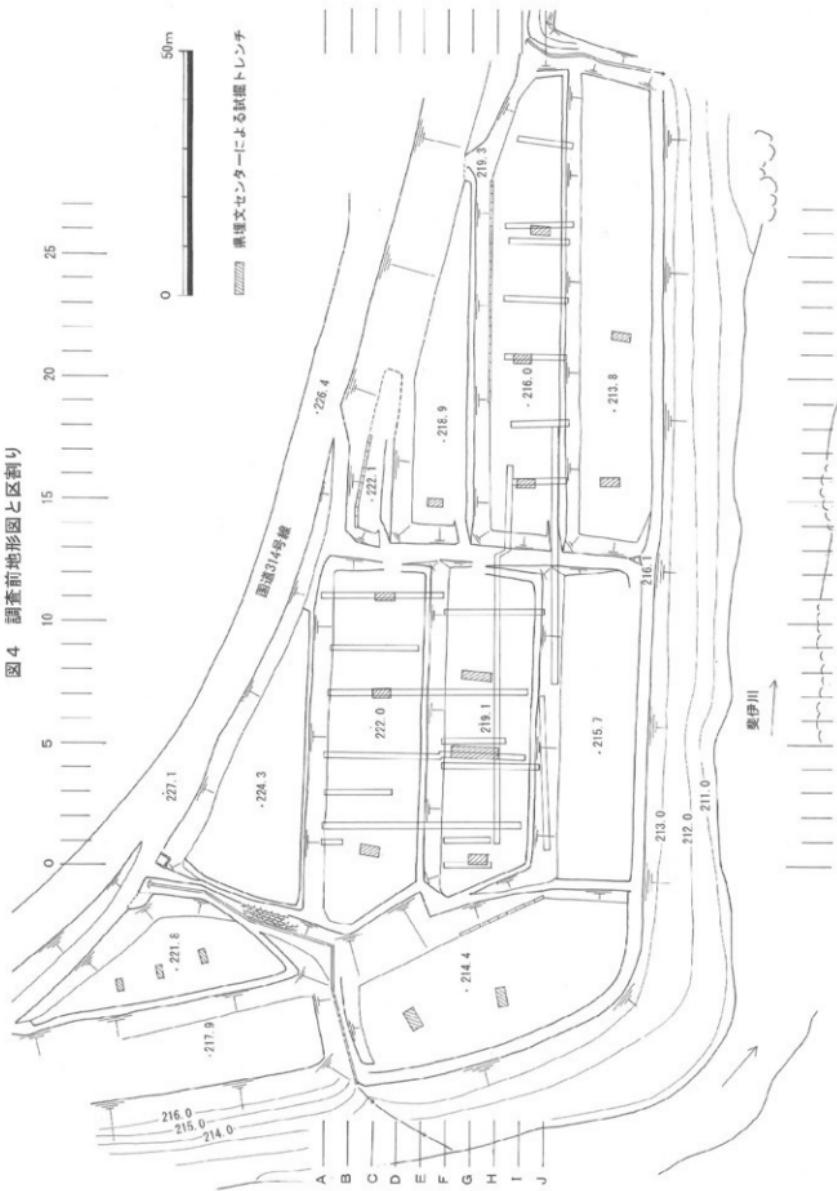


図3 地形図

図4 調査前地形図と区割り



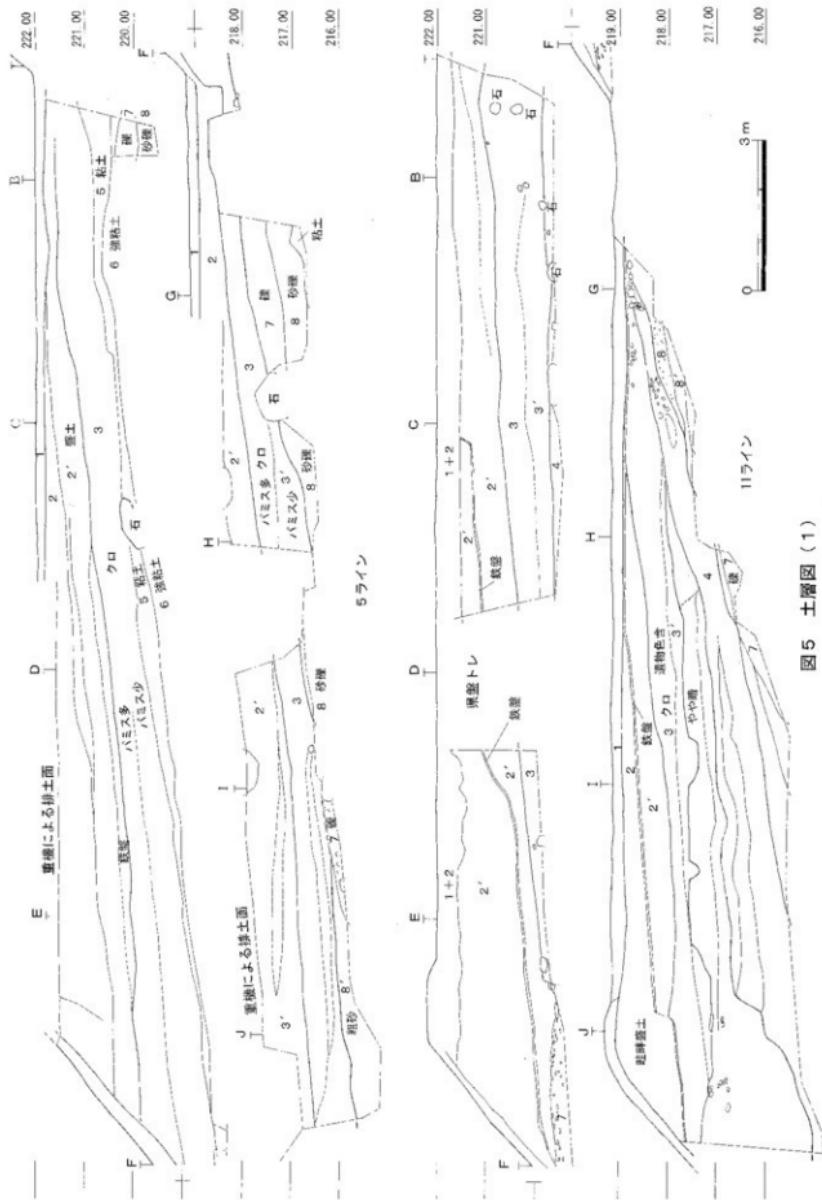


図5 土層図(1)

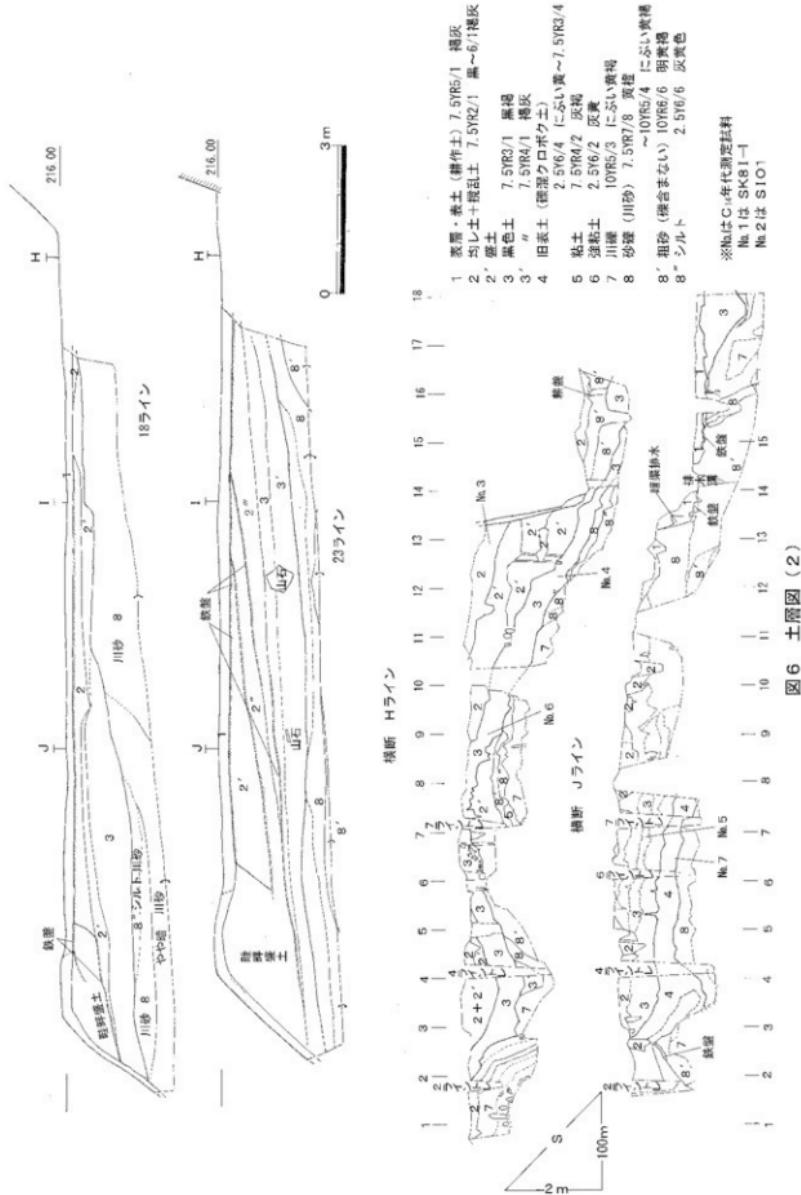
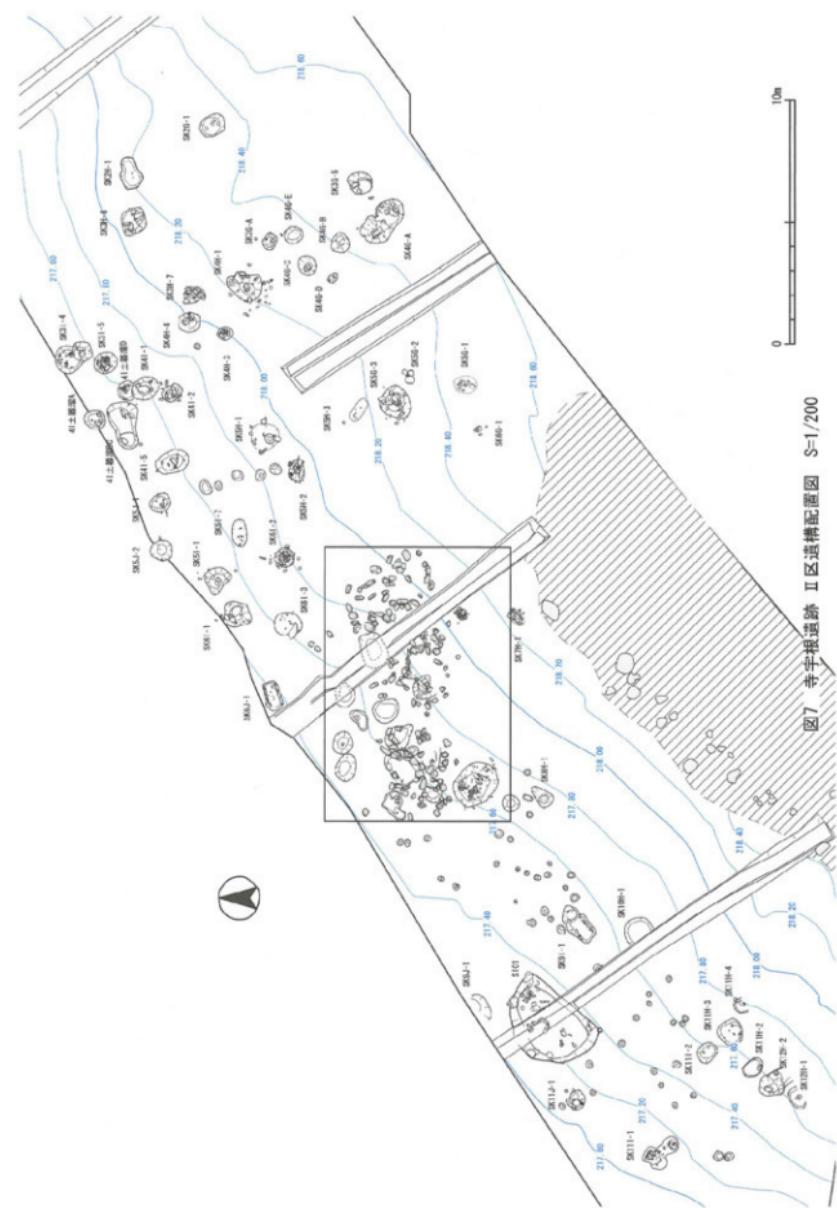


図6 土層図(2)

图7 辛宇根道路Ⅱ区道路配面图 S=1/200



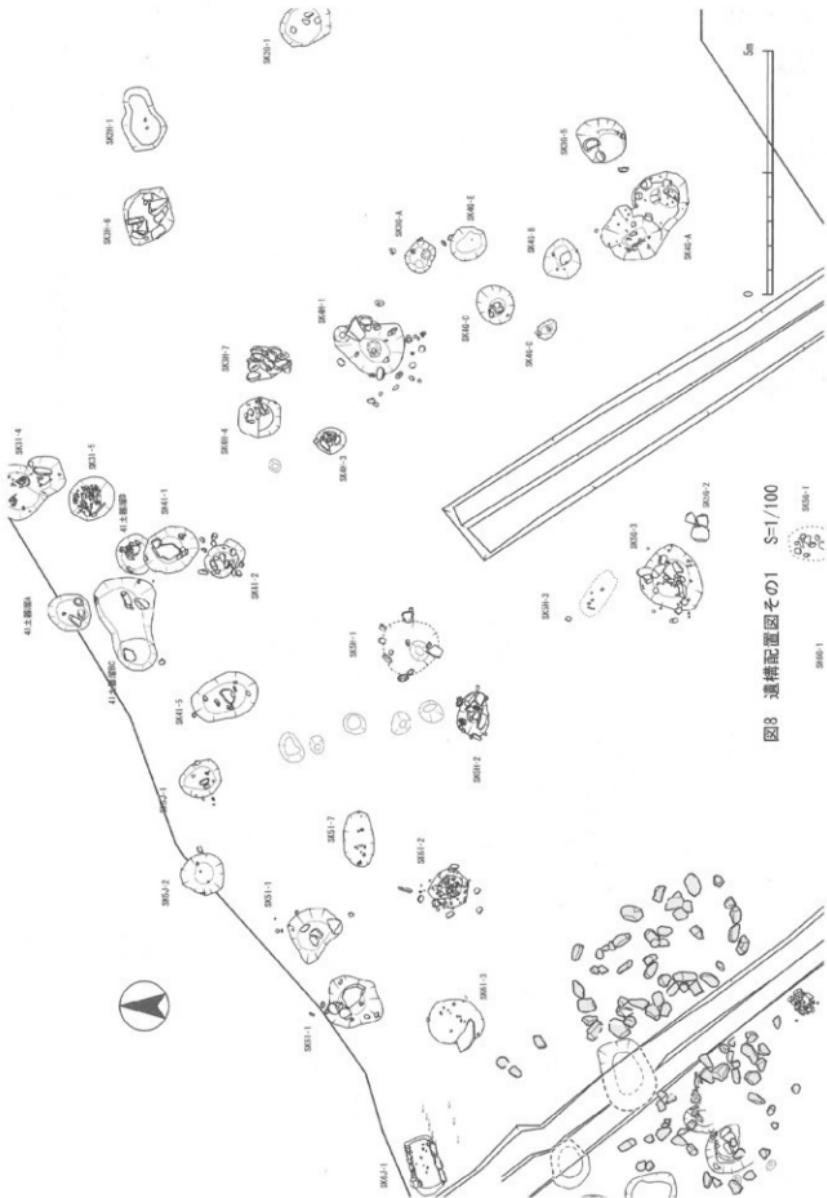


図8 遺構配置図その1 S=1/100

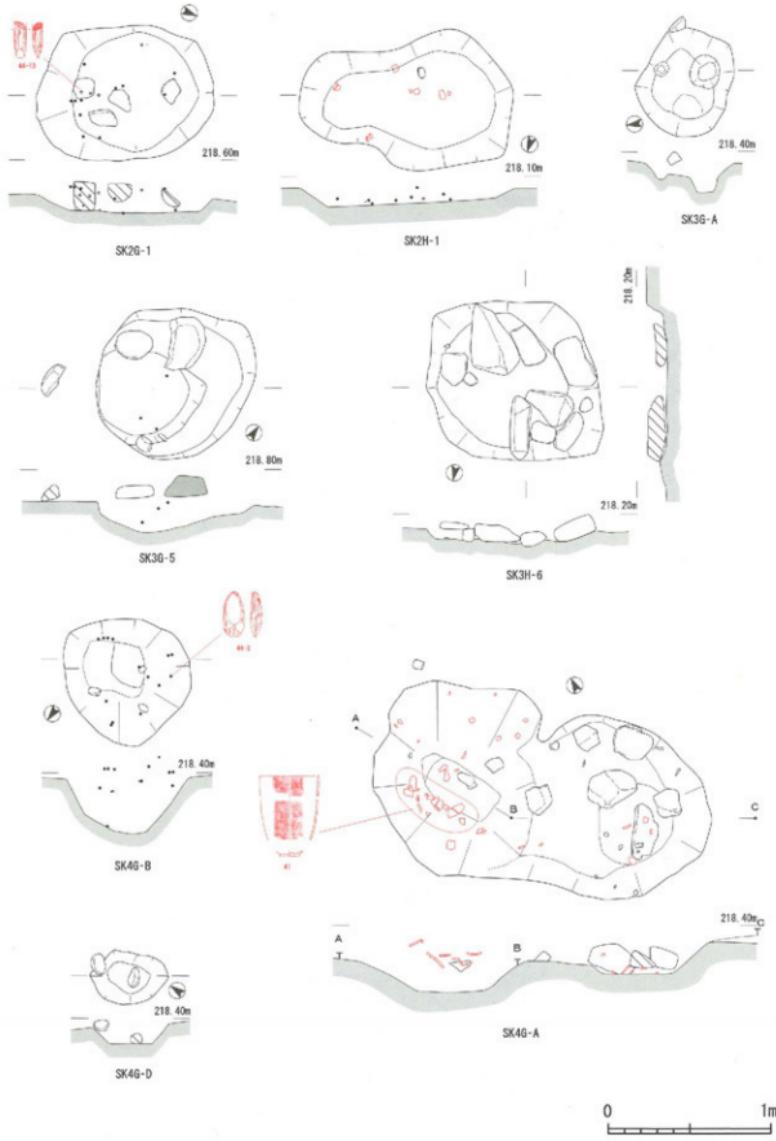


図10 SK詳細図 (1) S=1/30

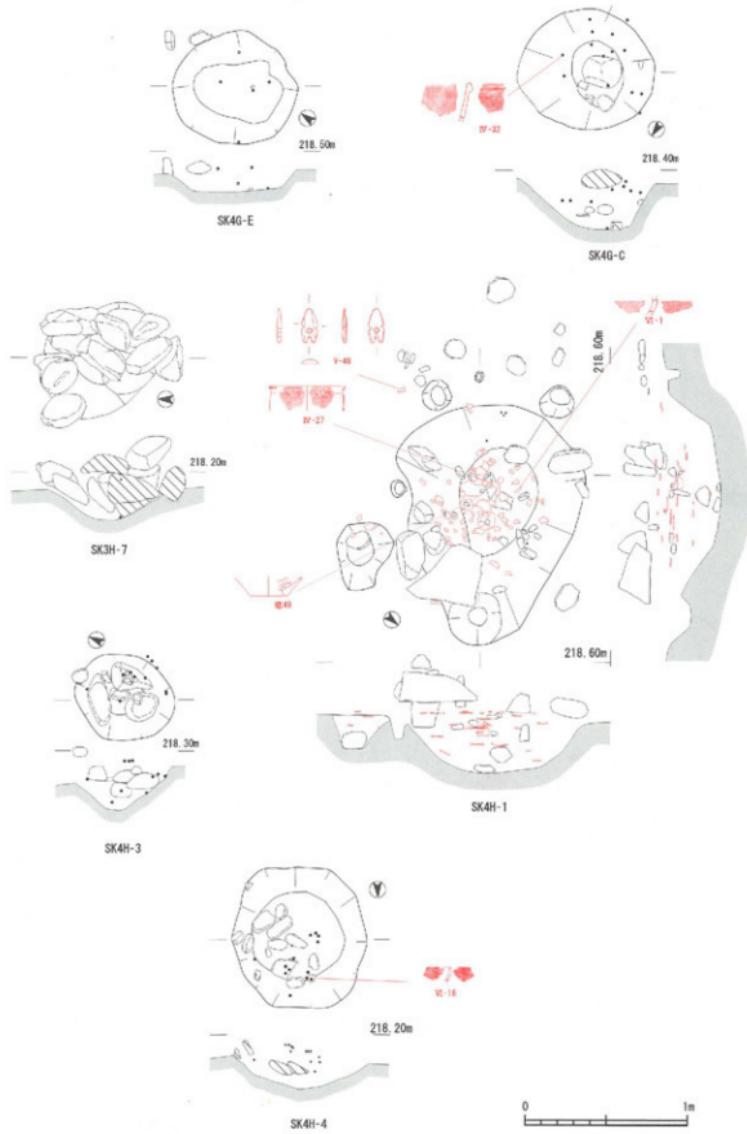


図11 SK詳細図(2) S=1/30

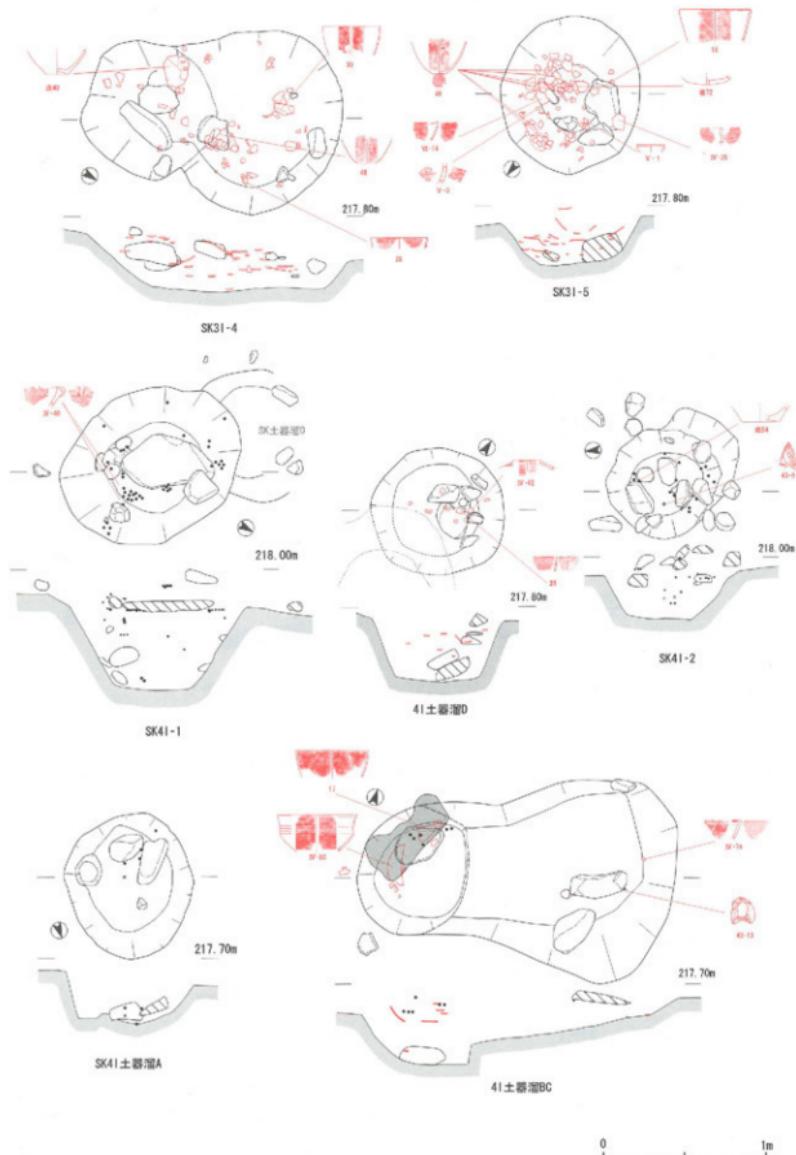


図12 SK詳細図 (3) S=1/30

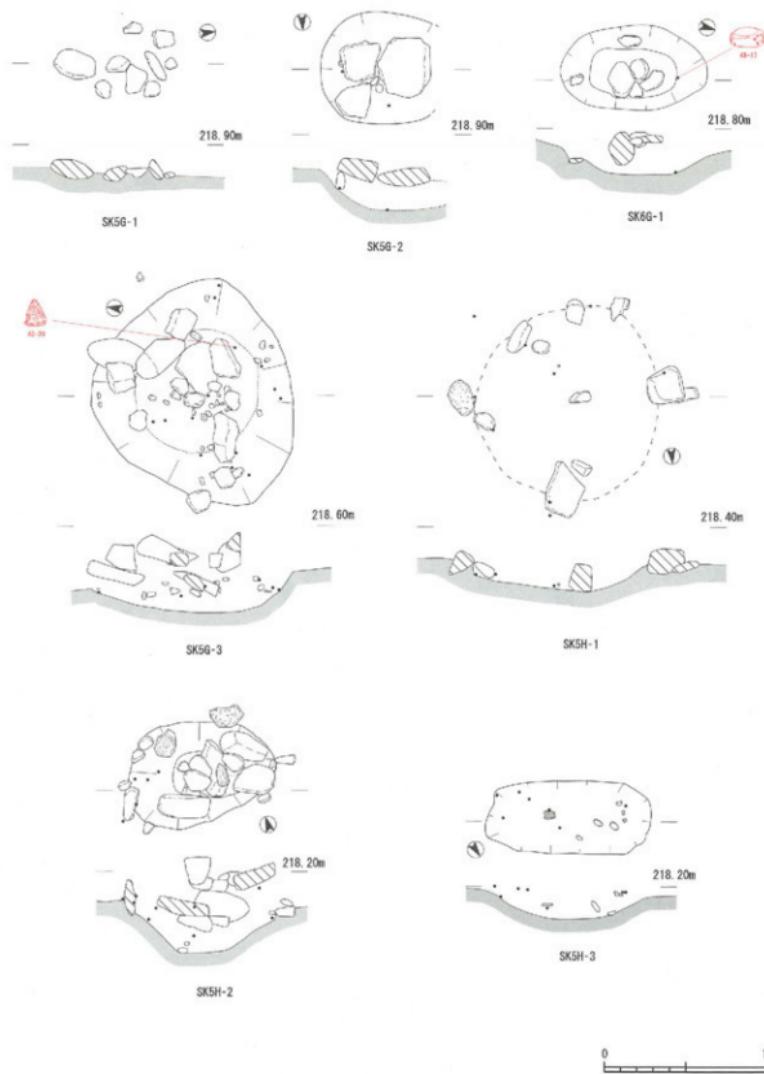


図13 SK詳細図 (4) S=1/30

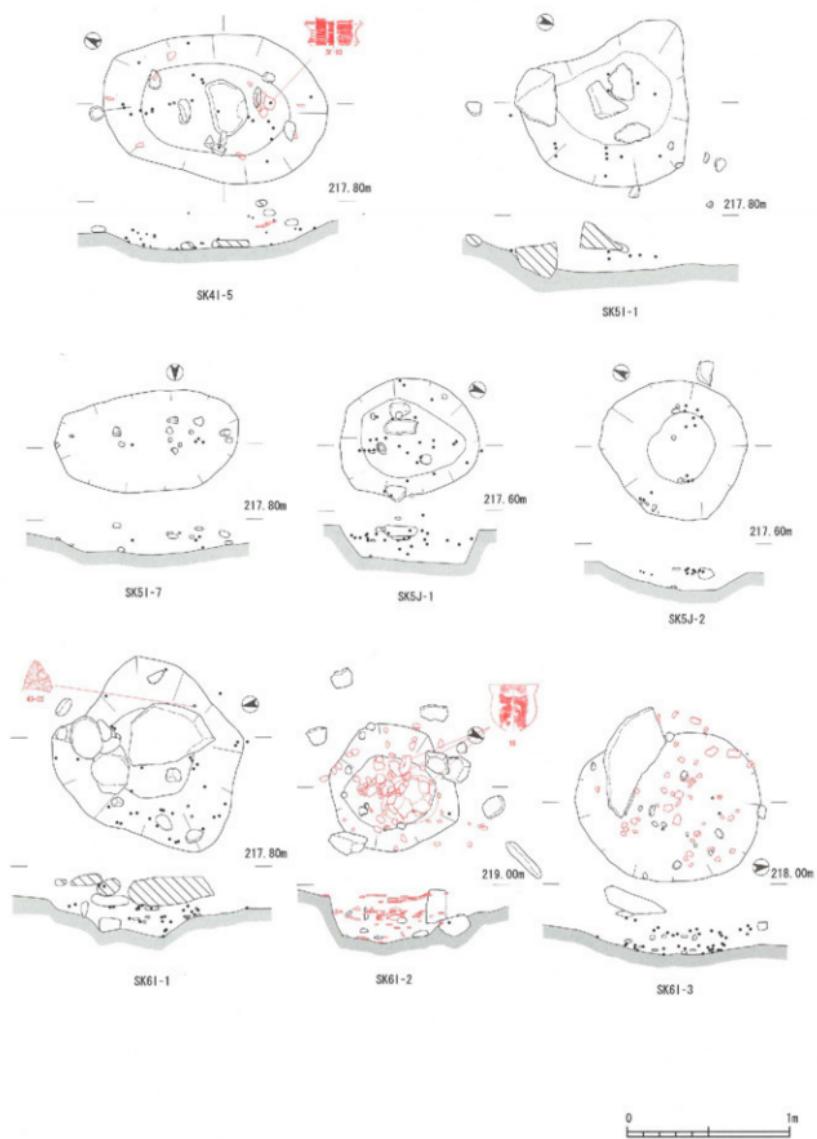


図14 SK詳細図 (5) S=1/30

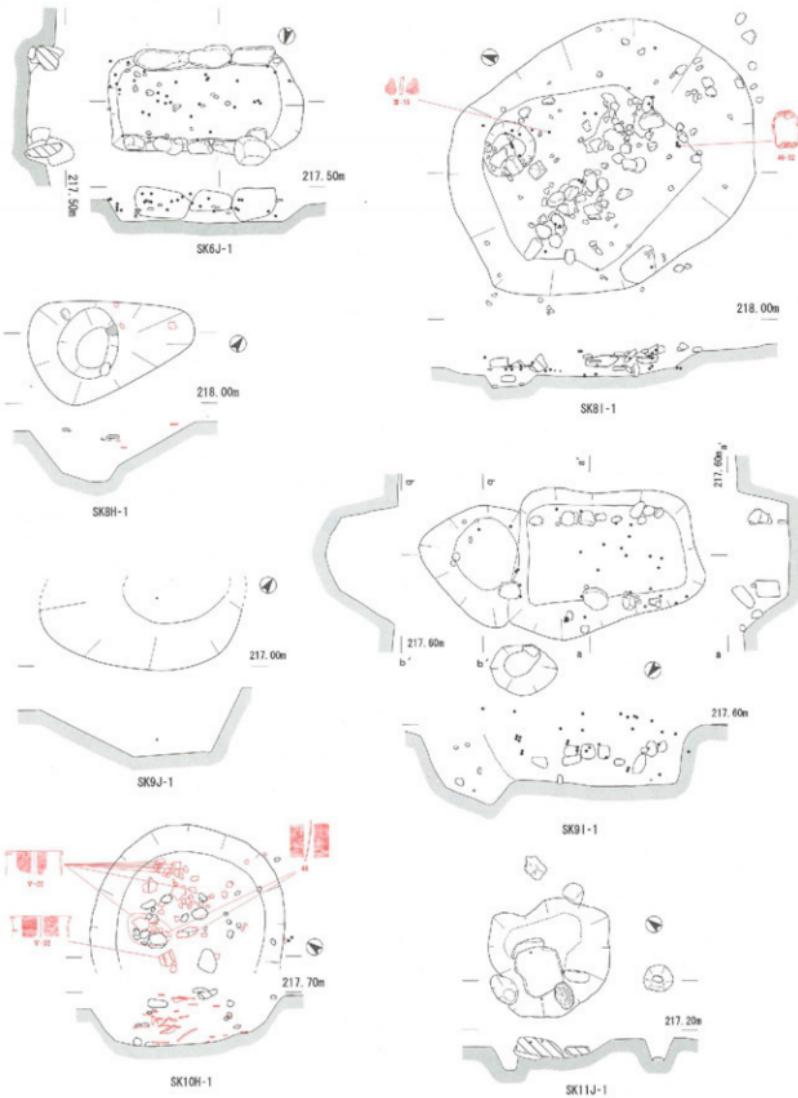


図15 SK詳細図 (6) S=1/30

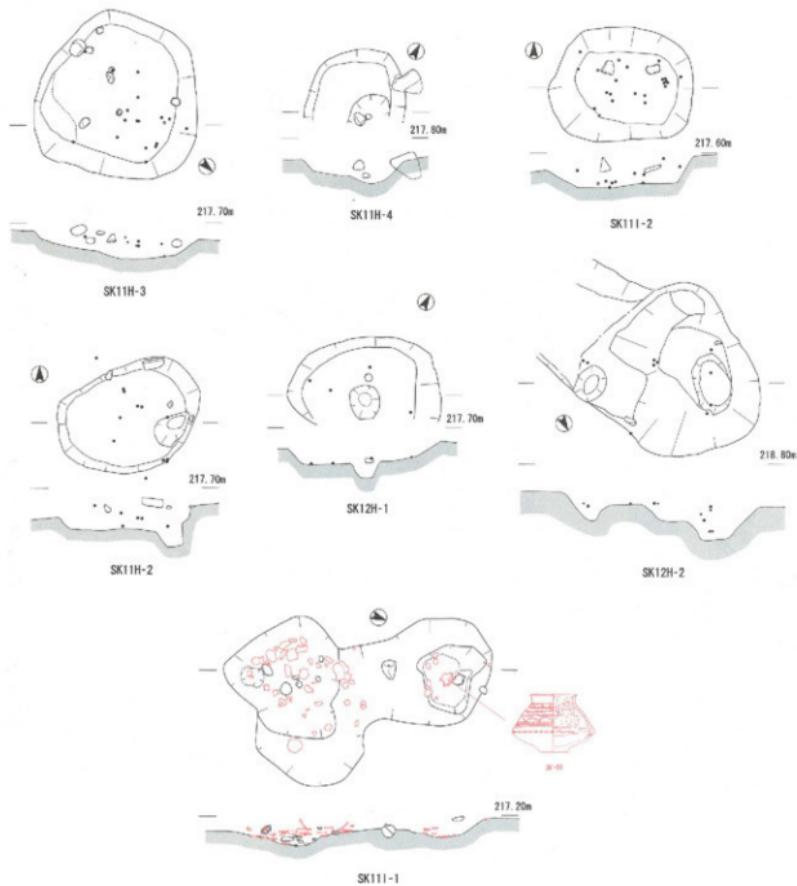


図16 SK詳細図 (7) S=1/30

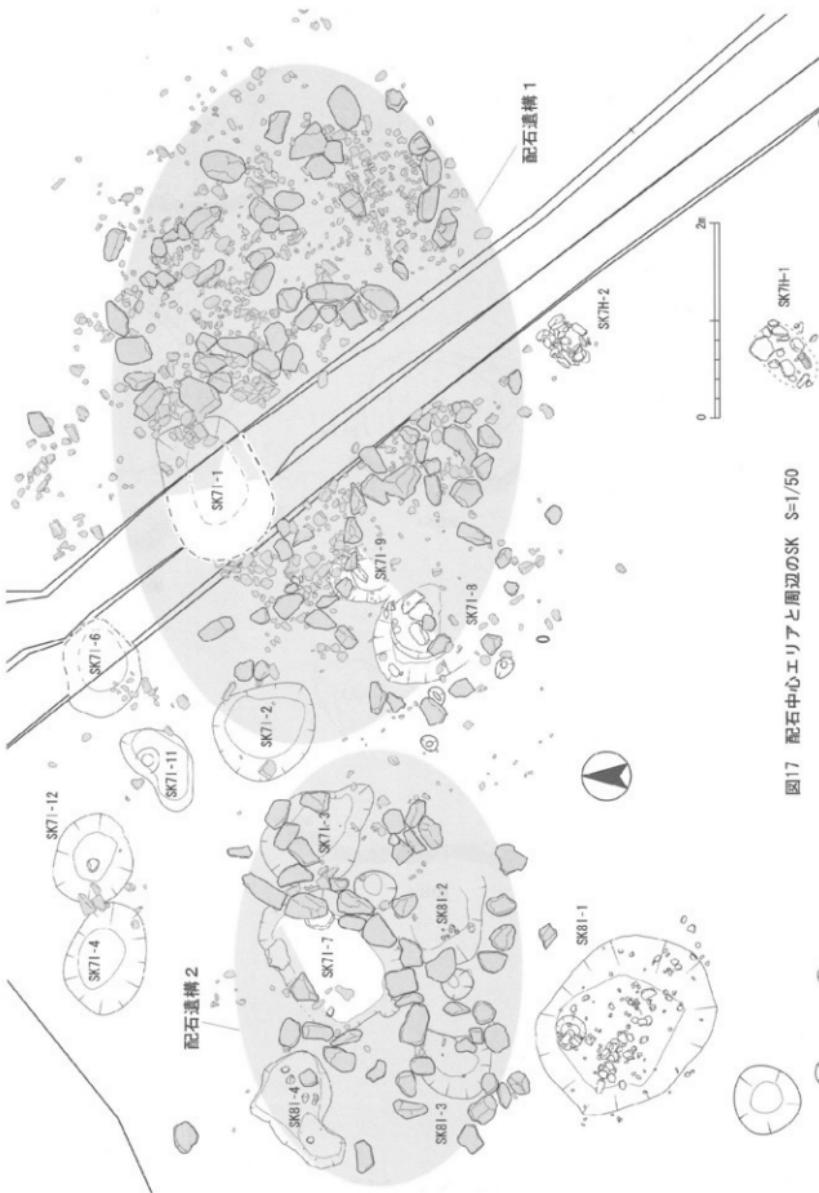


図17 配石中心エリアと周辺のSK S=1/50

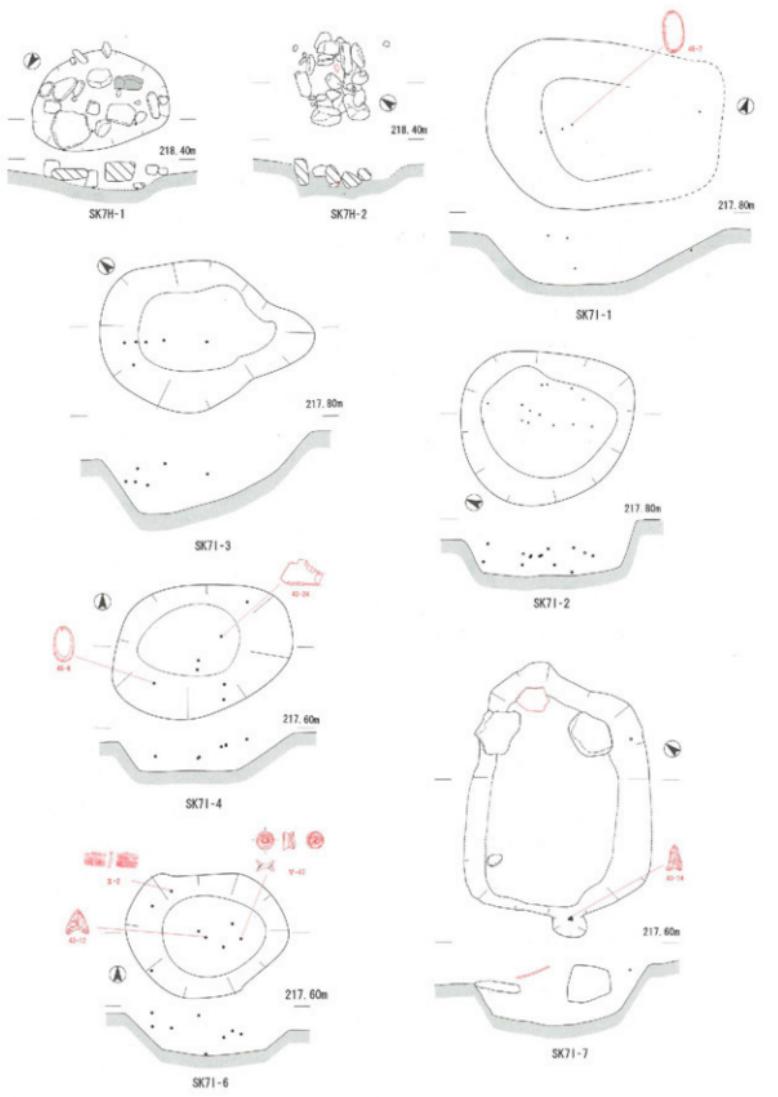


図18 SK詳細図(8) S=1/30



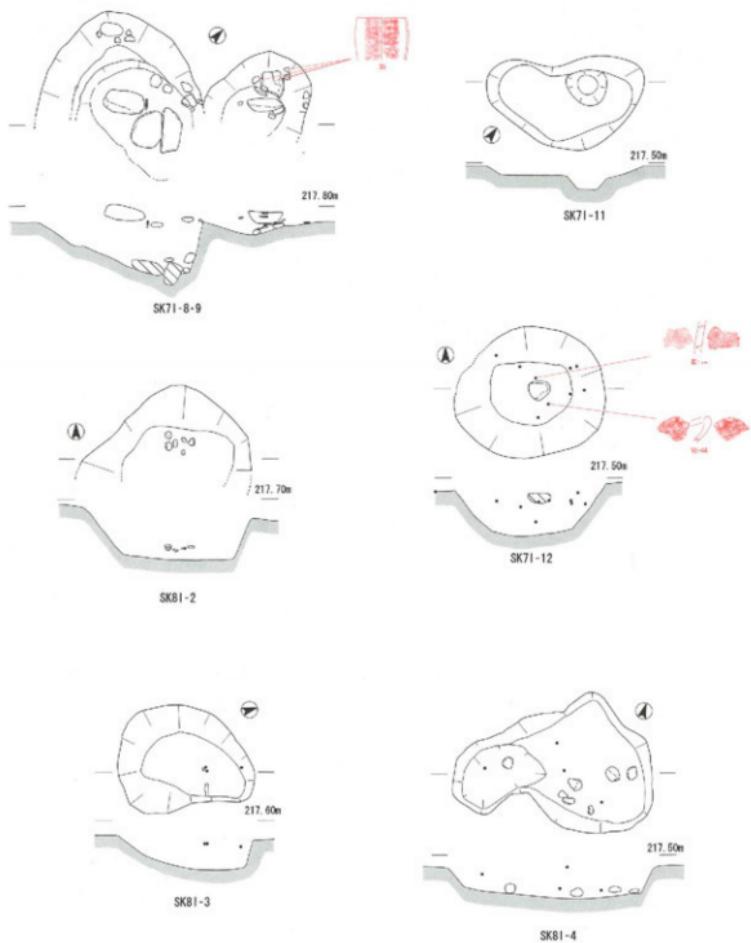


図19 SK詳細図 (9) S=1/30



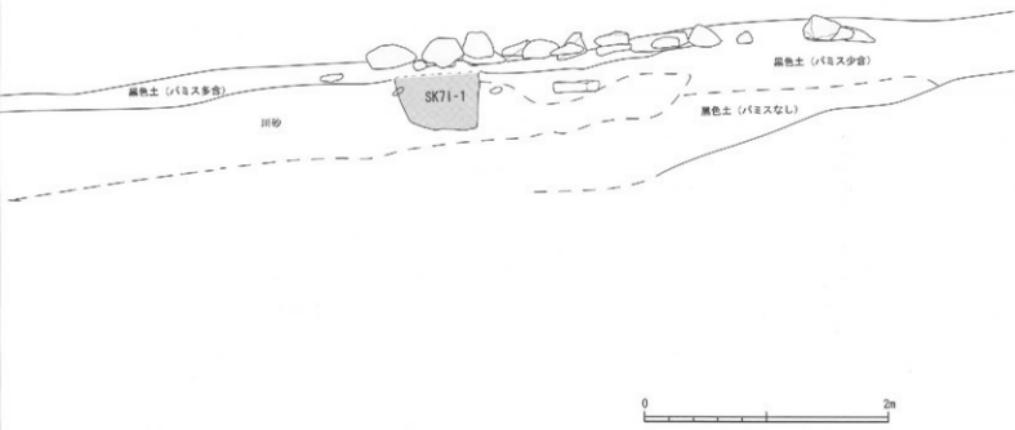
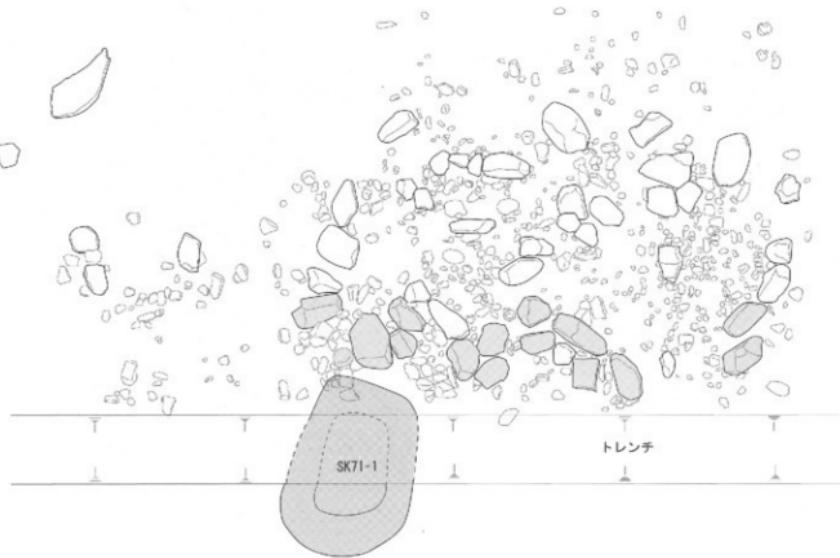


図20 配石遺構とSK71-1 S=1/40

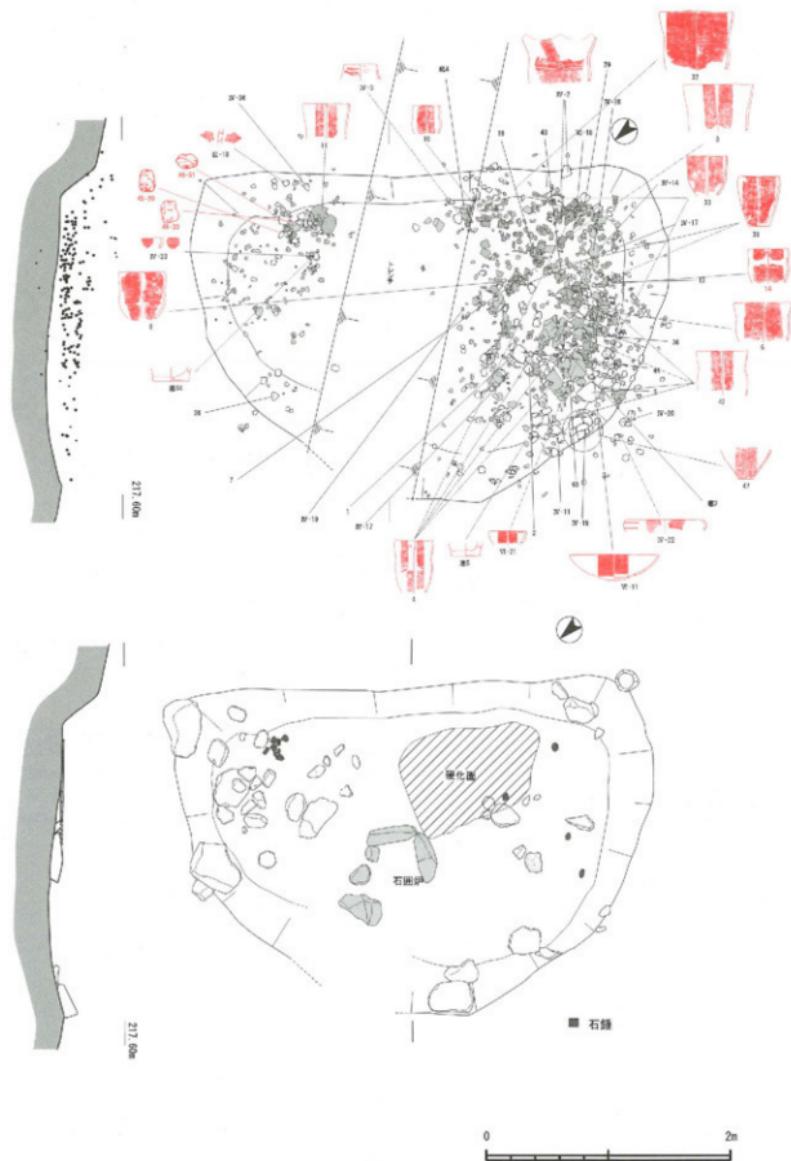
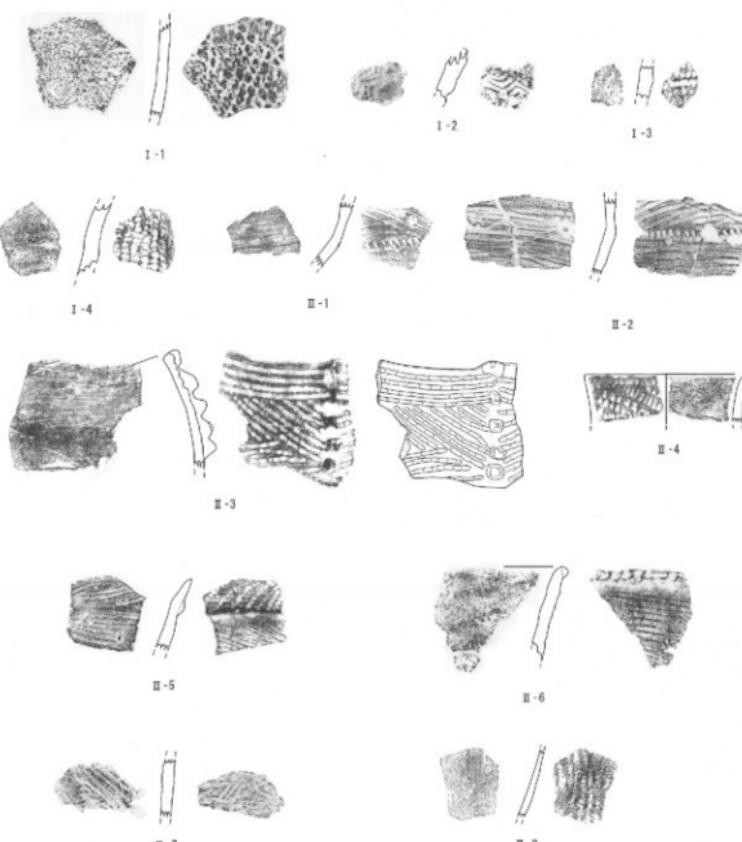


図21 SI01 S=1/40



0 10cm
1/3

図22 遺物図(1)

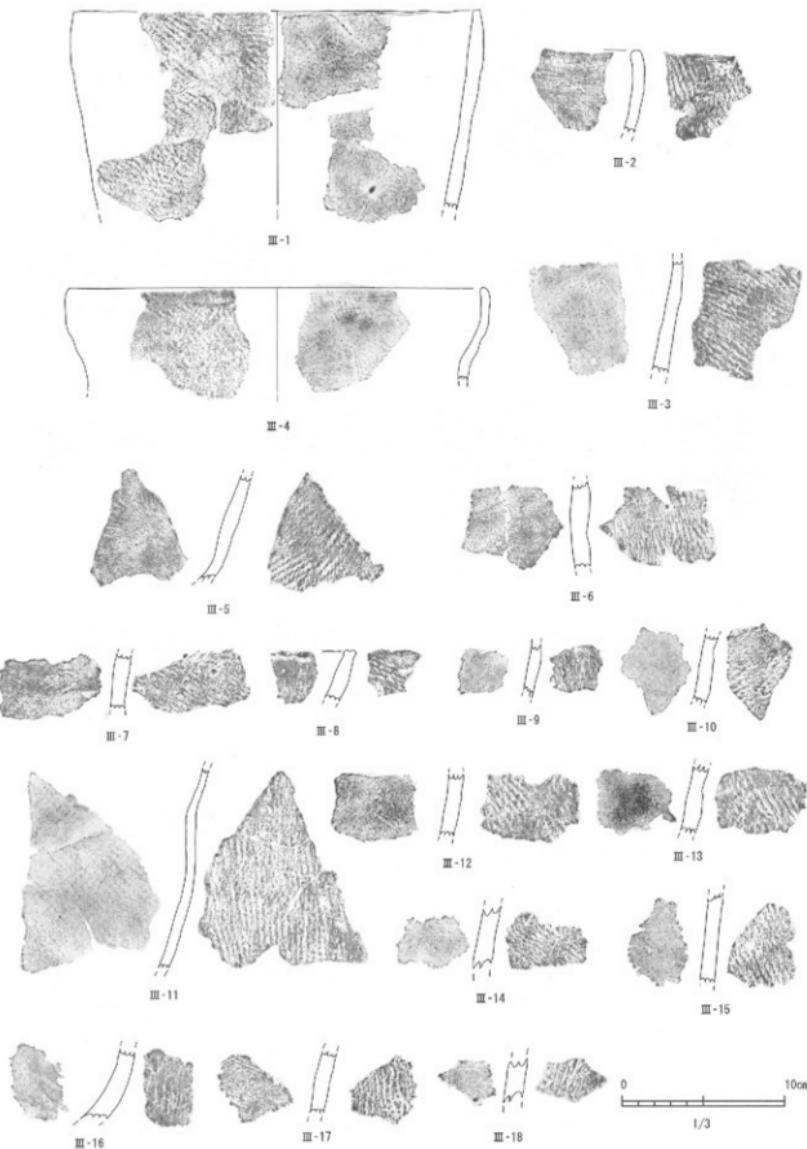


図23 遺物図(2)

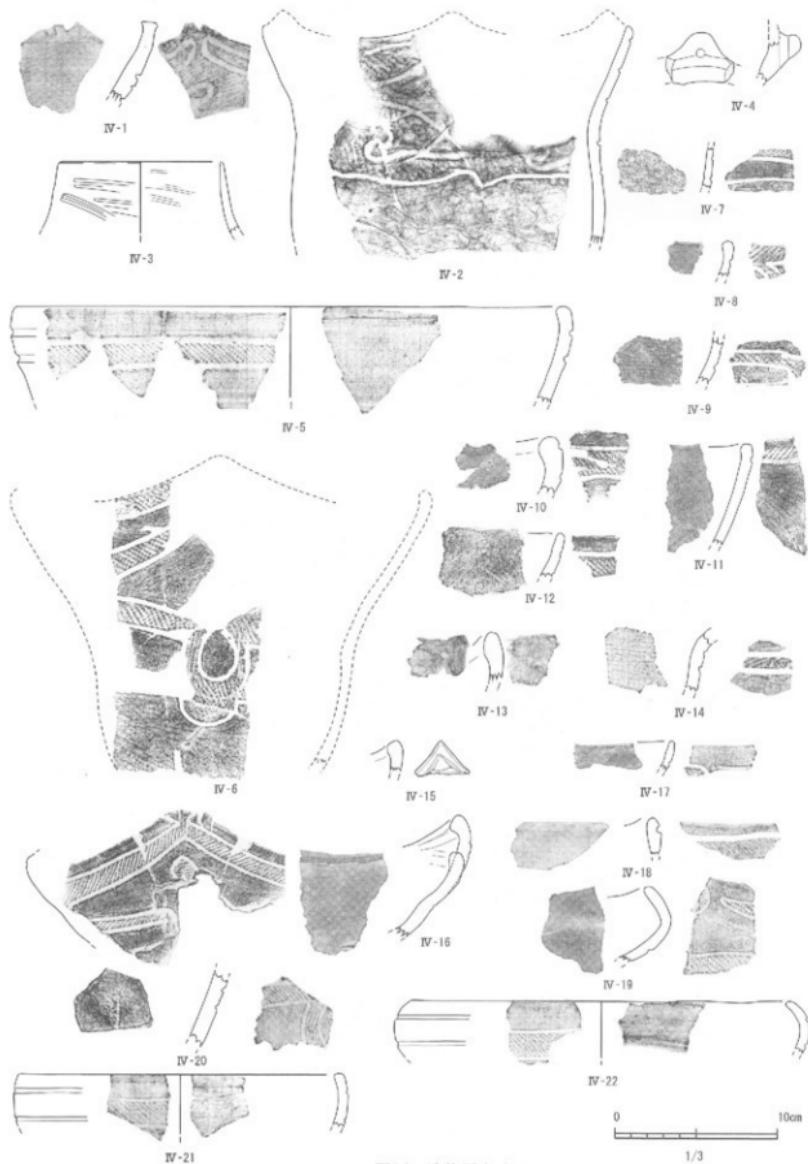


図24 遺物図(3)

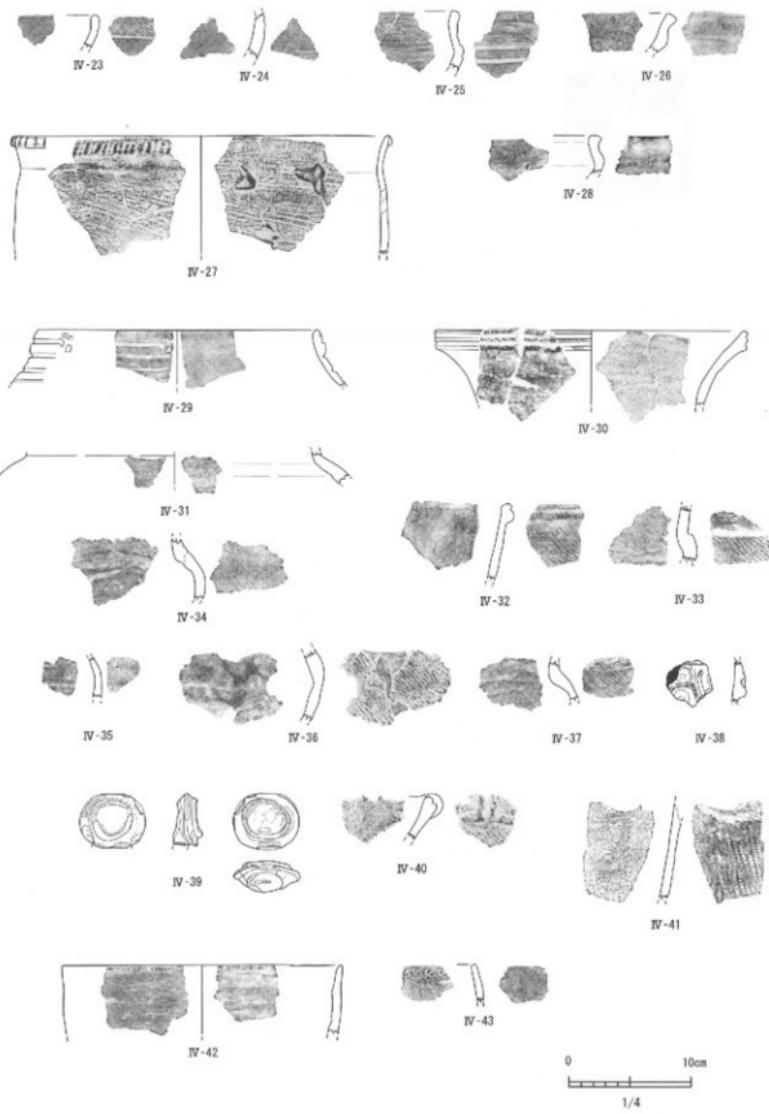


図25 遺物図(4)

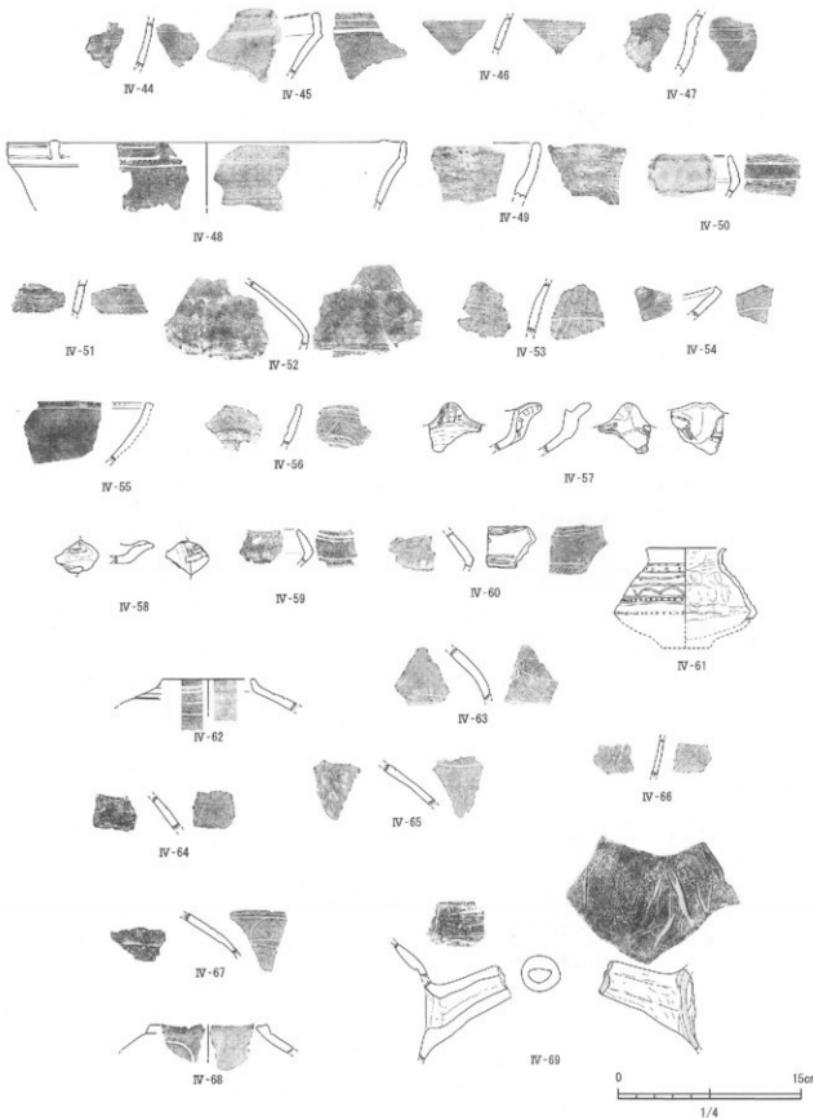


図26 遺物図(5)

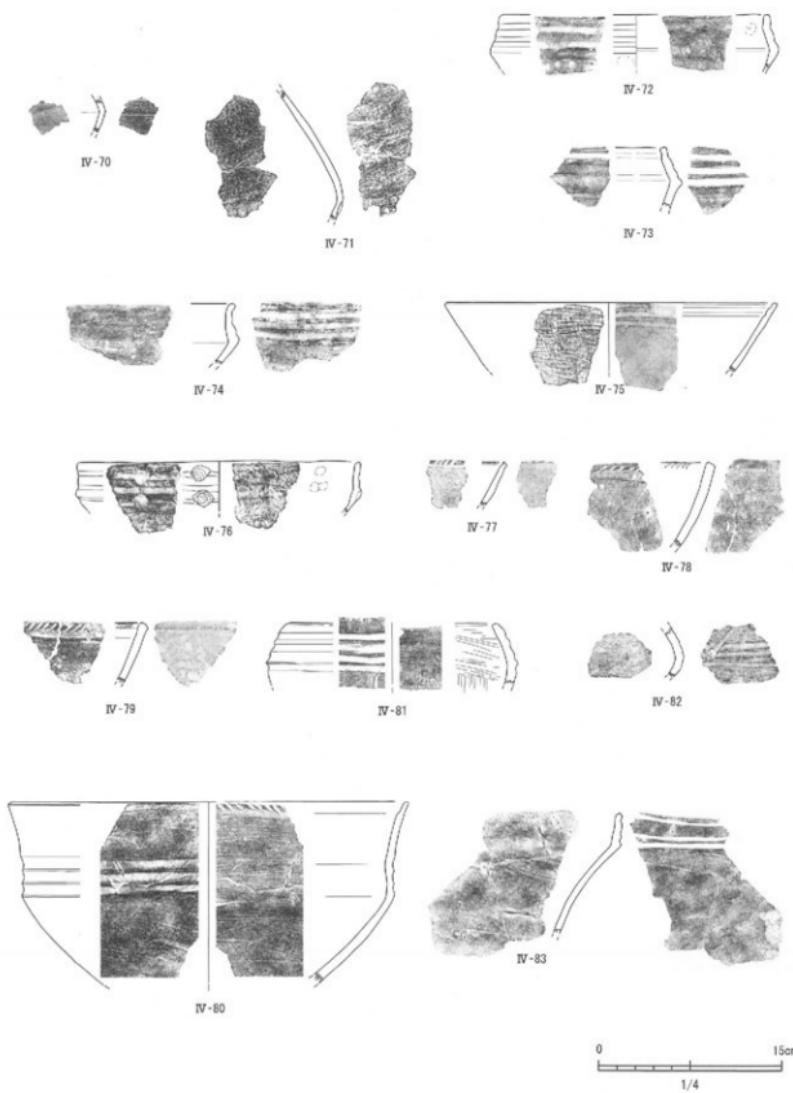
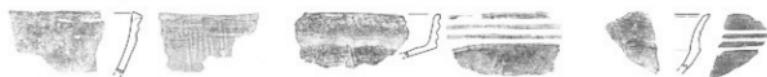


図27 遺物図(6)



IV-84

IV-85

IV-86



IV-87

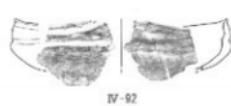
IV-88



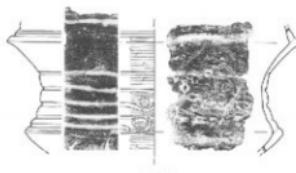
IV-89

IV-90

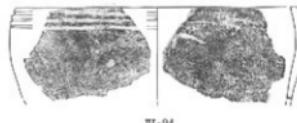
IV-91



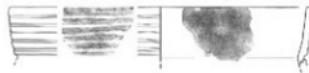
IV-92



IV-93



IV-94



IV-95



IV-96



IV-97

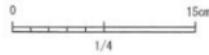


図28 遺物図(7)

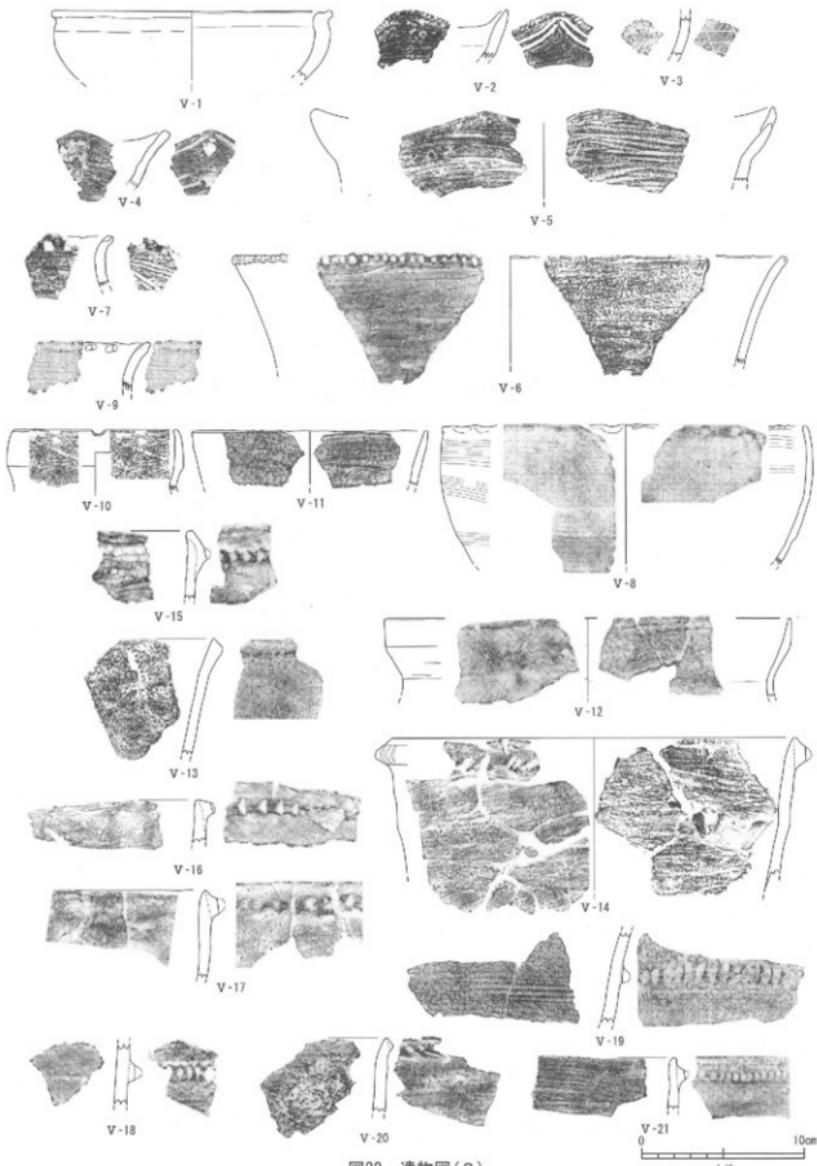


図29 遺物図(8)

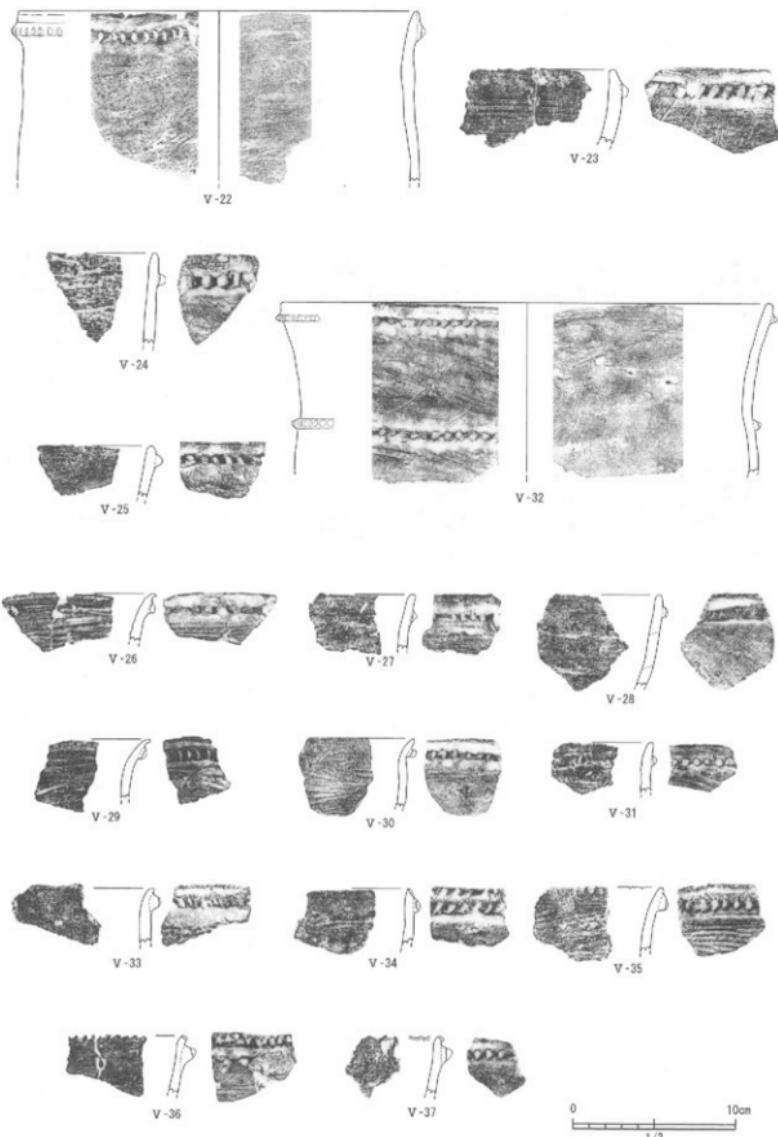
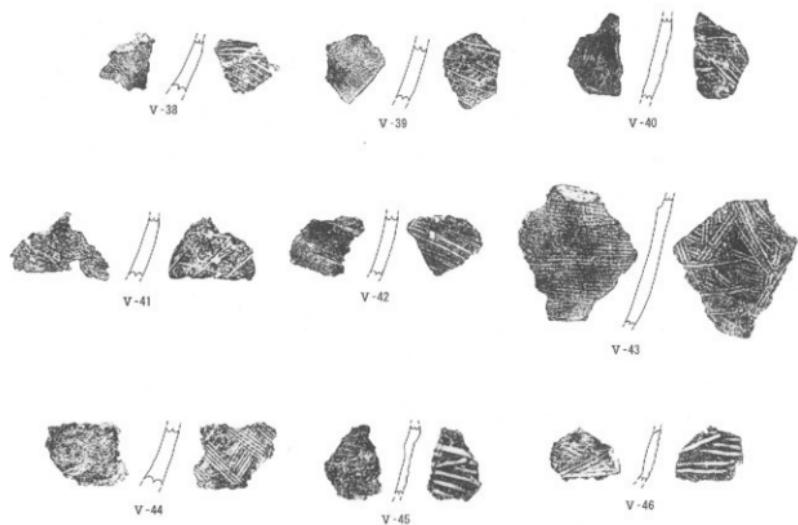


図30 遺物図(9)



0 10cm
1/3

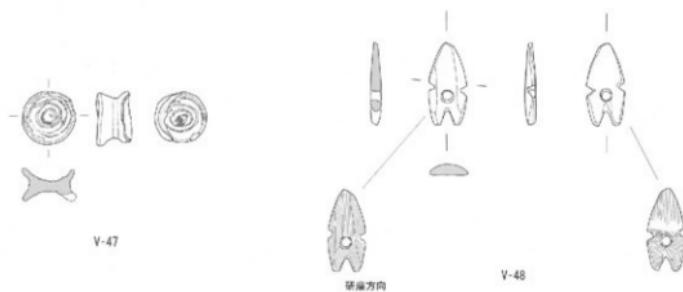


図31 遺物図(10)

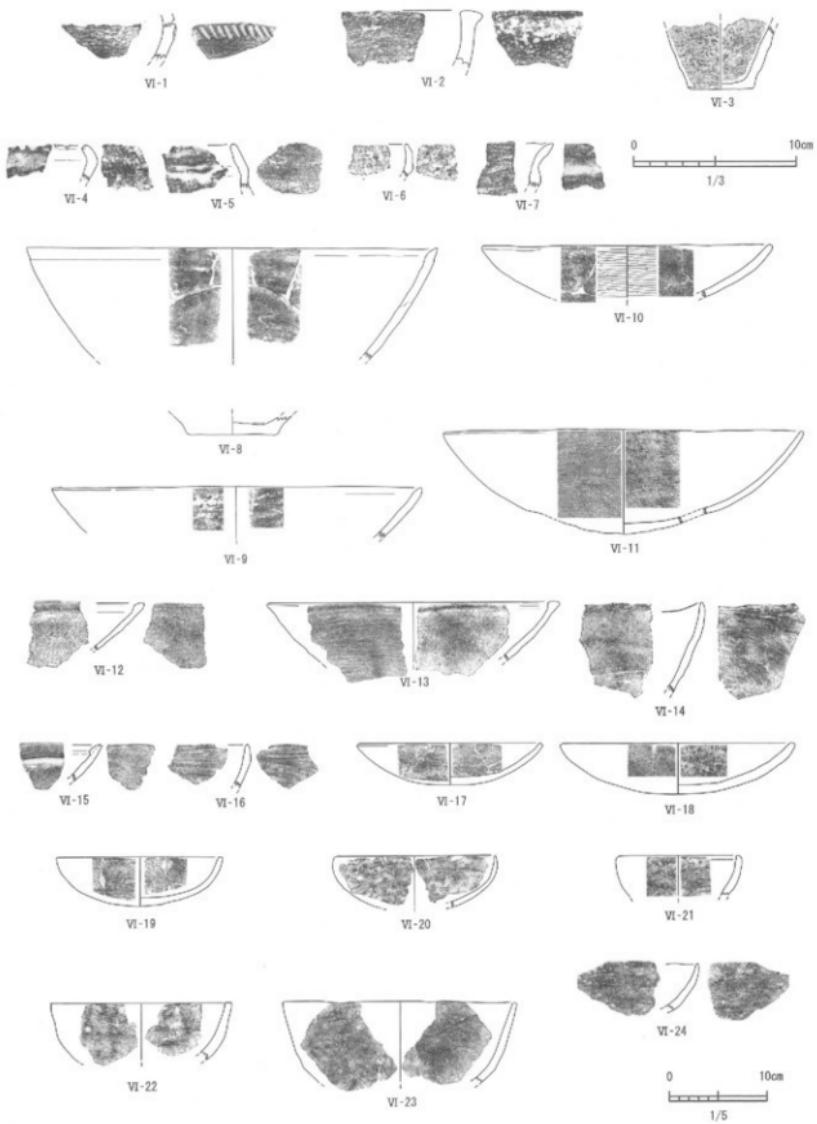


图32 遗物图(11)

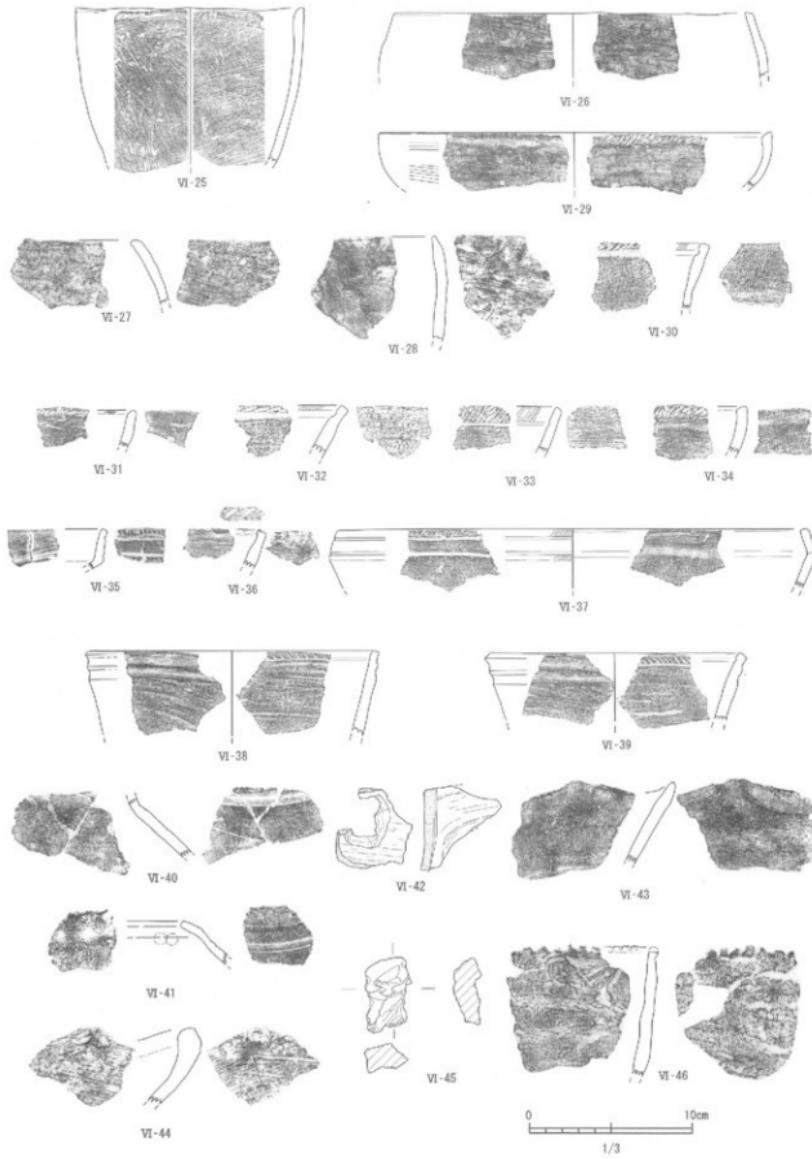


図33 遺物図(12)

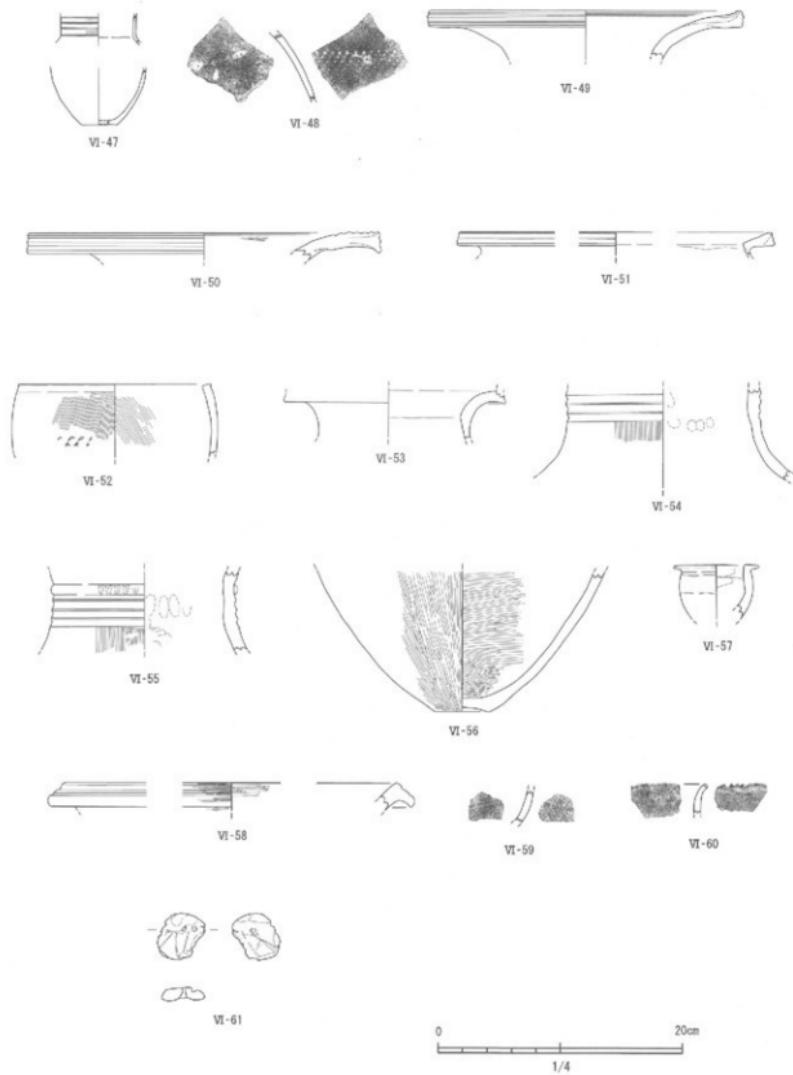


図34 遺物図(13)

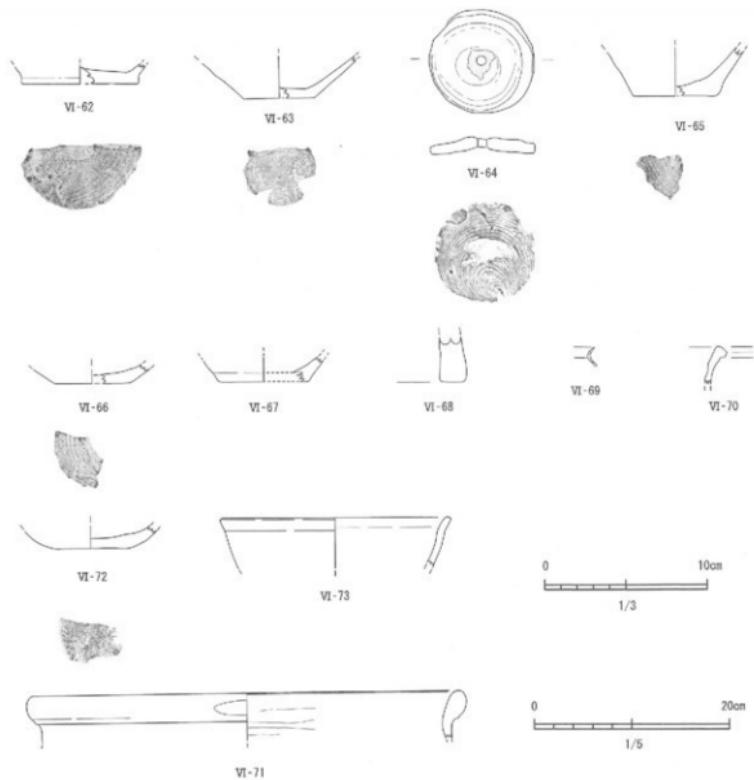


図35 遺物図(14)

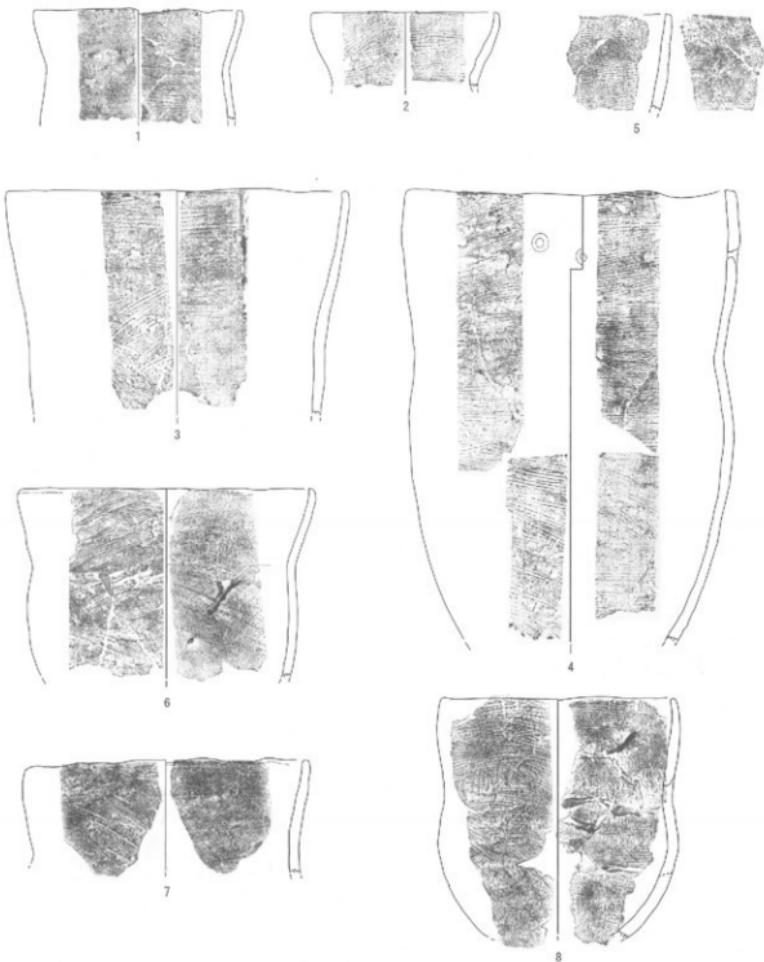


図36 遺物図 (15) 粗製 S=1/4

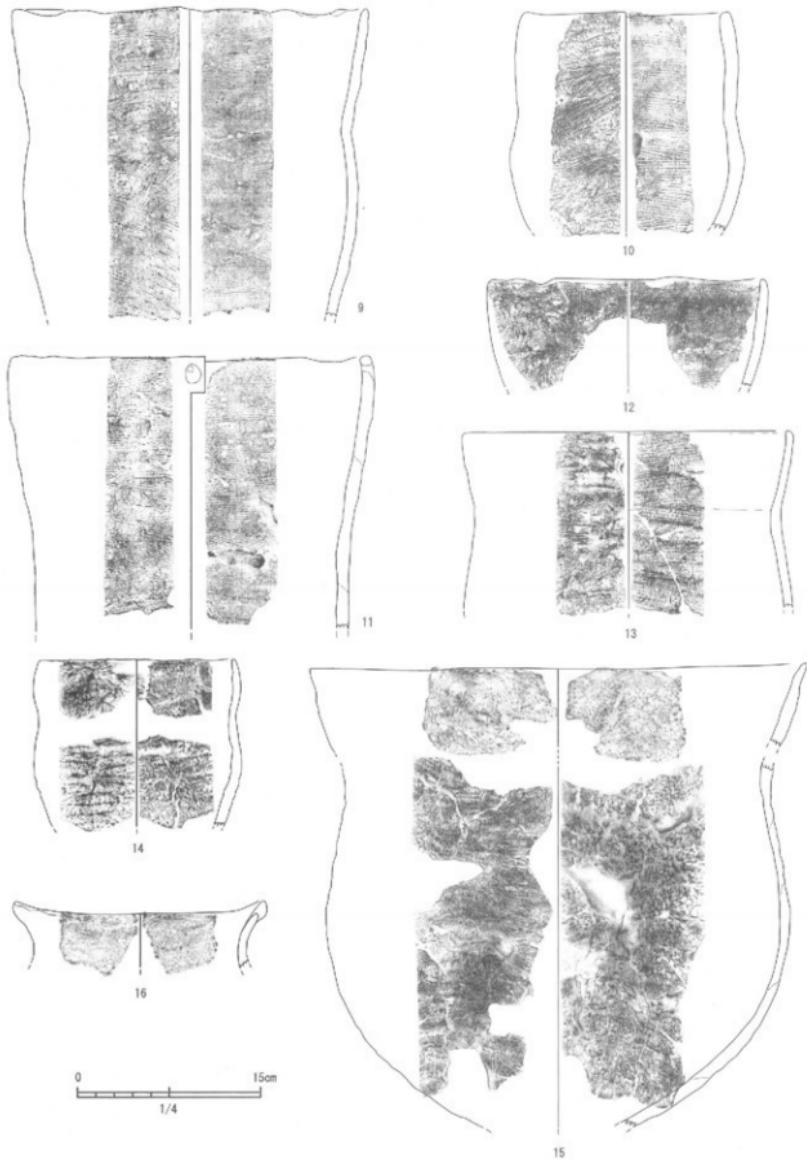


図37 遺物図 (16) 粗製 S=1/4

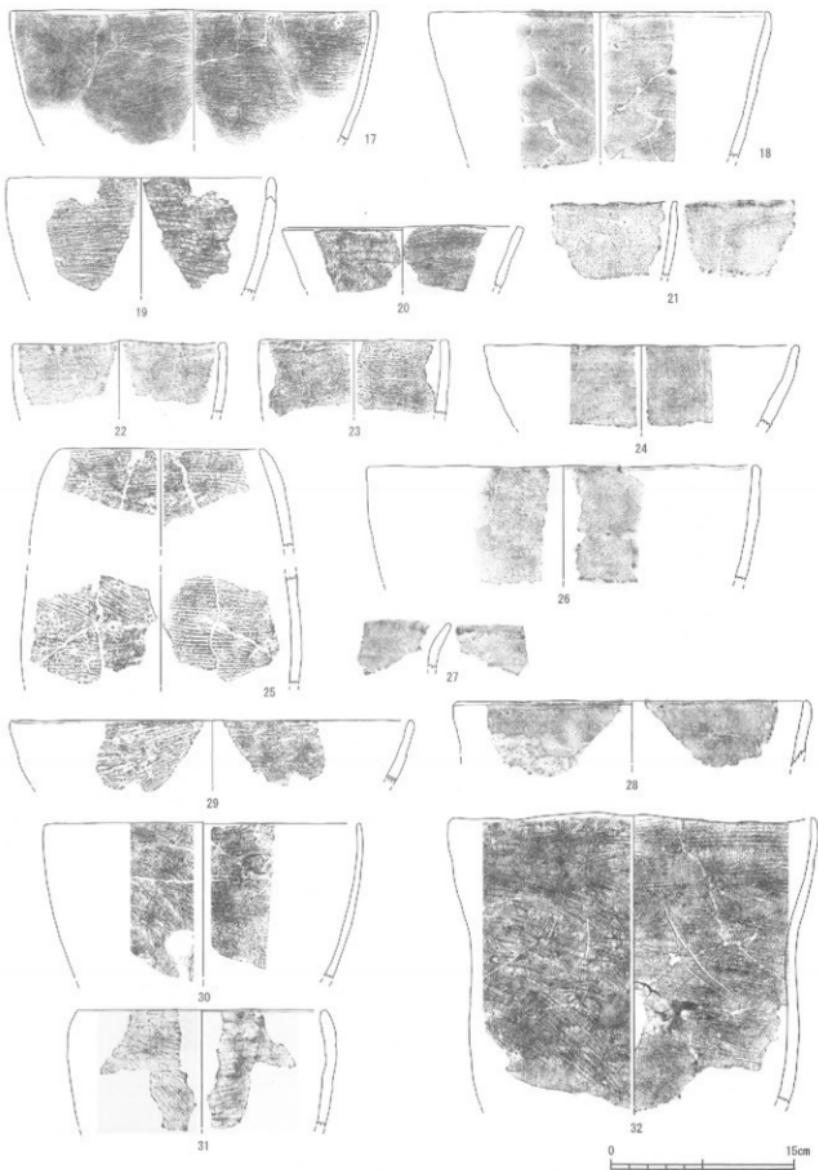
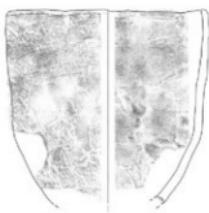


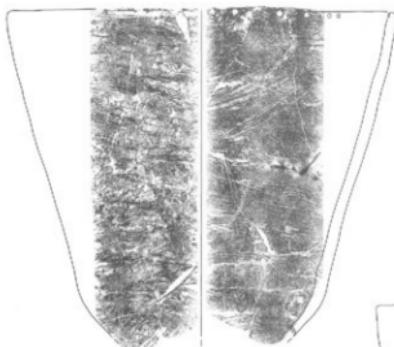
図38 遺物図 (17) 粗製 S=1/4



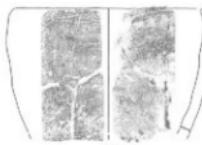
33



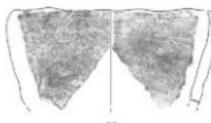
35



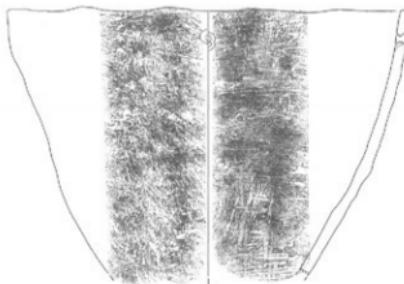
34



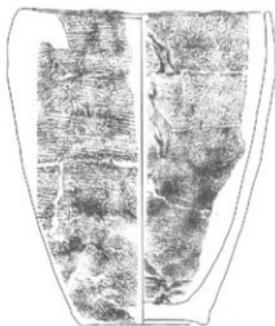
36



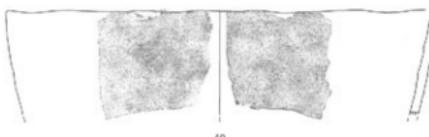
39



37



38



40

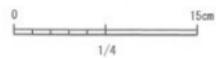


図39 遺物図 (18) 粗製 S=1/4

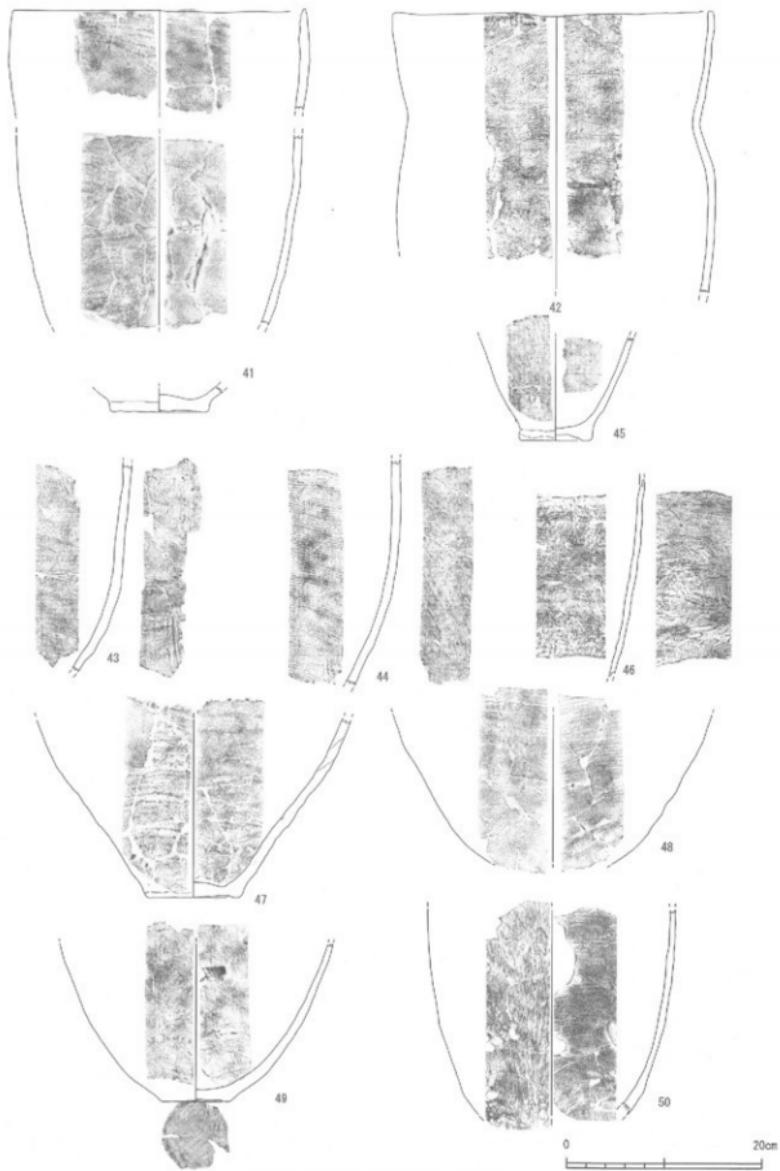


図40 遺物図 (19) 粗製 S=1/5

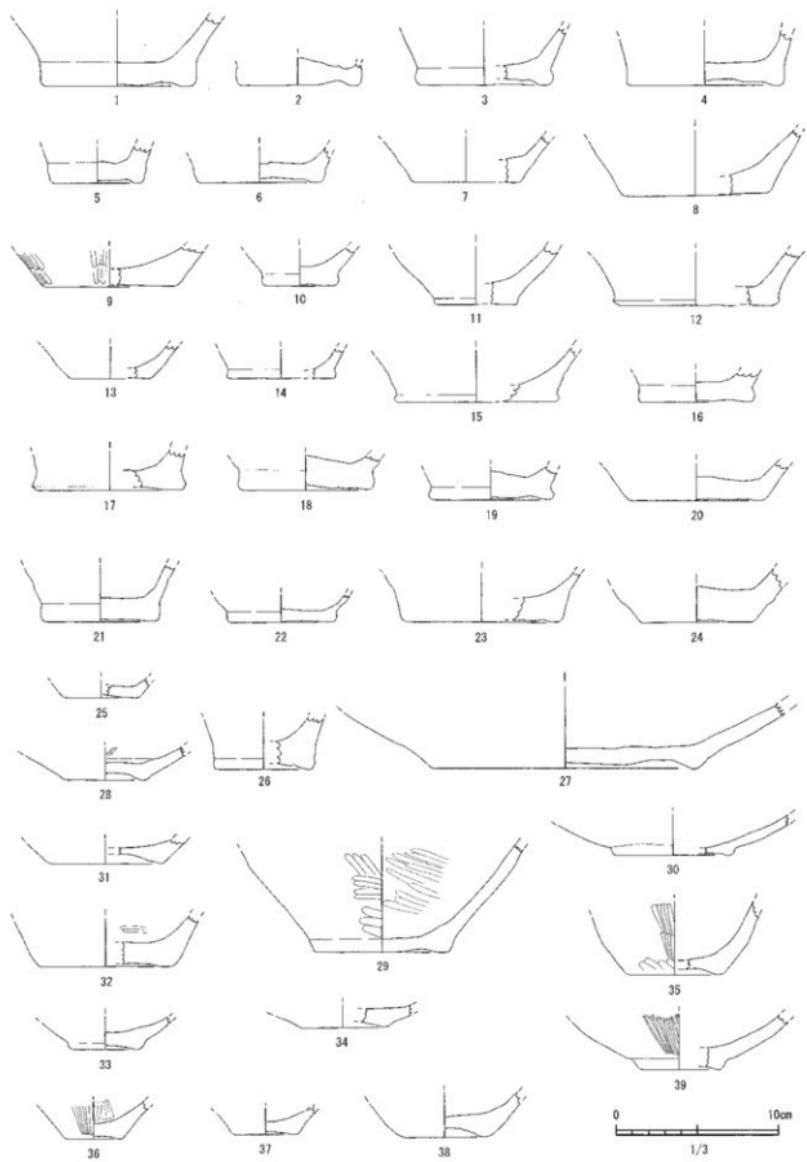


図41 遺物図(20)

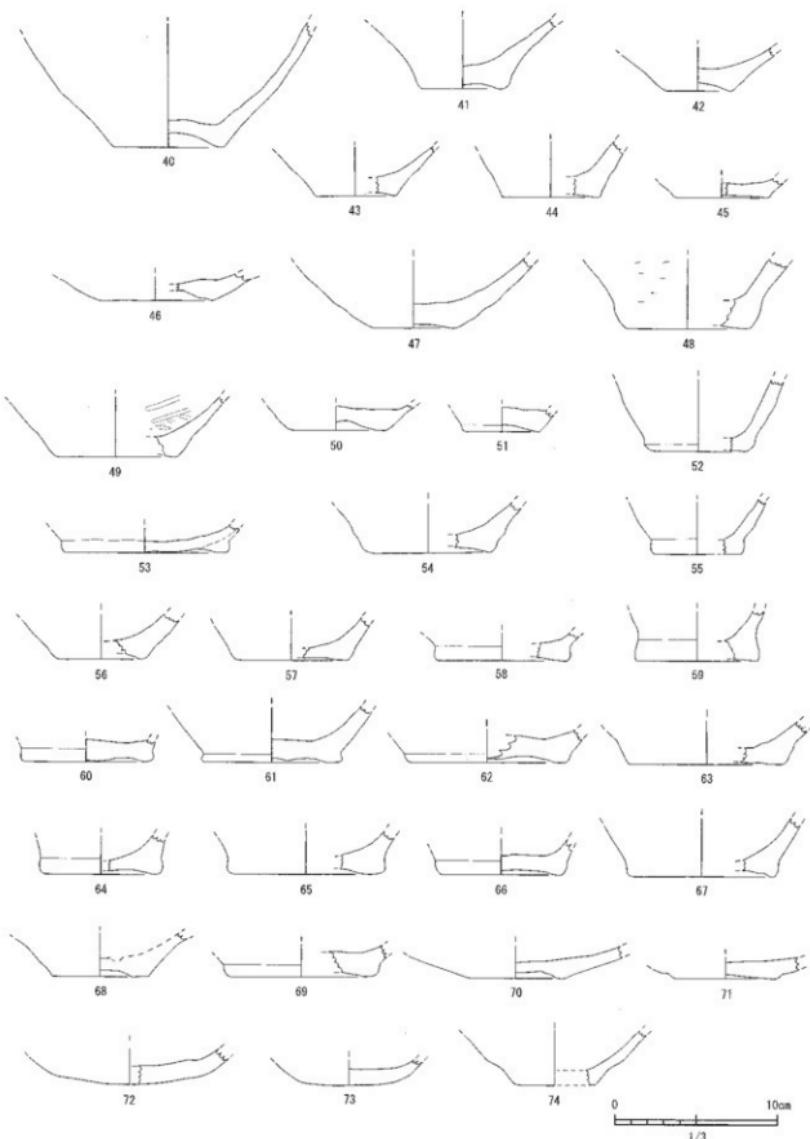


図42 遺物図(21)

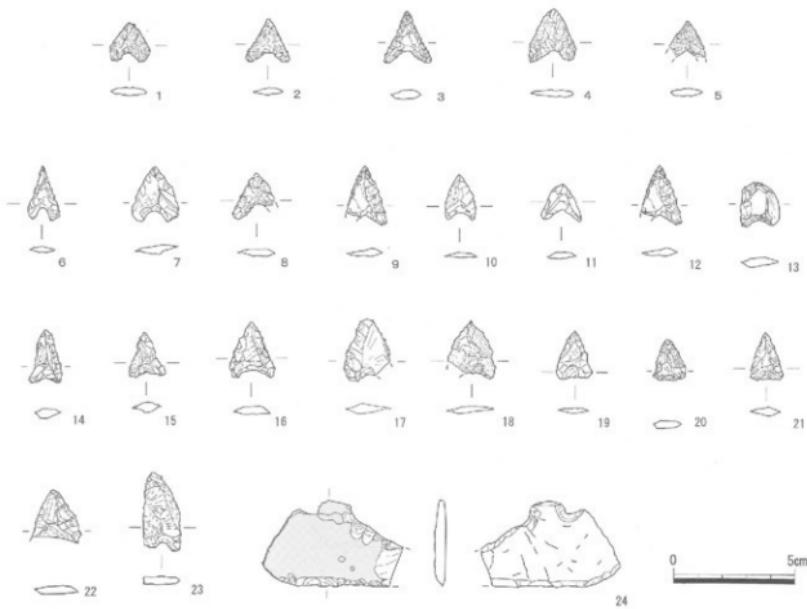


図43 出土遺物 石器（1）



図44 出土遺物 石器（2）

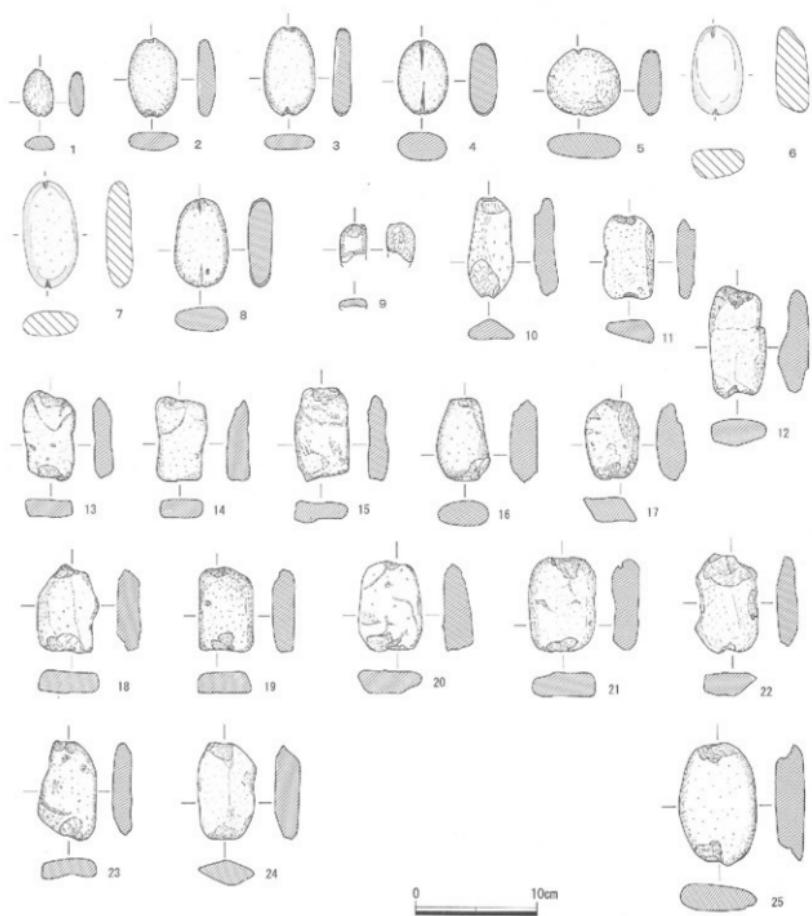


图45 出土遗物 石器 (3)

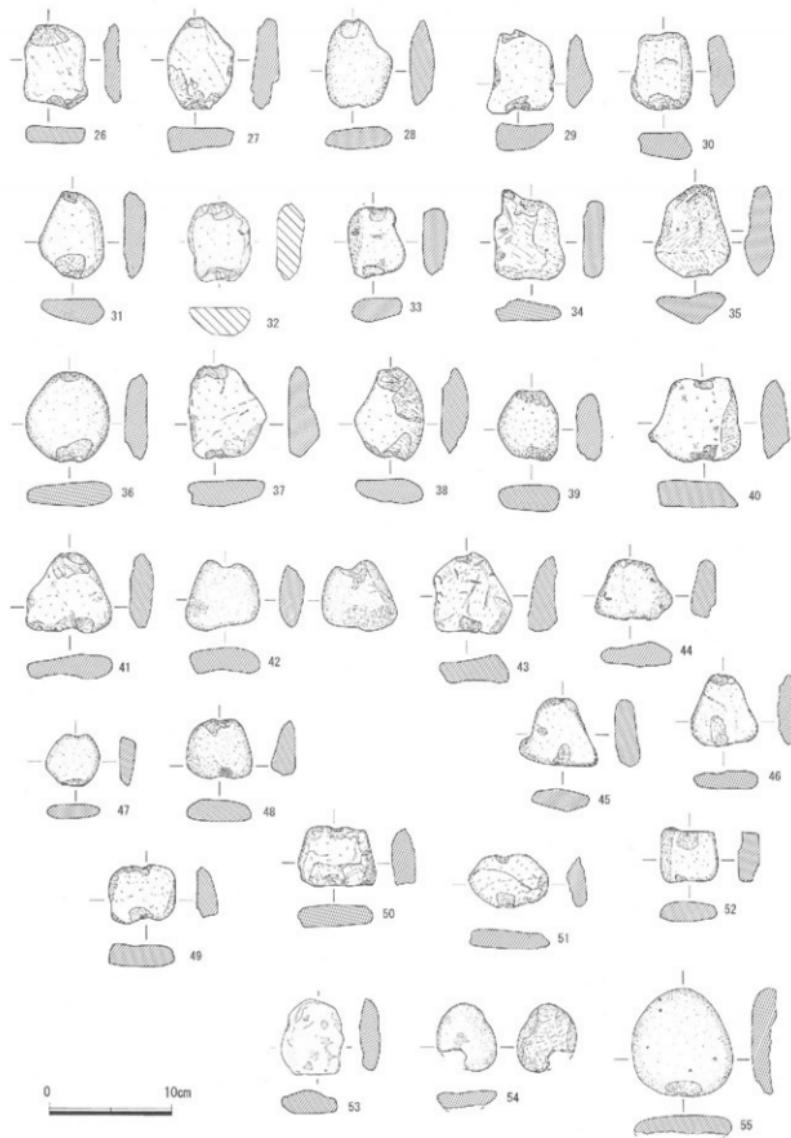


図46 出土遺物 石器 (4)

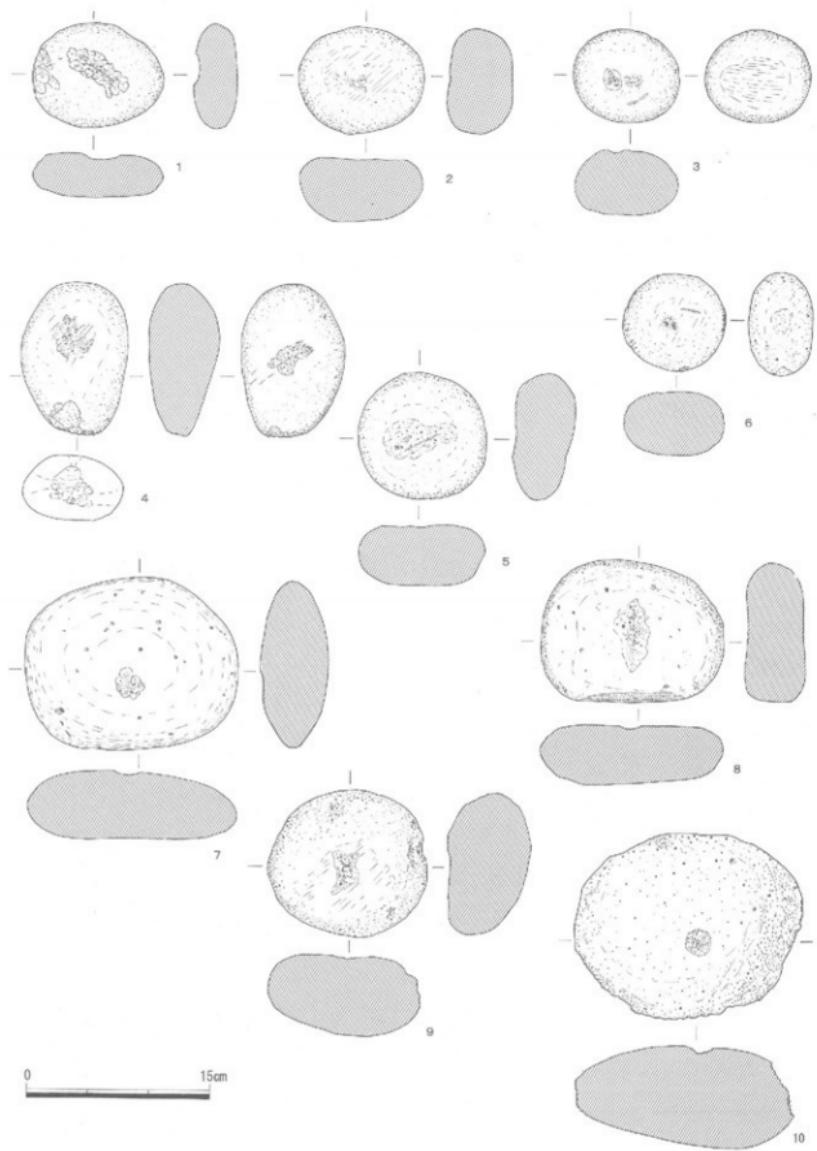


図47 出土遺物 石器 (5)

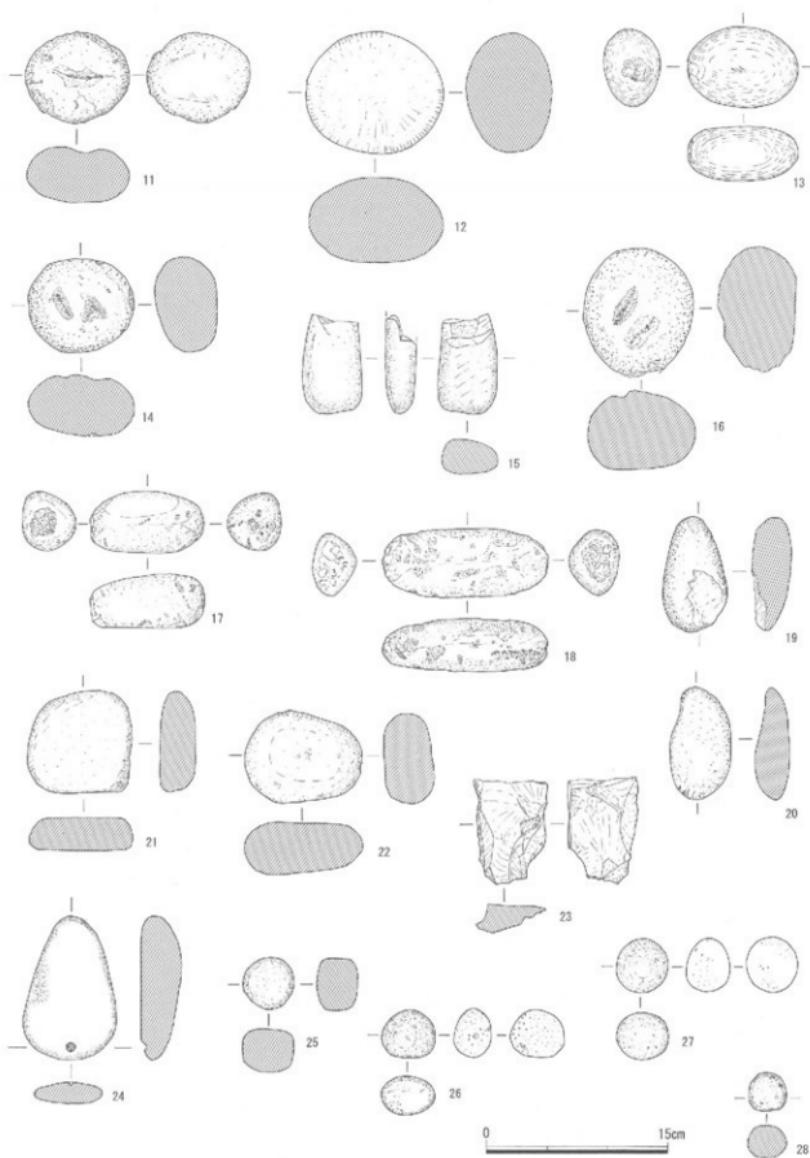


図48 出土遺物 石器 (6)

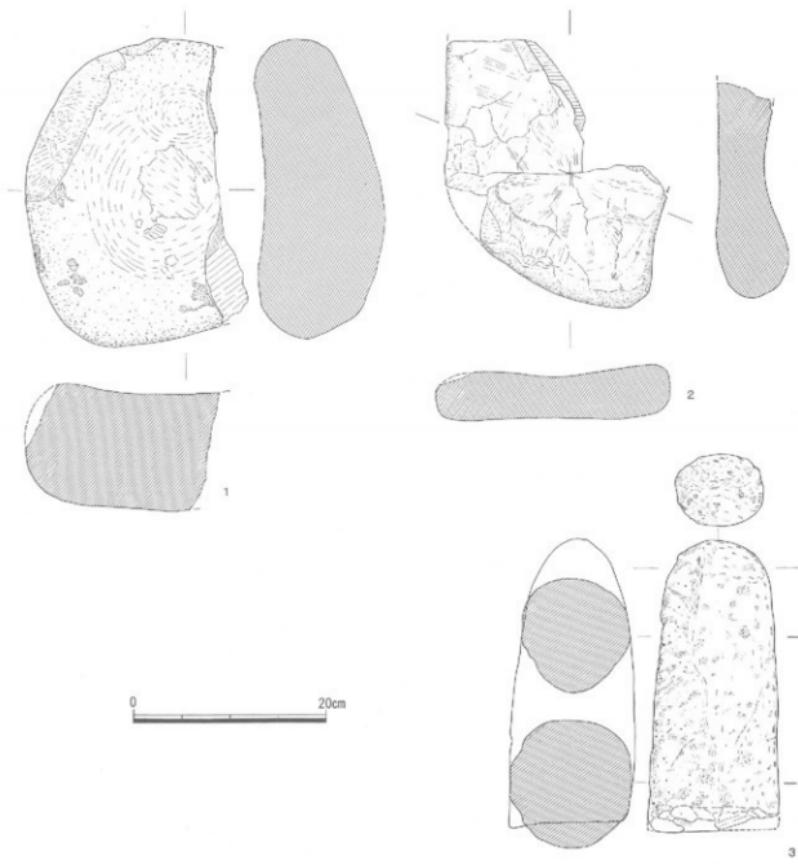


図49 出土遺物 石器 (7)

付 編

I 寺宇根遺跡出土双脚状石製品について

富山市教育委員会埋蔵文化財センター

藤 田 富士夫

II 寺宇根遺跡埋蔵文化財調査に伴う土壤分析結果

島根大学生物資源科学部土壤園生態工学研究室

増永二之・佐藤邦明

III 放射性炭素年代測定結果報告

(株) 地球科学研究所

IV 立地と自然史

島根県立三瓶自然館

中 村 唯 史

I 寺宇根遺跡出土双脚状石製品について

富山市教育委員会埋蔵文化財センター

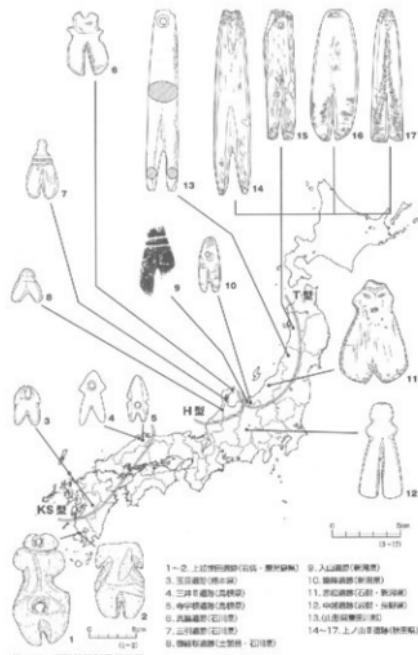
藤田 富士夫

はじめに

寺宇根遺跡のSKIII-1に近接して1点の「垂飾品」が検出された。遺構に被る包含層には縄文後期中葉～晩期中葉の粗製土器が主に伴っている。当該品はこの時期間に属すると思われる。長軸端に八状の切り込みを有する点に特色を有する石製品である。

最初にこの情報を接したとき、石川県の真脇遺跡や三引遺跡の類似品が想い浮かんだ。ただ仔細にみると、それとはまた異なる属性もある。一方で、本品は二股に分かれた脚状形態に表象される。このことから、まずは、二股で表象される「垂飾品」類型を概観し、次いでその意義を検討したいと思う。なお、当該品を「双脚状石製品」あるいは「双脚状装身具」と呼んでおきたい。

I. 双脚状石製品の分布と時期



第1図 双脚状石製品分布図

双脚状石製品を概観すると、(1) 東北地域に主体的に分布する類型、(2) 北陸地域に主体的に分布する類型、(3) 九州山陰地域に主体的に分布する類型、これら3類型に大別できる(第1・2図)。

(1) 東北型双脚状石製品

東東北地域の「燕尾形石製品」で代表される。昭和15年に樋口清之の「垂玉考」で羽前(山形県)東田川郡出土とされたものがある(樋口 1940年)。その後、若干の類例出土はあったが特段注目されることはない。昭和61年度に実施された秋田県上ノ山II遺跡の発掘調査で、欠損品等も含めて58点がまとめて出土したことから、その主体地域と概要が明らかとなった。

この遺物は調査担当者によって、「全体を短冊状や棒状に研磨した後に長軸の一端に切り込みを入れることで、一端が

地域	九州	山形	北陸	東山	東北				
前期									
中期									
後期	 玉形遺跡	 △形 三引日 遺跡	 中字根遺跡	 入山遺跡	 真脇遺跡	 二引日 遺跡	 御佳原遺跡	 施珠遺跡	

第2図 双脚状石製品の地域・時期別概観図（縮尺不同）

幹線沿いの新潟県上越市（旧・中頸城郡中郷村）の籠峰遺跡から出土している（小池 2000年）。

第三層（後期後半～晩期末葉）に包含されていたもので、燕尾形石製品としては後出かつ最西端の例である。それは体部に一孔を有しており、上ノ山II遺跡分類のa類に相当する。

燕尾形石製品は、繩文中期の秋田県と山形県に分布の中心を有し、後期・晩期には北陸・東山地域辺りにまで南下してきた可能性がある。東北地域に由来するそれを東北型双脚状石製品（略してT型）と称しておきたい。

（2）北陸型双脚状石製品

北陸地域の繩文中期後葉～晩期に見られる。断面形と孔の位置、脚部先端の形態に特色がある。上半部と脚部が、横線や突起によって明瞭に区分されている。また△状切込みが上位にまで達する傾向がある。入山遺跡（上田 1986年）と真脇遺跡（堀井 2002年）の断面形は、表面が丸みを帯び裏面が平坦を成す。一方、三引遺跡（小嶋 2004年）では、表裏が丸みをもって製作されている。

いずれも孔は上端部に位置し、かつ横位に設けられている。脚部は、開脚形態をとり端部で稜を成すように内傾する。良質の滑石などを素材としている。

現在、新潟県西部域から能登半島にかけて3例の出土が知られている。また、御経塚遺跡では土製品で双脚状を呈するものがある（加藤 1995年）。北陸地域に由来するそれを北陸型双脚状石製品（略してH型）と称しておきたい。

（3）九州山陰型双脚状石製品

九州～山陰地域の繩文後期・晩期に見られる（Ⅱ、（オ）で所属期を検討した）。これらの遺物は三角形状の上半部を有し、体部正面に孔が設けられることに特色がある。加えて上半部と脚部

「燕の尾」状になっている」といった特徴から燕尾形石製品の名が付けられた（高橋 1988年）。それらは、a類「切り込みと反対側の一端に孔を有する」、b類「長軸の一端のみに切込みがある」、c類「両端に切り込みがある」、の3分類されている。a類が装身具の完成品であり、b類はその未製品の可能性があろう。上ノ山II遺跡などでは、中期の大木7a式～大木8b式に伴っている事例が指摘されている。

かかる燕尾形石製品を祖形とする小型の石製品が、長野市へと通じる

が、横位切り込みや突出態で明瞭に区分されている点に共通性を有する。

三井II遺跡（杉本ほか 2001年）と玉目遺跡（島津・福本 1988年）例は、脚部が「八字」状に開き、孔が上半部に設けられている。一方、寺宇根遺跡例は、脚部が内傾し端部があたかも「W字状」を成している。孔が脚部に設けられており、上半部と脚部が横位の切り込みによって区分されている。

九州、山陰地域に由来するそれを九州山陰型双脚状石製品（略してKS型）と称しておきたい。

II、双脚状石製品の諸相

（ア）名称

双脚状石製品は、これまで「石製装飾品」「装飾石製品」「人形ベンダント」「蝶型垂飾」など、様々な名称で記述されてきた（表1）。類例が少ないと上半部の形状に個性があることなどの理由によろう。このような現状において本稿では、双脚状石製品の名称で体系化を試みるものである。

データ 地域	遺跡名	所在地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	材質	時期	名称	文献	類型 (類)	第1回 の番号
九州 山陰地域	玉目遺跡	熊本県蘇陽町	29	19	6		軟玉	（表採品） 前期？	石製装飾品	島津・福本 1988年	KS1a	3
	三井II遺跡	島根県斐川町	40		5		軟玉	不明	装飾石製品	杉本2001年	KS1b	4
	寺宇根遺跡	島根県奥出雲町				3.25		後期中葉 ～鶴岡中葉	垂 飾		KS1b	5
北陸 地域	真脇遺跡	石川県能美郡	59.5	38.5	15.0	17.3	滑石	後～後期	人形ベンダント	船井2002年	HII	6
	三引遺跡	石川県田舎浜町	42.7						石製品	小嶋2004年	HII	7
	入山遺跡	新潟県糸魚川市	約49.5	約27	約10.5		滑石	中期後葉	蝶型垂飾	土田1986年	HII	9
	龍峰遺跡	新潟県中越村	40	17	6		軟玉	後～後期	玉 頬	小池2000年	T	10

表1. 双脚状石製品の出土地等（所在地等データは文献記載地名による）

（イ）岩偶との関連性

真脇遺跡では、「人形ベンダント」と呼ばれている。その基本は岩偶にあるとされている。関係性を示唆する遺物として、長野県中越遺跡で前期初頭の中越期の住居跡から発掘された「岩偶」がある（第1図12）。それは頭部と腕そして脚部を象徴的に表現している（宮下 1992年）。下半に長く延びる脚部が双脚状の特徴を呈している。

また、繩文後期前半とされる赤松遺跡（第1図11）は、泥板岩の板状礫で作られた「石偶」である（中村 1978年）。顔面には浮線状の眉、鋭く彫りこまれた目と口を作出している。材質的に他の双脚状石製品よりは粗い感は否めないが、デフォルメの共通性に着目すれば、当該品と「石偶」との関係性を示唆する。

（ウ）東北型の小型化現象

中期の東北地域では「燕尾形石製品」が盛行する（第1図11～17）。大木7a式～大木8b式土器への伴出を主としている。それは長さが6～8cmほどもあって、他地域（KS型やH型）で出土する双脚状石製品と比べて格段に長い。同類型には龍峰遺跡（第1図10）のような小型品も存在する。後期・晩期の包含層から出土したものである。その原型を第1図16に求めることができる

かもしれない。大型品から小型品への変遷を示唆している。龍峰遺跡のそれは長さが4cmで、KS型やH型の双脚状石製品と同様の長さを成す。

(エ) 北陸型双脚状石製品の特色

北陸型で時期の早い例として入山遺跡がある(第1図9)。表面採集品であるが、遺跡は中期後葉の單純遺跡で当該品も同時期の所産とされている。滑石製で形態的な類似から「蟬形垂飾」として報告されている(土田1986年)。二条の線彫でもって、脚部と上半部を区分している。形態的には蟬を思わせるが、中国大陆の新石器時代遺跡で出土している「玉蝉」などとは異なる(註1)。

入山遺跡と同様に線彫で上半部を区分するものに三引遺跡がある(第1図7)。両者は様相の類似性から系譜関係を有すると思われる。一方、真脇遺跡では突帯でもって脚部と上半部を区分している。かかる真脇遺跡の縦断面形は、入山遺跡と類似している(第2・3図)。入山遺跡の特性の一端が、真脇遺跡と三引遺跡にそれぞれ投影されているようである。

(オ) 九州山陰型双脚状石製品と所属時期

九州山陰型は3例知られているが、時期が想定できるのは寺宇根遺跡だけである。荒神谷遺跡学芸員の露梨靖子氏は、二股加工された類品が北陸の後期～晩期に集中していることから、それと対比しての検討を行っている(註2)。玉日遺跡と三井II遺跡は出土状況では時期不詳であるが、露梨氏が想定するように同時代的遺物とみなして良いと思われる。

寺宇根遺跡を指標とすれば、九州山陰型は後期～晩期の所産である可能性が高い(註3)。北陸型双脚状石製品と九州山陰型双脚状石製品とは、互いに同時期(後期～晩期)の所産で、大きさも類似し良質材が用いられるなどの共通性から、相互比較財としてよいであろう。

III. 九州山陰型と北陸型の分類

九州山陰型と北陸型は相互比較財とすることができよう。このようなことから、両型の分類を試みておきたい(第3図)。



第3図 九州山陰(KS)型および北陸(H)型の双脚状石製品分類図

九州山陰(KS)型は、上半部に孔を有する「I類」と脚部に孔を有する「II類」とに大別できる。「a類」は全体に丸みをもって成形されるもの、「b類」全体に先鋒さをもって成形されるものである。

北陸(H)型は、上半部の違いによって三大別できる。上半部を二条

の線彫で区分し方形状の頭部を有する「I類」、I類とほぼ同形を成すが上半部が丸く成形される「II類」、脚部と上半部が突帯状飾りで区分される「III類」、がある。I類とII類は二条の線彫が、I類とIII類は縦の断面形が類似する。ほかに、土製品で当該品と関係すると思われるものが

ある。

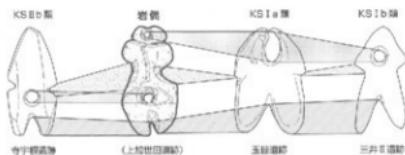
九州山陰型の I 類が、同類型を成すと思われるほかは、すべて同じものはない。とりわけ、北陸型では脚部のタイプが同じとみなしうるのに対して上半部が全て異なっている。この異なりに、本品の特色があるとみることができよう。

IV. 九州山陰型と岩偶の関係性

九州、山陰地域に分布する双脚状石製品が形態的特色で I 類と II 類とに大別できる。このことは本品を、孔に吊紐を通して垂下する「垂飾」とした場合、より顕著となる。守字根遺跡のそれを垂下すれば、上半部が重いため脚部が上位となる（註4）。この点において、他の双脚状石製品とは異なる。

双脚状石製品を長野県中越遺跡では「岩偶」に比定している。それには頭部や腕部の表現が示されているようだ。また、新潟県赤松遺跡の「石偶」は、上半部に顔面表現が明瞭である。このようなことにヒントを得て、九州山陰地域で岩偶を求めれば鹿児島県上加世田遺跡（加世田高校1969年、宮内 1967年）で発掘された蛭石製品がある。上加世田遺跡は、晩期初頭の上加世田式土器を主とする。この第2次発掘調査で完形の高さ約12cmの岩偶が出土した。それは脚部と上半部を横位のV字挟りでもって区分していく、形状は双脚状石製品と似ている。また、頭部と腹部とに孔を有する。頭部孔に紐を通せば立位で垂下する。しかし腹部孔に紐を通せば逆位で垂下する。

上加世田遺跡の岩偶の孔のあり方はKS型双脚状石製品を考えるうえで示唆的である。頭部孔は I a類・I b類双脚状石製品と、腹部孔は II b類双脚状石製品に対比できる（第4図）。この対比関係が成立するならば、I 類は岩偶の上半部を、II 類は岩偶の下半部をそれぞれ表象していることとなる。



第4図 九州山陰（KS）型 双脚状石製品と岩偶との相関模式図

おわりに

双脚状石製品が、縄文前期初頭の長野県中越遺跡で「岩偶」と称され、晩期の石川県真脇遺跡で「人形ペンダント」と称されている。時代的な隔たりを経て、両者が「ヒト形」に想定されている。当該品は、時代や地域が異なっていたとしても「双脚」を表象している。その基底に「ヒト形」がある可能性は高いだろう。

縄文後期～晩期の九州・山陰地域と北陸の両地域で小型の双脚状石製品が流布する現象がある。一方、孔の位置や脚部形態などで遺物には総体的な異なりがある。本遺物は、「ヒト形」を表象するといった共通性を有しつつも、その具現に際して強い地域性や個性を発揮している。地域間におけるかかる類似性と相違性の問題が新たに派生する。

本稿では九州山陰型双脚状石製品の表象モデルを、南九州の上加世田遺跡出土の岩偶に求めた。九州山陰型のⅠ類とⅡ類の違いはシンボル化の対象が、岩偶の上半分にあるか脚部にあるかの違いでもある。寺宇根遺跡の重飾品は、その腹部から脚部にかけてシンボル化されているものと想定した。なぜⅠ類とⅡ類が生じるのかについては今後の課題として残る。また、本比定は上加世田遺跡出土のたまたま残りの良い1点の岩偶から想定したものである。方法論的には課題の残る原稿となつたが、今後の資料の蓄積を期してひとまず閉じたいと思う。

末筆となつたが、奥出雲町教育委員会埋蔵文化財調査室の野津旭氏から執筆の機会を与えられるとともに寺宇根遺跡の垂飾についての多くの情報をいただいた。また荒神谷博物館の露梨靖子氏と松江市立出雲玉作資料館の勝部衛氏からも多くのご教示をいただいた。ここに記して厚く御礼申しあげたい。

(富山史埋蔵文化財センター 藤田富士夫)

註

- 1) 日本で、蟬形石製品に言及した論考に大竹憲治「大付貝塚出土蟬形骨製品考—縄文人の再生観に派生する蟬形製品をめぐって—」『史峰』第35号 新進考古学同人会 2007年がある。本例は、大竹が指摘する蟬形とも異なっている。
- 2) 露梨靖子「縄文の不思議な石製垂飾 思想、信仰のシンボル」山陰中央新報文化欄 2007年3月3日付け
- 3) 熊本県玉目遺跡では、「前期」の可能性も示唆されているが、「表面採集品」であり指標とはならないだろう。
- 4) 露梨靖子氏から、孔に紐を通せば逆位となるが、横位の切り目に紐をつけて垂下すれば脚部が下になる、とご教示いただいた。一考すべき指摘である。

参考文献

- 加藤三千雄 1995年「第2節 土製装身具」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 装身具1』石川考古学会
加世田高等学校 1969年「3 上加世田遺跡」『加世田』第3号
- 小池義人 2000年「E 玉類・硬玉環」『純峰遺跡発掘調査報告書II 遺物編』新潟県中郷村教育委員会。
- 小鶴芳孝 2004年「10後晩期層出土の石製品」『三引遺跡III(下層編)』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 鳥津義昭・橋本信子 1988年「付 玉目遺跡採集の石製装飾品」『高畠赤立遺跡発掘調査報告書』熊本県蘇陽町教育委員会
- 杉本肇吾ほか 2001年『平成11・12年度斐川中央工渠用地造成に伴う杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・二井Ⅲ遺跡発掘調査報告書』斐川町教育委員会
- 高橋忠彦 1988年「4 石製品」『東北横断山動車道秋田線発掘調査報告書II 上ノ山I遺跡・館野遺跡・上ノ山II遺跡 下』秋田県埋蔵文化財センター 340・348頁
- 十田孝雄 1986年「入山遺跡」『糸魚川市史 資料編1—考古編』糸魚川市役所
- 村孝三郎 1978年『越後の石器』学生社 115頁
- 樋口清之 1949年「飛瓦考」『考古學雑誌』第30卷第5号 考古學會
- 柳井泰樹 2002年「第5節 装身具類」『石川県能都町 真庭遺跡2002』能都町教育委員会真庭遺跡発掘調査団
宮内克巳1997年「九州各県」『土偶シンポジウム6 奈良大会 西日本をとりまく土偶』『土偶とその情報』研究会
- 宮下健司 1992年「長野県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集 国立歴史民俗博物館

II 寺宇根遺跡埋蔵文化財調査に伴う土壤分析結果

島根大学生物資源科学部土壤圈生態工学研究室

増永二之・佐藤邦明

1、目的

平成18年11月7日、奥出雲町教育委員会埋蔵文化財調査室より依頼された土壤標本（試料No.1～8）について、遺構が土坑墓群に該当するか否かを土壤の理化学分析により調べること。

2、方法

土色を観察しその後、一般理化学性分析を行なった。炭素（C）・窒素（N）はヤナコ CN CORDERで測定した。その他の無機元素は土壤を0.1規定塩酸溶液（土壤：溶液=5 g : 30ml）で2時間抽出を3回反復後、100mlとして、抽出液を島津製のICPS2000（高周波プラズマ発光分析装置）及びAAS-680（原子吸光分光光度計）で分析した。

3、結果と考察

サンプルの種類、十色、分析結果を表1～3に示した。各元素の濃度は105°C乾燥土当たりで計算してある。

斐伊中山古墳群－西支群－（1994年3月）の調査結果では、埋葬主体床面の屍体位置同定において、屍体のあったと思われる土壤面から多量の可溶性リン（P）が検出された。今回の結果では、土坑外の周辺土壤であるNo. 3及び6をこの地域の基質濃度と考えると、これらと比較してNo. 4、5、7、8で高い可溶性リンが検出された。よって、これらの土坑は遺体埋設用である可能性が示唆された。以下に各サンプルの詳細を示す。

今回土壤分析を行った寺宇根遺跡の場所は斐伊川川岸部であり、発掘前は圃場整備された水田であった。そのため、本土壤は灌漑水や河川の増水によって、溶脱や浸食作用を受けているものだと推測される。

No. 1では、小型の磨製石斧が出土したが、可溶性リン含量は周辺土壤程度であった。リンは土壤中で動きにくい元素であるが、河川の増水等によって浸食を受け、リンが消失した可能性も考えられる。

No. 2でも若干ではあるが、周辺土壤に比較し高い可溶性リンが検出された。石製ペンダントも出土したことから、遺体埋設用土坑として使用された可能性がある。また、No. 2では他地点に比べ交換性塩基（Ca、Mg、Na、K）等の蓄積が見られた。元々土坑内にあった屍体や植物等に由来するもの、またはこの土壤サンプルの位置が物質の溶脱しにくい場所にあったためではない

かとも推測される。

No. 4は、表面に大きな平石を置く土坑の土壤で、可溶性リンも高く遺体埋設用土坑として使用された可能性が高いと考えられた。

No. 5の土壤では、その近傍の土坑外土壤のNo. 6と比べて10倍近い高濃度の可溶性リンが検出された。No. 5は中心となる大型配石土坑の真下の土壤であり、これらのことから、この土坑が遺体埋設用に使用された可能性が強く示唆された。

No. 7は耳栓が出土した土坑での土壤で、可溶性リンも高く遺体埋設用土坑として使用された可能性が高いと考えられた。

No. 8の土壤は、縄文時代晚期の土器が出土した土坑のサンプルであった。可溶性リンは、No. 4、5、7に比べると低い値ではあったが、周辺土壤に比較すると高い値であり、この土坑も遺体埋設用として使用された可能性があると考えられた。また、No. 2と同様に交換性塩基などの蓄積も見られた。

表1 土壌サンプル

No.	遺構名-ポイント	水分含量 (%)	TC (%)	TN (%)	C/N ratio	Ca	Mg (cmol(+)/kg)	K (cmol(+)/kg)	Na	S	Mn	Mo (mg/kg)	Zn	Cu	P
1	SK2G-1(内)	14.2	1.23	0.07	18.7	2.18	0.32	0.07	0.12	16.3	13.9	10.6	1.1	0.5	80.9
2	SK4H-1(中心)	21.3	2.19	0.10	21.8	9.05	1.22	0.17	0.30	36.8	48.6	25.8	3.1	2.5	107.2
3	4H杭から4ライン治1MII-1へ	16.9	1.59	0.09	17.7	2.80	0.36	0.07	0.13	18.6	20.1	10.8	1.1	0.9	78.3
4	SK4I-1(床面付近)	19.9	1.80	0.09	19.4	2.25	0.30	0.07	0.12	24.2	25.7	15.0	1.8	1.1	143.6
5	SK7I-1(底)	6.5	0.84	0.05	16.6	1.80	0.21	0.06	0.11	21.2	21.3	10.4	1.1	0.4	566.4
6	7I杭下	11.1	1.14	0.07	15.4	1.70	0.24	0.05	0.08	15.1	17.1	10.7	1.0	0.4	62.8
7	SK7I-6(耳塗出土付近)	5.3	1.18	0.07	16.7	1.65	0.33	0.07	0.12	16.5	18.3	11.1	1.2	0.7	149.4
8	SK10H-1	15.0	1.38	0.09	15.8	3.77	0.60	0.16	0.26	49.3	34.9	25.1	2.6	0.9	122.9

表2 樅本土壤1色

No.	乾土	湿土
1	灰黃褐色	10YR4/2
2	黑褐色	2.5Y3/2
3	黑褐色	2.5Y3/2
4	黑褐色	2.5Y3/2
5	黑褐色	2.5Y3/2
6	黑褐色	2.5Y3/2
7	黑褐色	2.5Y3/2
8	黑褐色	2.5Y3/2

表3 寺宇根遺跡土壤分析結果(水分含量、TC・TN、0.1規定当量抽出法)

No.	水分含量 (%)	TC (%)	TN (%)	C/N ratio	Ca	Mg (cmol(+)/kg)	K (cmol(+)/kg)	Na	S	Mn	Mo (mg/kg)	Zn	Cu	P
1	14.2	1.23	0.07	18.7	2.18	0.32	0.07	0.12	16.3	13.9	10.6	1.1	0.5	80.9
2	21.3	2.19	0.10	21.8	9.05	1.22	0.17	0.30	36.8	48.6	25.8	3.1	2.5	107.2
3	16.9	1.59	0.09	17.7	2.80	0.36	0.07	0.13	18.6	20.1	10.8	1.1	0.9	78.3
4	19.9	1.80	0.09	19.4	2.25	0.30	0.07	0.12	24.2	25.7	15.0	1.8	1.1	143.6
5	6.5	0.84	0.05	16.6	1.80	0.21	0.06	0.11	21.2	21.3	10.4	1.1	0.4	566.4
6	11.1	1.14	0.07	15.4	1.70	0.24	0.05	0.08	15.1	17.1	10.7	1.0	0.4	62.8
7	5.3	1.18	0.07	16.7	1.65	0.33	0.07	0.12	16.5	18.3	11.1	1.2	0.7	149.4
8	15.0	1.38	0.09	15.8	3.77	0.60	0.16	0.26	49.3	34.9	25.1	2.6	0.9	122.9

III 放射性炭素年代測定結果報告書

(株) 地球科学研究所

放射性炭素年代測定放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

未補正14C年代 (y BP)	: (同位体分別未補正)14C 年代 " measured radiocarbon age" 試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前 (BP) を計算した年代。
14C 年代 (y BP)	: (同位体分別補正)14C 年代 " conventional radiocarbon age" 試料の炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。 試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に基準化することによって得られる年代値である。 (Stuiver.M. and Polach.H.A. (1977) Discussion:Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと) 年代を得る際にはこの年代値をもつて。
$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	: 試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比。 この安定同位体比は、下式のように標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表現する。 $\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C} / ^{12}\text{C})_{\text{試料}} - (^{13}\text{C} / ^{12}\text{C})_{\text{標準}}}{(^{13}\text{C} / ^{12}\text{C})_{\text{標準}}} \times 1000$ ここで、 $^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$ [標準] = 0.0112372 である。
層年代	: 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、層年代を算出する。 具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により、補正曲線を作成し、層年代を算出する。最新のデータベース (" INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al. 1998 Radiocarbon 40 (3)) により約 19000y BPまでの換算が可能となつた。 *但し、10000y BP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。 " The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a " best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄

acid washes : 酸洗浄

acid etch : 酸によるエッティング

none : 未処理

調製・その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関

BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, Fl, U.S.A 33155

C 14年代測定 試料一覧

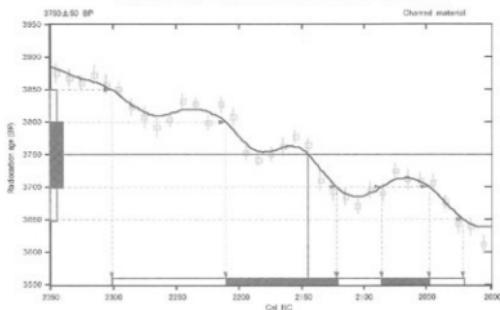
No.	採取地点	採取レベル
1	SK81-1	217.75
2	801	217.12
3	サンプル土 (Hライン T - 12ライン交点直下)	217.9
4	サンプル土 (No.3 より30cm下から)	217.6
5	サンプル土 (7T ラインより川へ120cm直下)	215
6	サンプル土 (5よりライン T SEより1m地点下)	219.5
7	サンプル土 (No.6 より30cm下から)	219.2

試料データ	未補正14C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	$\delta^{13}\text{C}(\text{permil})$	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 223077	3780 ± 50	-26.8	3750 ± 50
試料名 (30248) No 1			
測定方法、期間 Radiometric-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 223078	3910 ± 50	-26.4	3890 ± 50
試料名 (30249) No 2			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	
Beta- 223079	3000 ± 60	-22.9	3030 ± 60
試料名 (30250) No 3			
測定方法、期間 Radiometric-Standard			
試料種、前処理など organic sediment		acid washes	
Beta- 223080	8370 ± 70	-23.6	8400 ± 70
試料名 (30251) No 4			
測定方法、期間 Radiometric-Standard	Extended Counting		
試料種、前処理など organic sediment		acid washes	
Beta- 223081	2860 ± 50	-23.8	2880 ± 50
試料名 (30252) No 5			
測定方法、期間 Radiometric-Standard			
試料種、前処理など organic sediment		acid washes	
Beta- 223082	3800 ± 60	-22.4	3840 ± 60
試料名 (30253) No 6			
測定方法、期間 Radiometric-Standard			
試料種、前処理など organic sediment		acid washes	
Beta- 223083	7010 ± 60	-22.3	7060 ± 60
試料名 (30254) No 7			
測定方法、期間 Radiometric-Standard			
試料種、前処理など organic sediment		acid washes	

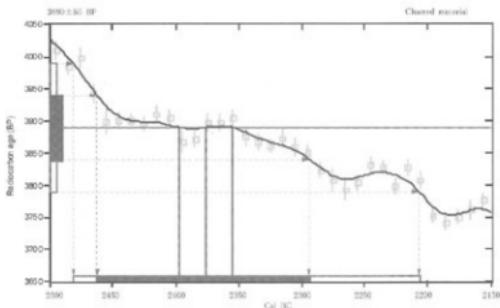
年代値はRCYBP (1950 A.D.を0年とする) で表記。モダンリファレンススタンダードは同僚的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5668年を使用した。エラーは1シグマ (68%確率) である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12= -26.8; lab. mult=1)
 Laboratory number: Beta-223077
 Conventional radiocarbon age: 3750 ± 50 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 2360 to 2020 (Cal BP 4250 to 3970)
 (95% probability)
 Intercept data
 Intercept of radiocarbon age
 with calibration curve: Cal BC 2140 (Cal BP 4100)
 1 Sigma calibrated results: Cal BC 2210 to 2120 (Cal BP 4180 to 4070) and
 (68% probability) Cal BC 2090 to 2050 (Cal BP 4040 to 4000)



(Variables: C13/C12= -26.4; lab. mult=1)
 Laboratory number: Beta-223079
 Conventional radiocarbon age: 3890 ± 50 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 2480 to 2210 (Cal BP 4430 to 4160)
 (95% probability)
 Intercept data
 Intercepts of radiocarbon age
 with calibration curve: Cal BC 2460 (Cal BP 4350) and
 Cal BC 2380 (Cal BP 4330) and
 Cal BC 2360 (Cal BP 4300)
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 2460 to 2290 (Cal BP 4410 to 4240)
 (68% probability)



References:

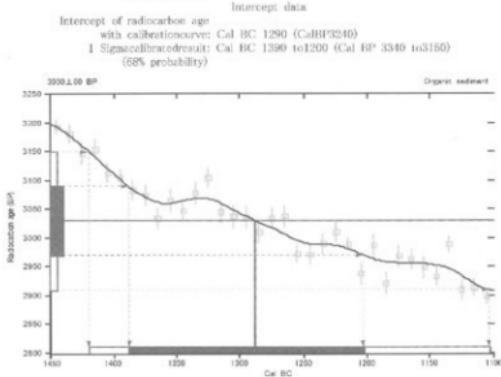
- Database used
INTCAL98
- Calibration Database
Editorial Committee
Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
- INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
- Mathematics A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Takemoto, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

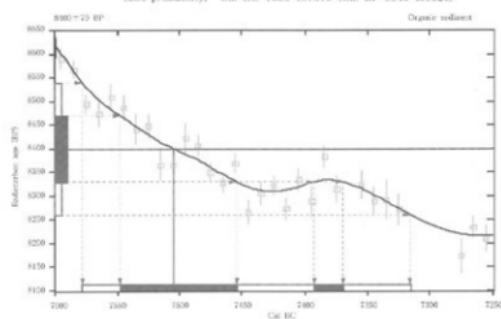
4985 S.W.74th Court,Miami,Florida 33155 o Tel: (305)667-5167 o Fax: (305)663-0964 o E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12= 22.9; lab. mult=1)
 Laboratory number: Beta-223079
 Conventional radiocarbon age: 3030±60 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 1420 to 1100 (Cal BP 3370 to 3050)
 (95% probability)



(Variables: C13/C12= 23.6; lab. mult=1)
 Laboratory number: Beta-223080
 Conventional radiocarbon age: 8100±270 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 7880 to 7320 (Cal BP 9530 to 9270)
 (95% probability)



References:

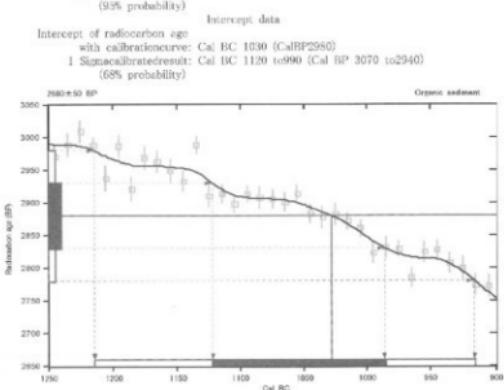
- Database used
 - INTCAL98
- Calibration Database
- Editorial Comm ent
 - Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xii
- INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 - Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
- Mathematics A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 - Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

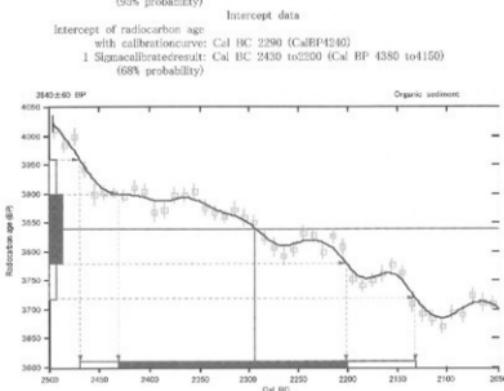
1985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 o Tel: (305)667-5167 o Fax: (305)663-0964 o E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12= -23.8; lab. mult=1)
 Laboratory number: Beta-223081
 Conventional radiocarbon age: 2880 ± 50 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 1210 to 920 (Cal BP 3160 to 2870)



(Variables: C13/C12= -22.4; lab. mult=1)
 Laboratory number: Beta-223082
 Conventional radiocarbon age: 3840 ± 60 BP
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 2470 to 2130 (Cal BP 4420 to 4080)
 (95% probability)



References:

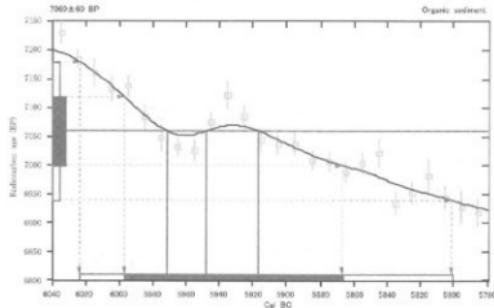
- Database used
 INTCAL98
- Calibration Database
 Heitler et al., 1998
- Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
- Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1011-1083
 Mathematics A Simplified Approach to Calibrating C14-dates
- Talma, A. S., Vosel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W.74th Court, Miami, Florida 33155 o Tel: (305)667-5167 o Fax: (305)663-0964 o E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

Variables: C13/C12= -22.3±ab. mult=1
Laboratory number: Beta-223083
Conventional radiocarbon age: 7060 ± 60 BP
2 Sigma calibrated result: Cal BC 6220 to 5900 (Cal BP 7970 to 7750)
Intercept data
Intercepts of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 5970 (Cal BP 7920) and
Cal BC 6950 (Cal BP 7900) and
Cal BC 5920 (Cal BP 7870)
1 Sigma calibrated result: Cal BC 6000 to 5870 (Cal BP 7950 to 7820)
(68% probability)



References:

- Database used
INTCAL98
Calibration Database
Editorial Committee
Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xlii
INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1063
Mathematics A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vossel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W.74th Court, Miami, Florida 33155 o Tel: (305)667-5167 o Fax: (305)663-0964 o E-Mail: beta@radiocarbon.com

IV 立地と自然史

島根県立三瓶自然館

中 村 唯 史

1. はじめに

寺宇根遺跡は斐伊川の河岸に立地している。この地で暮らしを営んだ人々にとって、生活の中には川があり、流域の森林がもたらす実りが欠かせないものだったと想像される。そこで、本章では寺宇根遺跡成立の背景にあった自然史として、斐伊川流域の地形が成立するまでの地史と、縄文時代以降の河川環境の状況、発掘調査で検出された火山灰層などについて述べる。

2. 斐伊川流域の地形と地質

斐伊川は中国山地脊梁部の船通山（標高1142m）を源流とする河川で、出雲平野、宍道湖、中海を経て日本海に注ぐ。幹川延長は187kmで流域面積は2070km²である。主な支流に大馬木川、三刀屋川、赤川、飯梨川などがある。寺宇根遺跡付近では、標高300～400mのピークが連なる山間をヘアピン状に大きく蛇行しながら流れ、蛇行部には中小規模の河岸段丘が発達している。尾原ダム地内では原田地区や北原地区に比較的大きな段丘があり、それぞれ原田遺跡、北原本郷遺跡が立地している。斐伊川の河道は本次盆地を過ぎて、三刀屋川と合流する辺りから川幅を増し、砂がちな河床に鱗状の砂州を形成しながら流れ、宍道湖へ至る。宍道湖と中海は湾が土砂の堆積によって閉ざされてできた潟湖で、海水が遡上することでそれぞれ塩分が異なる汽水の環境である。

斐伊川流域の地質は、源流域には白亜紀（1.8億～6700万年前）の酸性火山岩類（流紋岩～デイサイト）および同質の凝灰岩類が分布する。船通山の一部には、第四紀更新世（180万～1万年前）に噴出した玄武岩がある。上流域から中流域の広い範囲には古第三紀（6700万～2600万年前）の花崗岩類（花崗岩～花崗閃緑岩）が分布している。花崗岩類は深層まで風化が進んでいわゆるマサ（真砂）になっていることが多い。寺宇根遺跡付近は花崗岩類の分布域で、花崗岩と花崗閃緑岩、閃綠岩が分布している。これらはいずれもマグマが地下で固結してできた岩石で、花崗岩は有色鉱物が乏しく、花崗閃緑岩、閃綠岩の順に角閃石や黒雲母、磁鐵鉱などの有色鉱物が多く含まれる。下流部には新第三紀中新世（2600万～650万年前）の火山岩類、堆積岩類が分布する。出雲平野は第四紀完新世（1万年前～現在）の堆積物によって構成される沖積平野である。また、平野の縁辺などには更新世の段丘が断片的に分布する。中海の大根島は更新世に噴出した玄武岩である。

3. 中国山地の形成

中国山地は比較的なだらかな地形で、「中国準平原」と称されることもある。脊梁部のピークの高さは標高1000～1200mで概ね揃い、その山頂は緩斜面であることが多い。巨視的にみるとその地形面は同高度で連続しており、ひとつの地形面を構成している。この地形面は道後山面と呼ばれる。これより低い高度にもいくつかの連続する平坦面が存在し、山陰側では標高300～400m程度の地形面を石見高原面、標高100～200m程度の都野津面と呼ばれる。寺宇根遺跡付近は通常の地上からの目線では起伏が大きな山地を感じるが、そのピークの高度に注目すると標高300～400mの定高性が認められ、ひとつの地形面をなしている。これが石見高原面に相当するものである。このように、山陰側の等高度の地形面は河川による浸食が進んでおり、日常的には平坦面の存在を意識することは少ない。しかし、例えば三瓶山や大山の山頂ようにある程度離れた高い場所から当地付近を見ると、ピークが重なり合って高原状の地形面をなしていることに気付くはずである。なお、中国山地の山陽側にもこれらに対応する地形面が存在し、高位面が吉備高原面、低位面が瀬戸内面と呼ばれる。山陽側の地形面は地上からもその定高性がわかるほどに明瞭である。

道後山面や石見高原面などの地形面は中国山地の形成史を反映している。中国山地の隆起がはじまったのは1000万年前頃である。地質時代では新生代第三紀中新世という時代に相当する。この中新世という時代は、日本列島が大陸から離れて日本海が形成された時代で、2600万年前に始まり650万年前に終わったとされている。中新世の初期、ユーラシア大陸の東縁で地殻変動が生じ、約1000万年をかけて日本海が広がった。その変動は1500万年前頃に一段落したが、当時は日本列島の形は現在とは全く異なるもので、中国山地も存在しなかった。そのことは、中国山地の中央付近に位置する三次盆地や庄原盆地で当時の海に生息した生物の化石を産出することから明らかである。1000万年前頃から中国山地の隆起がはじまるが、当時の地形は現在よりはるかになだらかなものであったと推定される。その時、斐伊川の河道は平原を自由に蛇行して流れていた。そして、山地の隆起に伴って河道は深い谷を形成し、かつて蛇行していた流路はある程度その状態を維持しながら谷に変化した。寺宇根遺跡付近で蛇行を繰り返す斐伊川の流路はこのように形成されたとされ、山地の形成以前からその原形が存在した谷という意味で「先行谷」と呼ばれる地形である。そして、道後山面などの地形面は隆起以前の平原や、隆起速度が停滞した時期に海岸で浸食と堆積により新たに形成された平原の残存部である。

およそ1000万年間で1000m程度隆起して形成された中国山地であるが、その岩盤が形成された時代は隆起よりさらに古く遡る。中国山地に分布する岩石では、秋吉台や帝釈台などを構成する石灰岩と三群変成岩に属する変成岩類が最古の部類に属するものである。これらの岩石は古生代から中生代にかけてプレート境界で形成されたもので、海洋プレートの上に乗っていた岩石が大陸プレートに付加されたものである。その後、白亜紀末から新生代の初頭にかけて、日本列島付近では膨大な量の花崗岩質マグマが上昇し、活発な火山活動が生じた。およそ1億年前から6000

万年前のことである。この時、地下に貯留したマグマが固結したものが中国山地に広く分布する花崗岩類で、地表に噴出したものが船通山などの脊梁部に分布する流紋岩類である。花崗岩類の形成時期は、山陰側は古第三紀（概ね6000万年前）、山陽側は白亜紀（概ね1億年前）で時期差がある。山陰側と山陽側の花崗岩では含まれる鉄鉱物にも違いがあり、前者は磁性を帯びる磁鉄鉱、後者はほとんど磁性を帯びないチタン鉄鉱を主とする。

花崗岩類分布域の北側、すなわち山陰海岸に面した地域には、中新世の火山岩類と堆積岩類が分布する。これらはおもに日本海が拡大する過程で陸上および海底で生じた火山活動の噴出物と、拡大しつつあった海底に堆積した地層である。

4. 河岸段丘の形成

寺宇根遺跡は小規模な河岸段丘上に立地する。すぐ背後に谷斜面が迫る傾斜地であることから、斜面裾部の崖錐地形のようにも見えるが、古い時期の河床堆積物で構成されており、河岸段丘に区分できる。

河岸段丘とは河川による浸食や堆積によって形成された平坦な地形面で、現河床よりも高い位置に存在するものである。古い時代の河川が形成した地形面が高い位置に取り残されて段丘となるのは次の理由による。

山地を流れる河川では堆積作用よりも浸食作用が強く働いており、時間経過とともに谷はより深くなる。河道が時間経過とともに水平方向に変化した場合、水平移動とともに河床は低下するため、古い時期に形成された地形は高い位置に取り残される。これが河岸段丘である。河道の蛇行部では、蛇行の外側に対して水平方向の浸食力が強く働き、内側では堆積が進むため、河道位置は蛇行の外側へ移動する。したがって、蛇行部ではその内側に段丘が形成されやすい。尾原ダム地内の原田地区や北原地区の段丘がこれにあたる。寺宇根遺跡が立地する段丘も河道が緩く曲流する内側にある。

河岸段丘の形成に関わる要素は他にもある。ひとつは山地の隆起速度の変化である。隆起しない、または隆起速度がごく遅い場合は源流から河口までの河床の勾配はある程度安定し、下方への浸食力はあまり働かない。ところが、急速な隆起が生じると、河床勾配が急になることによって下方への浸食力が強く働き、狭く深い谷が形成される。これによって、古い時期の河床が高所に取り残される。隆起が生じない場合でも、海水面の低下が生じるとやはり下方への浸食力が強く働く。氷期には海面低下が生じるため、段丘の形成時期と気候変動には相関が認められる場合がある。その他、土砂供給量の著しい変化によって段丘が形成される場合もある。山体崩壊や火山噴火のような現象で土砂供給量が急増した場合、堆積作用が一時的に卓越して高い堆積面を形成することがある。その後、土砂供給量が低下するとイベント的な減少で形成された堆積面の一部が浸食されて谷になり、残された部分が段丘となる。これらの河岸段丘の形成要因は寺宇根

遺跡が立地する段丘の成因には直接結びつかないが、氷期から間氷期への気候変化はある程度関係しているかもしれない。その理由として次のことが挙げられる。氷期中は山間部で凍結による岩盤の風化が進み、岩屑の生産量が増加していた。一方で、海水温の低下により降水量が少なく河川の浸食力は小さくなってしまい、生産された岩屑は山間部に留まっていた。氷期が終り温暖化が進むと降水量が増え、山間部の岩屑が急速に排出されて一部が河岸に堆積した。すなわち、気候の温暖化がはじまった氷期末から完新世の初頭にかけて一時的に土砂供給量が増大し、低位面の段丘の形成を促した可能性がある。寺宇根遺跡では縄文時代の遺物を含む黒色土壌の下位に厚い礫層が分布している。同様の層序は北原本郷遺跡、林原遺跡でも認められる。河道位置の水平移動と下方への浸食だけでもこの層序の説明は可能ではあるが、氷期末に土砂供給量が増大した影響を考慮すると解釈はより明瞭になるだろう。

5. 黒色土壌について

寺宇根遺跡では、基本的に黒色土壌が遺物包含層である。尾原ダム地内の他の遺跡でも縄文時代以降の包含層は黒色土壌である場合が多い。

土壌とは、堆積物や岩盤の風化物に生物起源の有機物が混じって形成されたもので、黒色は基本的に炭素の色である。当地の土壌は粒度的には中～細粒砂と泥分の混合物で、この粒子は河川の氾濫で供給されたものと上方斜面から雨水によって供給されたものに加えて、風成塵と火山灰からなる。火山灰層については後述するが、黒色土壌に挟まれる完新世の火山灰層と、更新世の火山灰層が当地一帯に分布している。これらの粒子がゆっくりと堆積しながら生物によるかく乱を受け、同時に有機物が混入することで土壌が形成された。

当地のような黒色土壌は「クロボク」と呼ばれることがある。クロボクという名称はもともと黒みが強い土壌の通称だが、土壌の分類ではその言葉を空隙率が高く透水性が良い黒色土壌のことをさす用語として取り入れている。そのため、通称としてクロボクと呼ばれるものが土壌用語としての「クロボク」の定義に当てはまらない場合があり、混乱することがある。土壌用語でいうクロボクは、火山灰地帯に特徴的な土壌である。火山灰粒子の透水性や吸着性という性質が、クロボクの物性や色の黒さに関係しているとみられる。尾原ダム地内の段丘上の土壌は、河川堆積物の影響の程度により物性に幅があるという印象があるが、概ねクロボク土壌に当てはまると思われる。

6. 火山灰層と三瓶火山の活動史

寺宇根遺跡では黒色土壌中に三瓶火山起源の火山灰層が認められる。層厚は最大10cm程度で、粗～中粒砂サイズの粒子を主体とし、直径2cm程度までの軽石質の岩片を少量含む。これは三瓶

火山の第7活動期の噴出物に相当するとみられる。

尾原ダム予定地内では、後期更新世から完新世の火山灰層と遺物、遺構との関係が明らかになつてきている。当地内では、三瓶火山の第3活動期（3～4万年前）、第4活動期（約1万6000年前）、第6活動期（約4800年前）、第7活動期（約3700年前）の噴出物と、鹿児島県の姶良カルデラに起源する姶良Tn（AT）火山灰層（2.5～2.7万年前）が確認されている。

三瓶火山の第3活動期と第4活動期の噴出物は、黄褐色に風化した軽石～火山灰層として認められ、層厚はいずれも最大30cm程度である。第6活動期と第7活動期の噴出物は、岩石質の火山灰層として認められ、層厚はいずれも最大10cm程度である。岩片が大部分を占め、鉱物は角閃石、黒雲母、斜長石が多い。この両者は、肉眼的特徴、鉱物組成、化学組成にほとんど差がなく、識別が困難である。AT火山灰は黄色に風化した細粒な火山灰層として認められ、層厚は最大10cm程度である。大部分がバブルウォール型と呼ばれる薄い火山ガラスからなる。原田遺跡では、三瓶火山の第4活動期の噴出物およびAT火山灰層の下位から旧石器時代の石器等が出土している。

次に、三瓶火山の概要を述べる。三瓶火山は約10万年前に活動を始めた火山で、これまでに7～8回の活動期が知られている。第1活動期から第4活動期では、多量の軽石や火山灰を噴出するブリニー式の大噴火を作り活動を行った。その噴出物は日本列島の広範囲に分布しており、東北地方でも確認されている。三瓶山以東の中国山地には、「キビ土」などと呼ばれる軽石質の堆積物が厚く分布していることがあり、これはおもに三瓶火山第2～第4活動期の噴出物である。

第5活動期は小規模な活動で、少量の火山灰が三瓶山東麓を中心に分布しているに過ぎない。第6～第7活動期には、デイサイト溶岩の噴出により、溶岩ドームの形成と崩壊による火碎流発生を繰り返す「普賢岳タイプ」の活動を行った。三瓶山の現山体の大部分はこの2回の活動期に形成されたものである。

7. 斐伊川流域の製鉄

斐伊川流域では古代から製鉄が行われ、特に近世には国内随一の製鉄地帯と呼べるほどに盛んであった。尾原ダム地内にも製鉄関連の遺跡が多く存在している。また、製鉄に伴って排出された土砂は斐伊川流域の地形環境に少なからず影響を及ぼしている。

当地の製鉄では花崗岩類に含まれる磁鉄鉱などの鉄鉱物が原料として用いられた。花崗岩類の鉄の含有量は少なく、せいぜい数パーセントである。現代の製鉄に用いられる鉄鉱石が50パーセント以上の鉄を含むことと比べると著しく低い比率であり、花崗岩そのものでは到底製鉄の原料にはなり得ない。ところが、風化によって土砂化し、それが水流に流されると、比重の違いによって鉄鉱物の粒子（＝砂鉄）が濃縮され、鉄の含有量が一気に増大する。斐伊川流域の花崗岩類は深層まで土砂状に風化していることが多く、それを切り崩して水路に流す「かんな流し」によって比較的容易に砂鉄を集めることができたので、当地で製鉄が成立し得たのである。しかし、花

嵩岩中の鉄鉱物が少ないゆえに製鉄に必要な量の砂鉄を採取するためには、岩石を多量に切り崩すことになる。山地の開削は直接的に地形を改変するとともに、排出された土砂は下流域に堆積して、平野の地形発達に影響を及ぼした。製鉄による斐伊川流域の地形改変は、貞方（1998）が詳細な研究を行なっている。

当地の製鉄では、砂鉄とともに木炭も欠かせない原料であった。木炭は製錬炉の燃料であり、鉄鉱物を還元して金属鉄を得るための還元剤の役割を果たす。製鉄に必要な木炭の量は、用いる砂鉄の1.2倍程度の重量だったとされる。それを確保するために大規模な森林伐採が行われた。木炭供給のための森林伐採は計画的に行われ、循環型の開発を実現していたものの、山地の保水力の低下は避けられず、土砂流出を促すことにつながった。植生への影響も大きく、近世の前半を境に斐伊川流域に広く分布していたカシ・シイ類の照葉樹林は衰退し、代わってマツなどの二次林が形成されたことを、大西ほか（1990）は花粉組成の分析から指摘している。

8. 河川状況の変遷

斐伊川は暴雨川の印象が強く、出雲神話のヤマタノオロチ神話は氾濫を繰り返す斐伊川の治水がモチーフになったと言われることもある。実際、近世末から1960年代頃までは大雨の度ごとに氾濫し、毎年のように被害をもたらした。ところが、近年の発掘調査から得られた結果は、古代以前の斐伊川はどちらかといえば穏やかな河川であり、洪水を頻発するようになったのは中近世以降という傾向を示している。

古代以前の斐伊川が穏やかであったことを推定させる根拠のひとつは、尾原ダム地内の遺跡である。例えば、原田遺跡や北原本郷遺跡では縄文時代から古墳時代頃までは安定的に黒色土壤が形成されている。ところが、中近世には砂質の氾濫堆積物あるいは河道堆積物が同高度からそれを越える高さまで供給されて堆積している。これは、氾濫の規模が古代以前よりも中近世で大型化した可能性を示している。

同様の傾向は出雲平野でも認められる。近年、斐伊川の河道に近い低地で、青木遺跡や中野美保遺跡などの遺跡が発掘され、大型の遺構を伴う集落跡が発見されている。これらの遺跡に共通する層序は、古代までの堆積物は後背低地性の土壤であるが、中世以降は斐伊川の氾濫による砂質堆積物が主体である。その傾向は、斐伊川下流域にあたる出雲平野東部全般に共通しており、貞方（1996）は近世を中心とする時代の製鉄の影響で排出された土砂が当地に厚く堆積していることを指摘した。すなわち、斐伊川下流域では、古代以前は河道に近い低地に安定的に集落が形成されていたが、中近世には氾濫規模が大型化し、平野面が氾濫堆積物によって厚く覆われるようになつた。

これらを整理すると、古代以前の斐伊川は河畔で居住可能な河川であったが、中近世は氾濫の頻度と規模が増大したと考えられる。この変化の要因としては、砂鉄採取や製鉄などを含む山間

部の開発が進んだことにより、土砂排出量の増大と山林の保水力低下が生じたことが考えられる。

9. まとめ

本章では、寺宇根遺跡の立地環境について、遺跡の時代よりもはるかに古い時代の自然史にまで遡って述べた。それをまとめると次のようになる。

寺宇根遺跡は中国山地の山陰側にあり、斐伊川河岸に立地する。中国山地には白亜紀から古第三紀に形成された花崗岩類が広く分布している。山地の隆起は約1000万年かけて起こり、かつての平原の名残が山頂や尾根をつなぐ平坦面として残っている。花崗岩類に含まれる砂鉄を使って製鉄が行われ、当地の経済を支えたが、一方で斐伊川の氾濫を促す結果を招いた。斐伊川は洪水頻度が高い川であるが、寺宇根遺跡が営まれた時代、特に繩文時代には比較的穏やかな状況にあり、河畔には黒色土壤が形成されていた。本遺跡の遺物包含層はこの黒色土壤である。黒色土壤には三瓶火山の火山灰が挟まれている。当地には三瓶火山の火山灰層が複数枚存在しており、それらは黒色土壤を形成する母材の一部でもある。

文献

大西郁夫・下場英樹・中谷紀子（1990）宍道湖湖底下完新統の花粉群. 島根大学地質学研究報告, 9, 117-127.

貞方 昇（1996）中国地方における鉄穴流しによる地形環境変貌. 溪水社, 450p.

photo 1 横田盆地から見た船通山



斐伊川が流れを発する船通山は中国山地の脊梁の一角をなす。山頂付近がなだらかな地形であることが写真からわかる。

Photo 2 中国山地山陰側の地形



三瓶山山頂から斐伊川の方向を望む。奥に大山がみえる。斐伊川流域の山地を遠くからみると、峰の高度がほぼ揃っている。

Photo 3 寺宇根遺跡が立地する段丘



斐伊川左岸に位置する小規模な河岸段丘で、縄文時代以前の河床堆積物が形作る平坦面を黒色土壤が覆っている。

Photo 4 黒色土壤と火山灰層



寺宇根遺跡の地層断面。黒色土壤の下部にブロック状の火山灰層が挟まれている。三瓶火山が完新世に噴出した火山灰である。

Photo 5

三瓶山



三瓶山は10万年前から7回の活動期を繰り返した火山である。デイサイト溶岩からなる複数の溶岩円頂丘から構成される。

photo 6

出雲平野を流れる斐伊川の河道



下流部では河床に砂が堆積し、河道は網目状になっている。堆積による河床高度の上昇は氾濫を引き起こす要因となる。

図 版

II区全景(上空より)



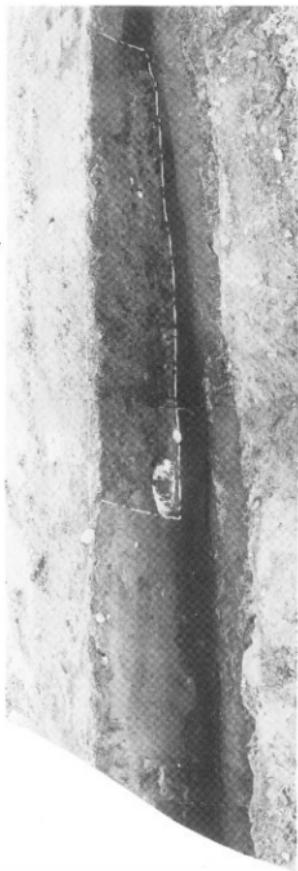


配石道構

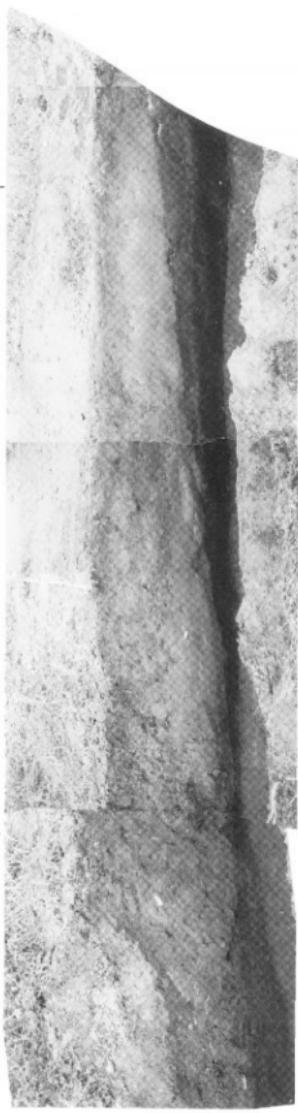
遺構面ヒ土層（ノライン）



I

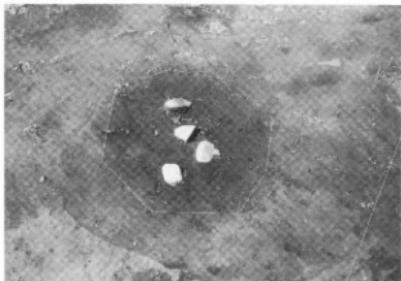


J

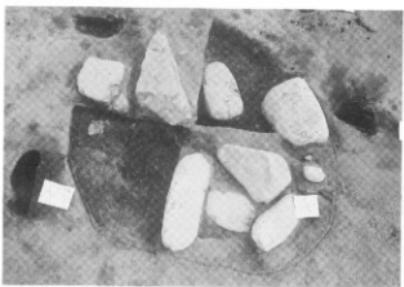


12ライン土層

K



SK2G-1



SK3H-6



SK3I-4

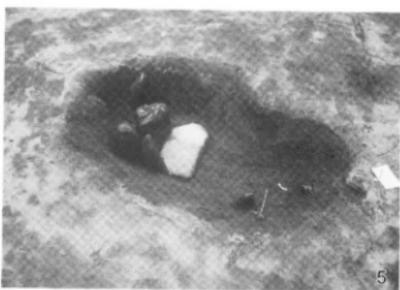
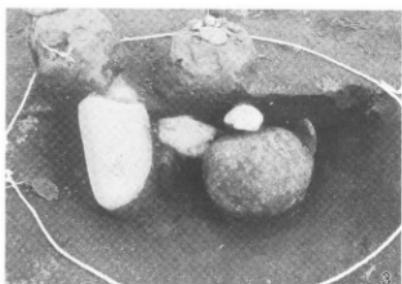


SK3H-7



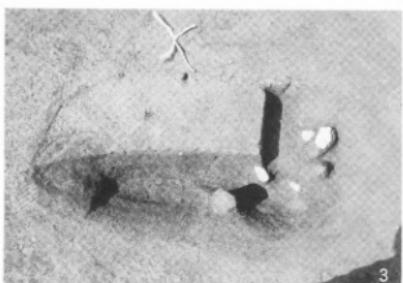
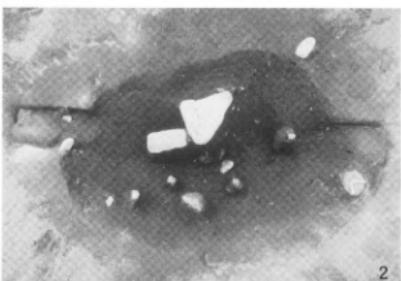
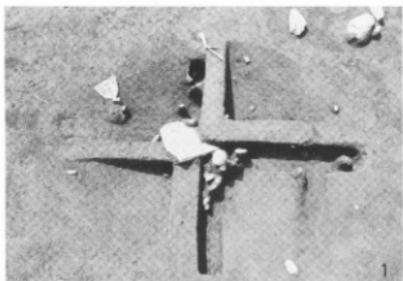
SK3I-5

土坑 (1)



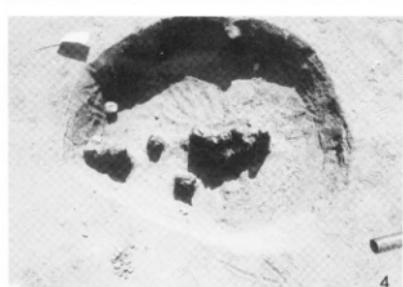
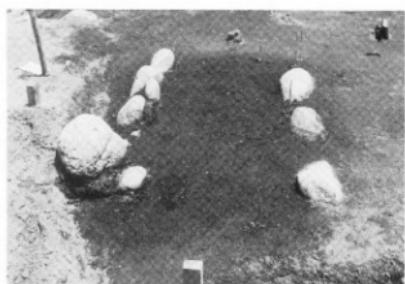
- 1 SK3G-5
- 2 " 4H-1
- 3 " 4H-3
- 4 " 4I-2
- 5 " 4I-5
- 6 " 4G-A

土坑 (2)



- 1 SK5G-3
- 2 " 5H-2
- 3 " 5H-3
- 4 " 5I-1
- 5 " 5I-7
- 6 " 5J-2
- 7 " 6I-2

土坑 (3)

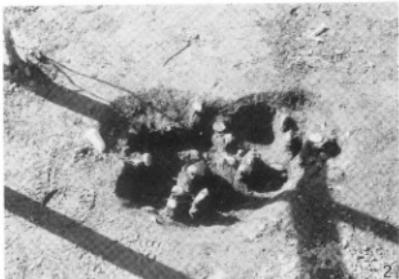


- 1 SK6 I-3
- 2 " 6 J-1
- 3 " 7 J-1
- 4 " 7 I-2
- 5 " 7 I-4
- 6 " 7 I-6

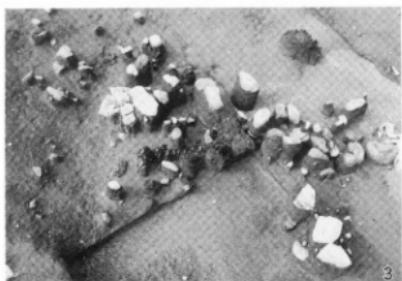
土坑 (4)



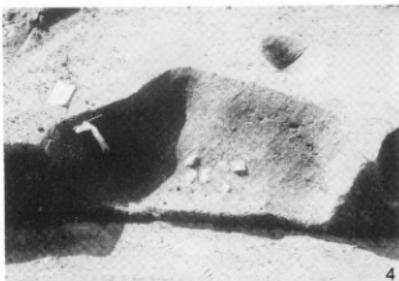
1



2



3



4



5



6



7

- 1 SK7I-7
- 2 " 8H-1
- 3 " 8I-1
- 4 " 8I-2
- 5 " 8I-3
- 6 " 8I-4
- 7 " 9I-1

土坑 (5)



1



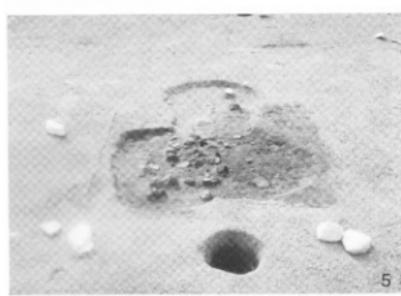
2



3



4



5



6



7

- 1 SK10H-1
- 2 " 11H-2
- 3 " 11H-3
- 4 " 11H-4
- 5 " 11I-1
- 6 " 11J-1
- 7 " 12H-1

土坑 (6)



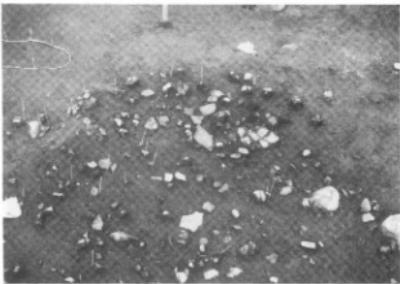
1



2



2



3



3



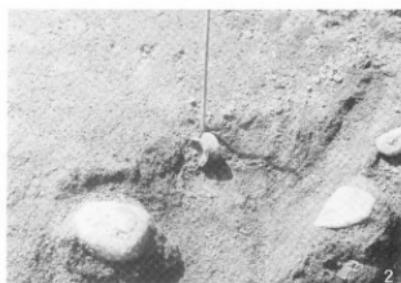
4

SI01他

- 1 SKI2H-2
 2 上 " 41-1
 下 " 土器溜り A~D
 3 上 SI01 次
 中 " 次
 下 " 完掘
 4 SI01 石圓炉



1



2



3



4



5



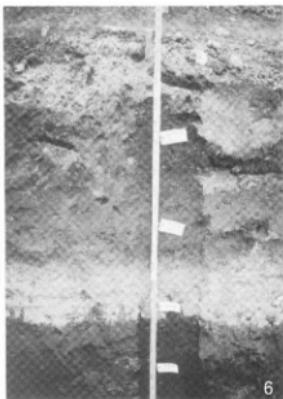
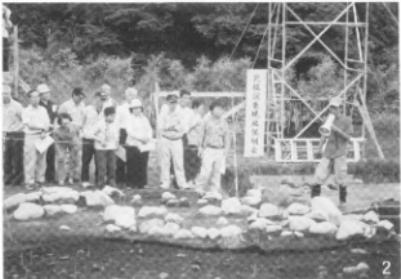
6



7

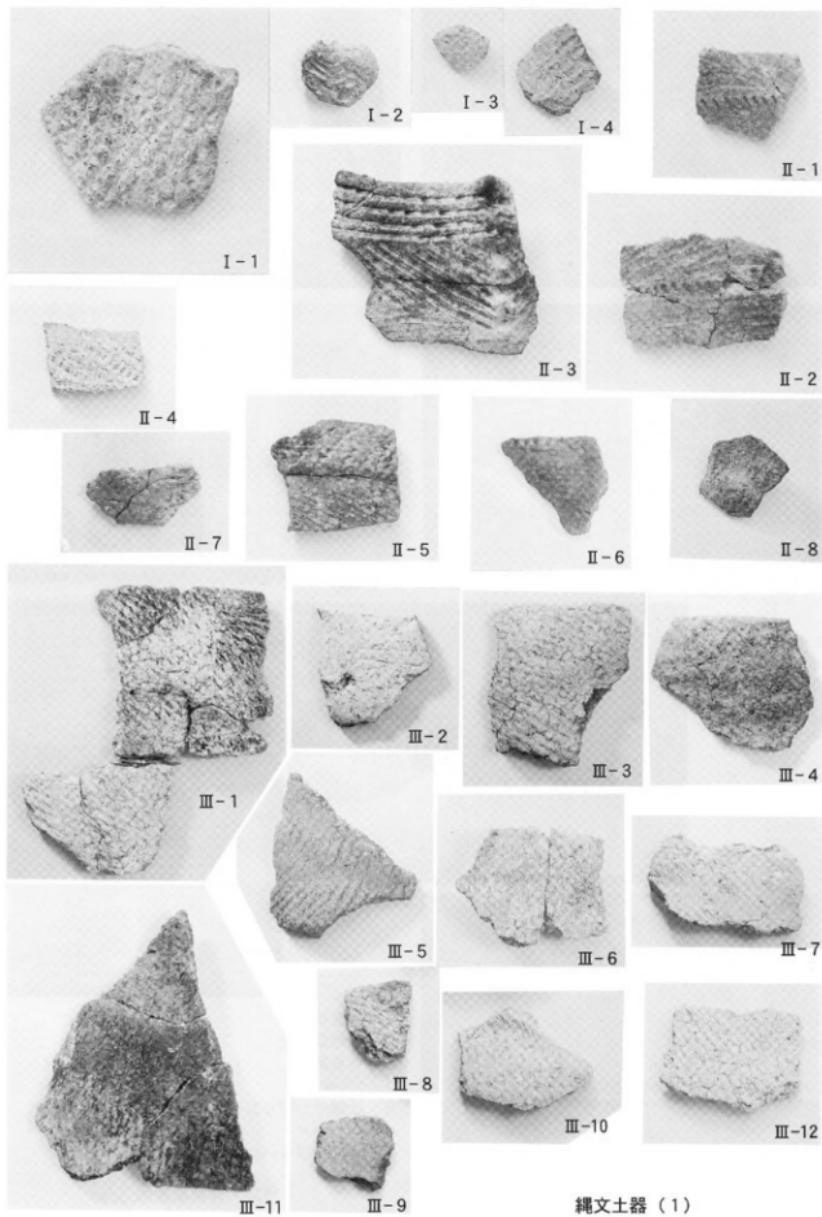
- 1 垂飾り
- 2 耳栓
- 3 9G区
- 4 7I区
- 5 土器溜り（石錘）
- 6 " （小型壺）
- 7 111-1区

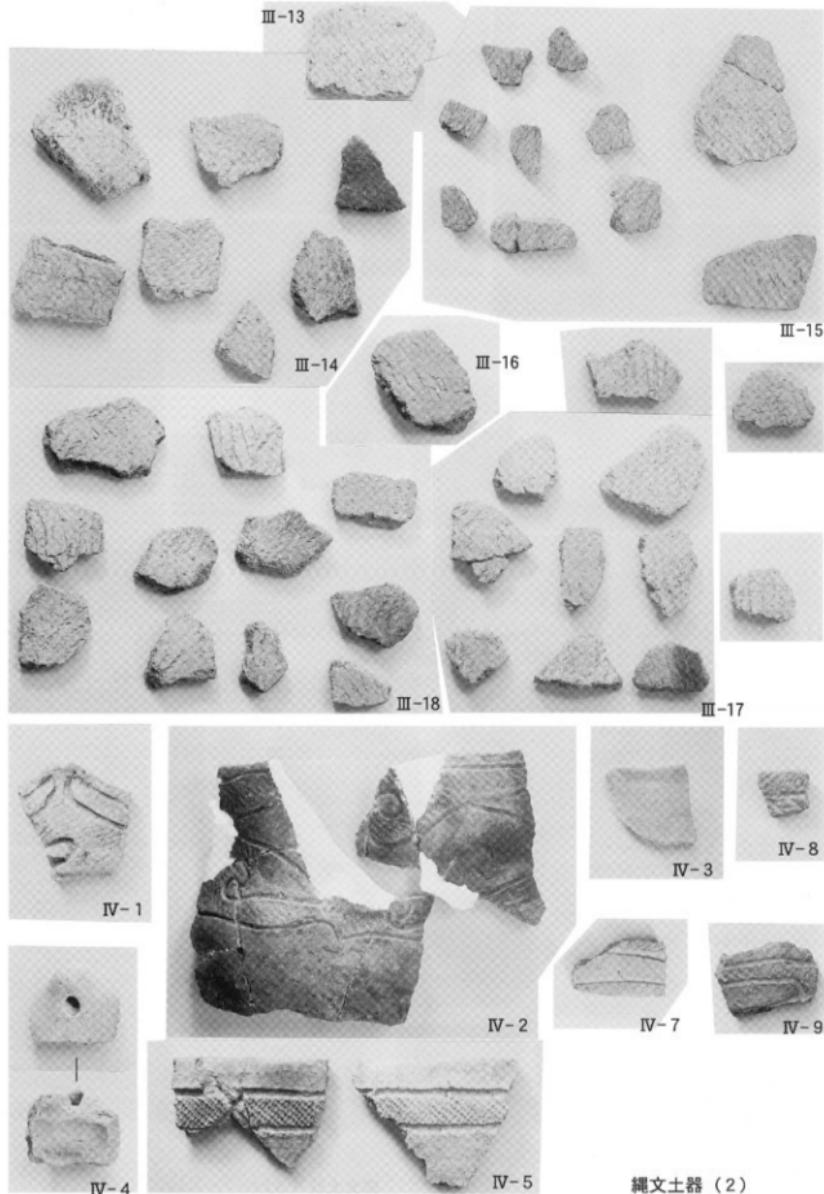
遺物出土状況

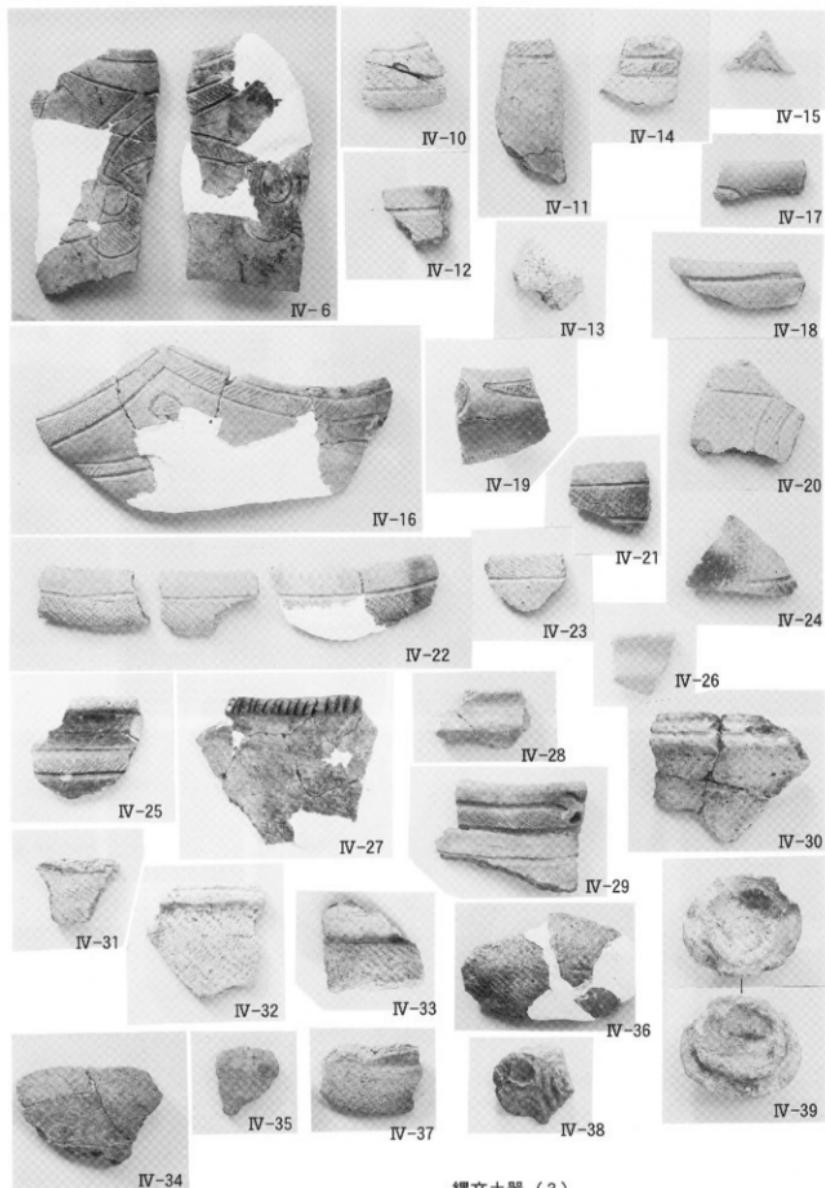


- 1 調査指導会
- 2 現地説明会
- 3 作業風景
- 4 "
- 5 土壌サンプリング
- 6 "
- 7 ヘリコプターによる撮影作業

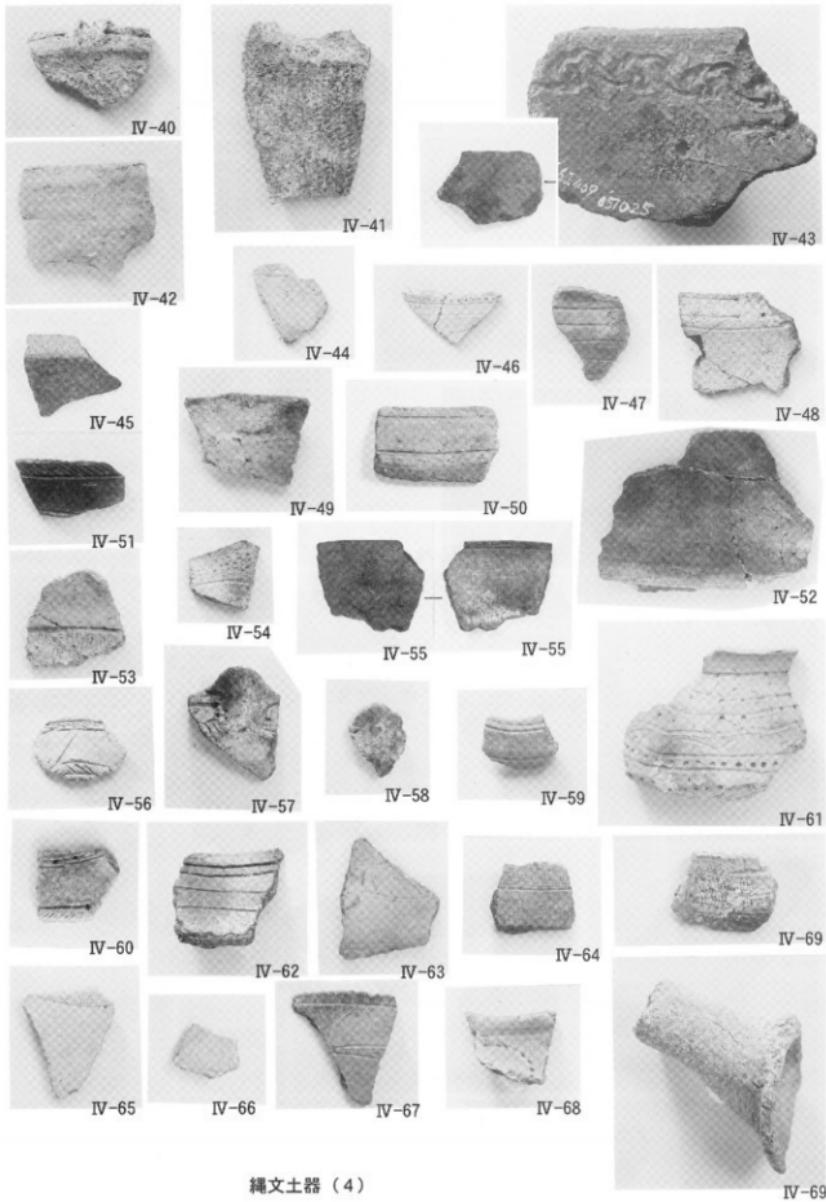
現説・作業風景他



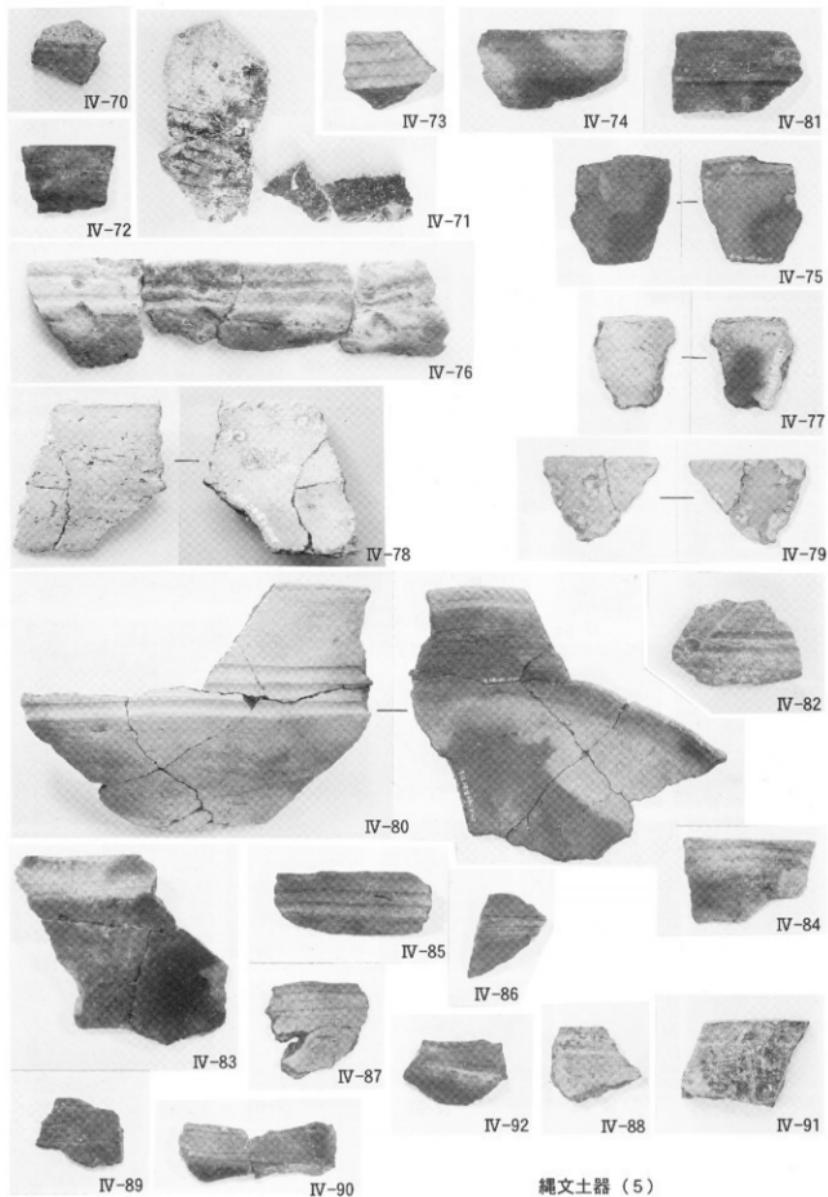


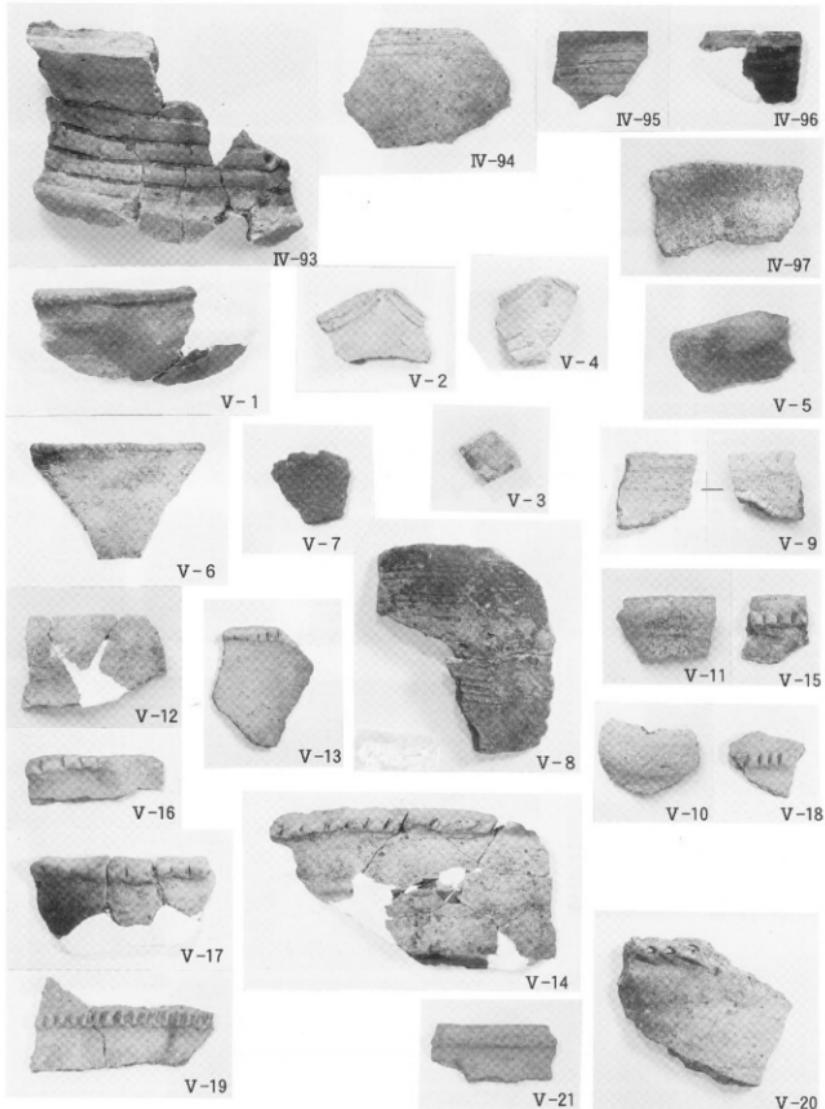


縄文土器 (3)

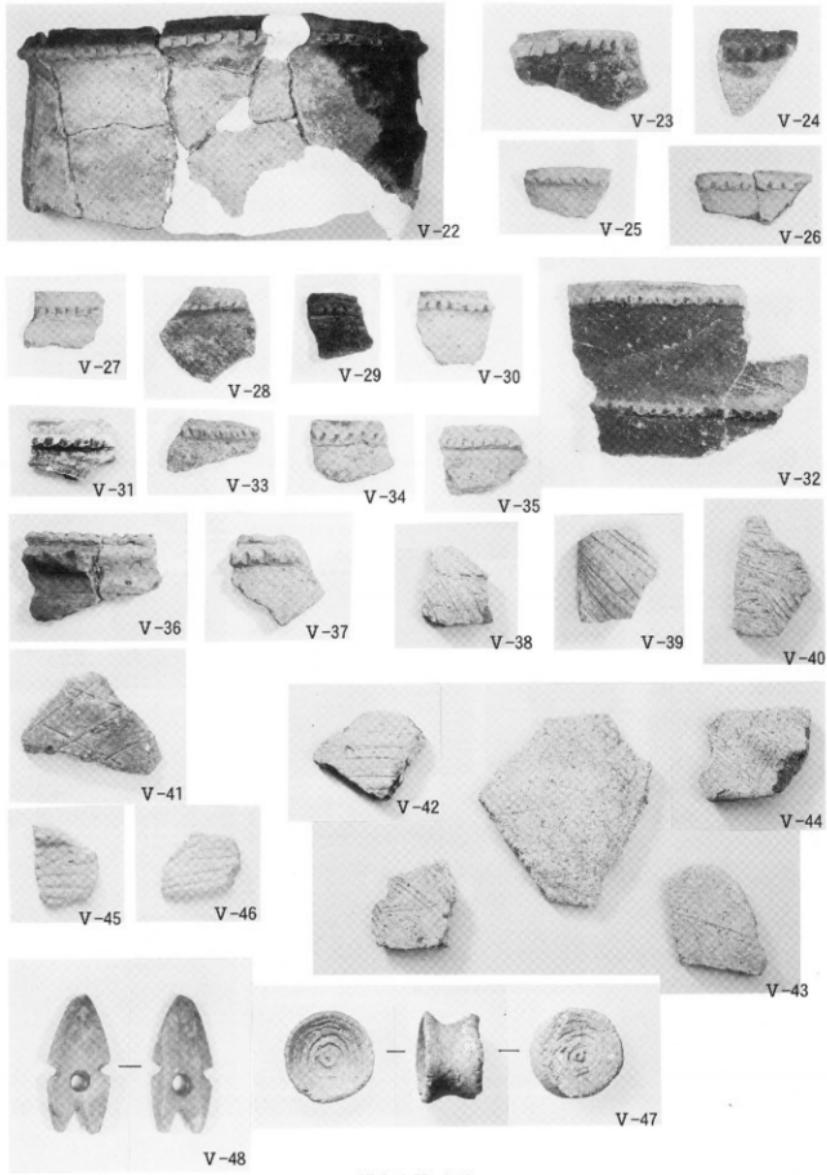


縄文土器 (4)

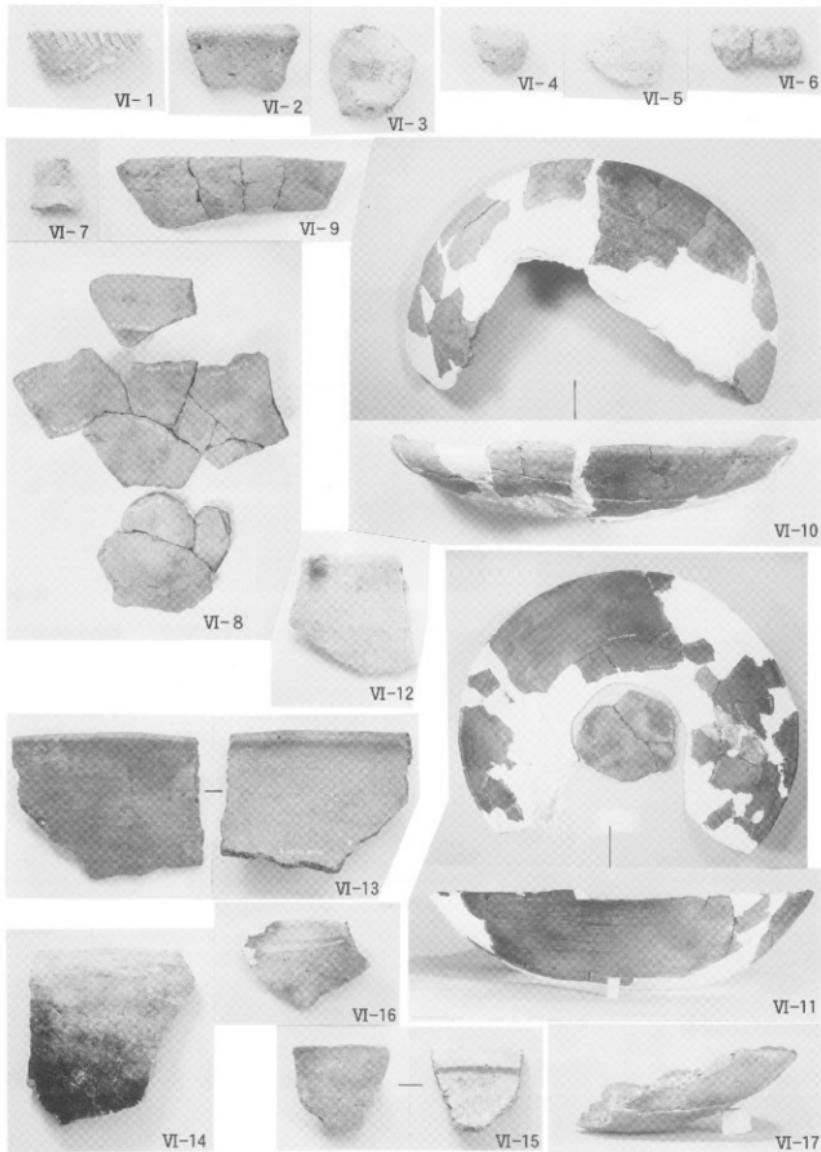




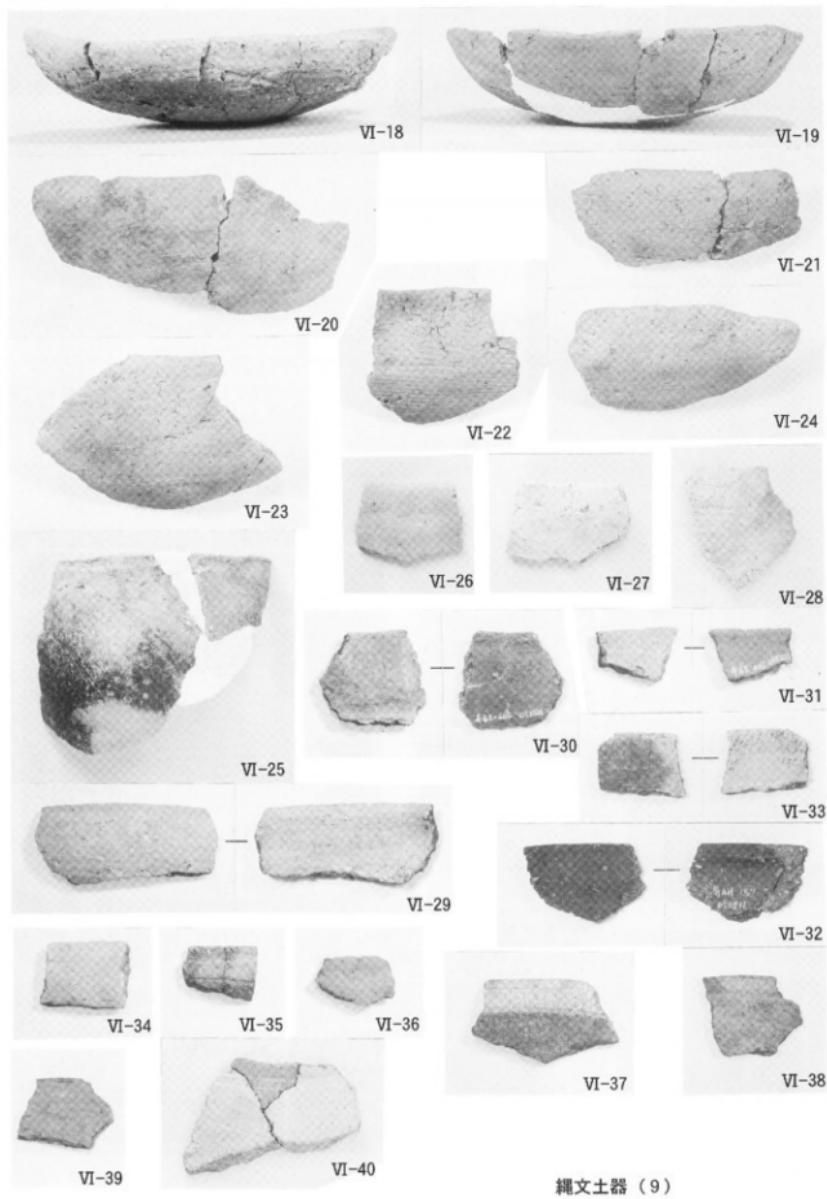
縄文土器（6）

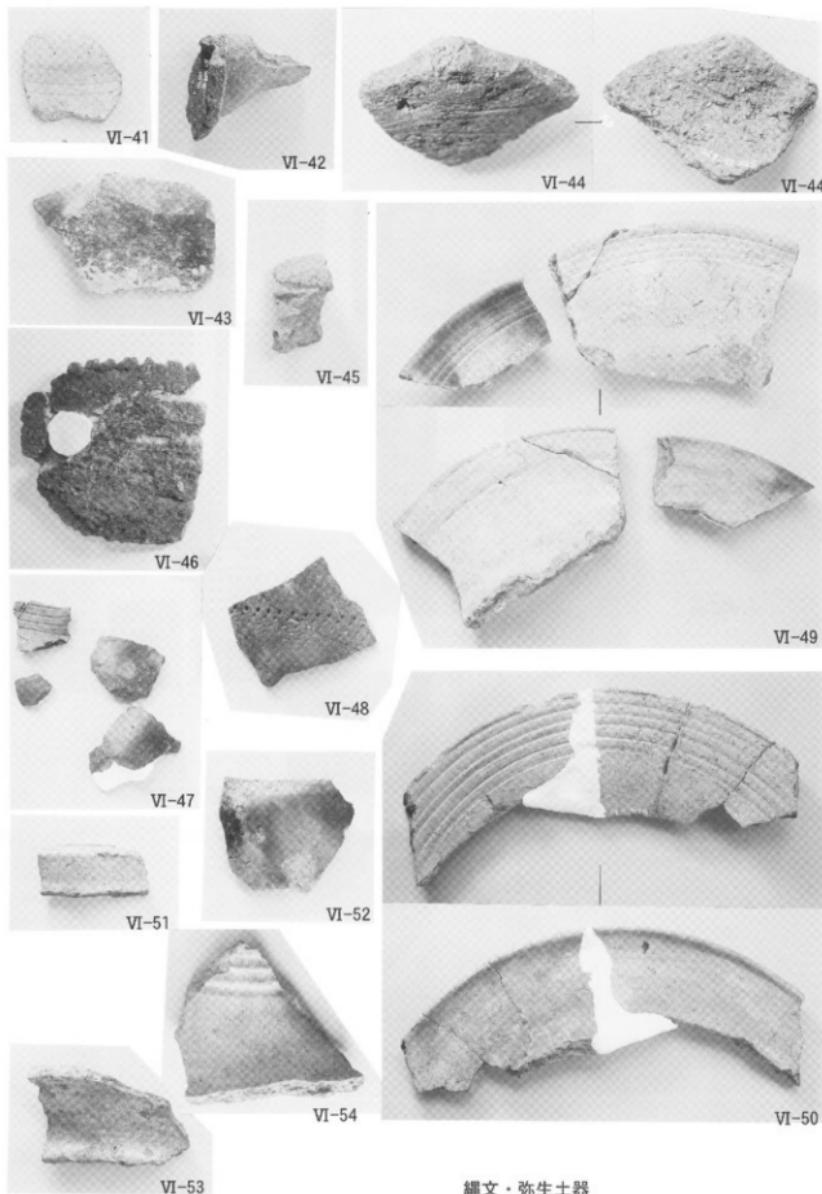


縄文土器 (7)

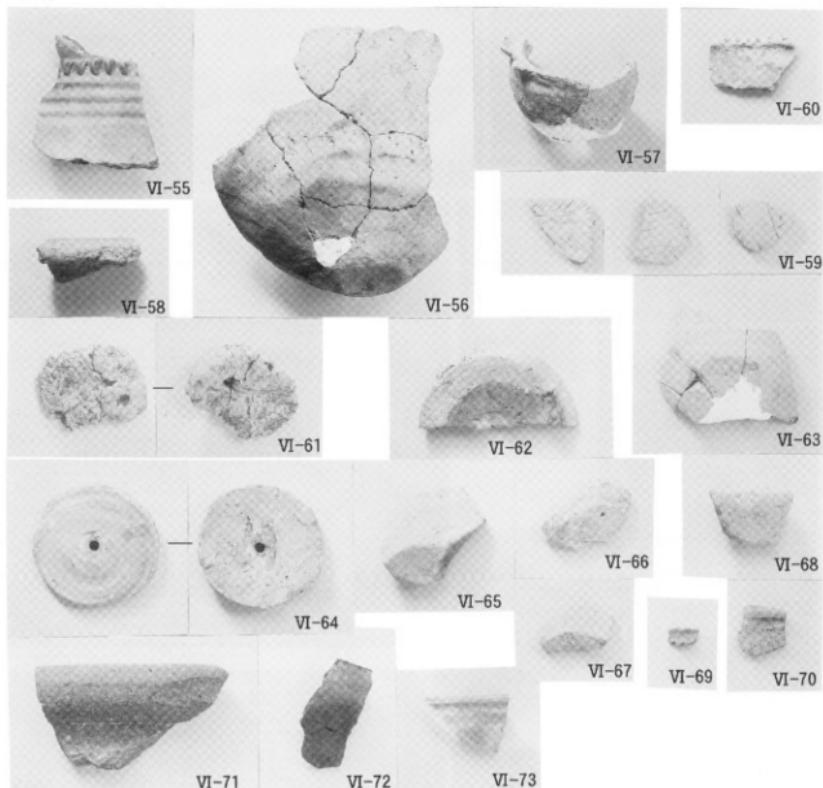


縄文土器 (8)

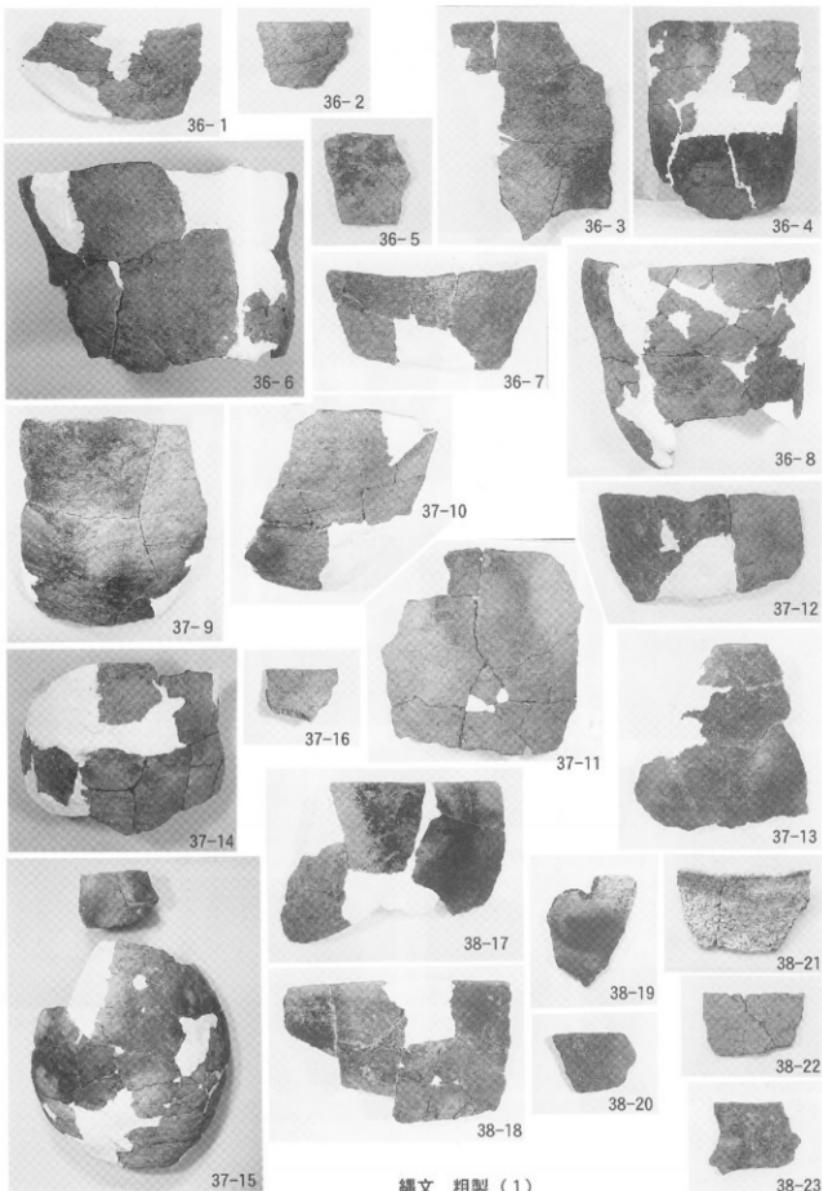


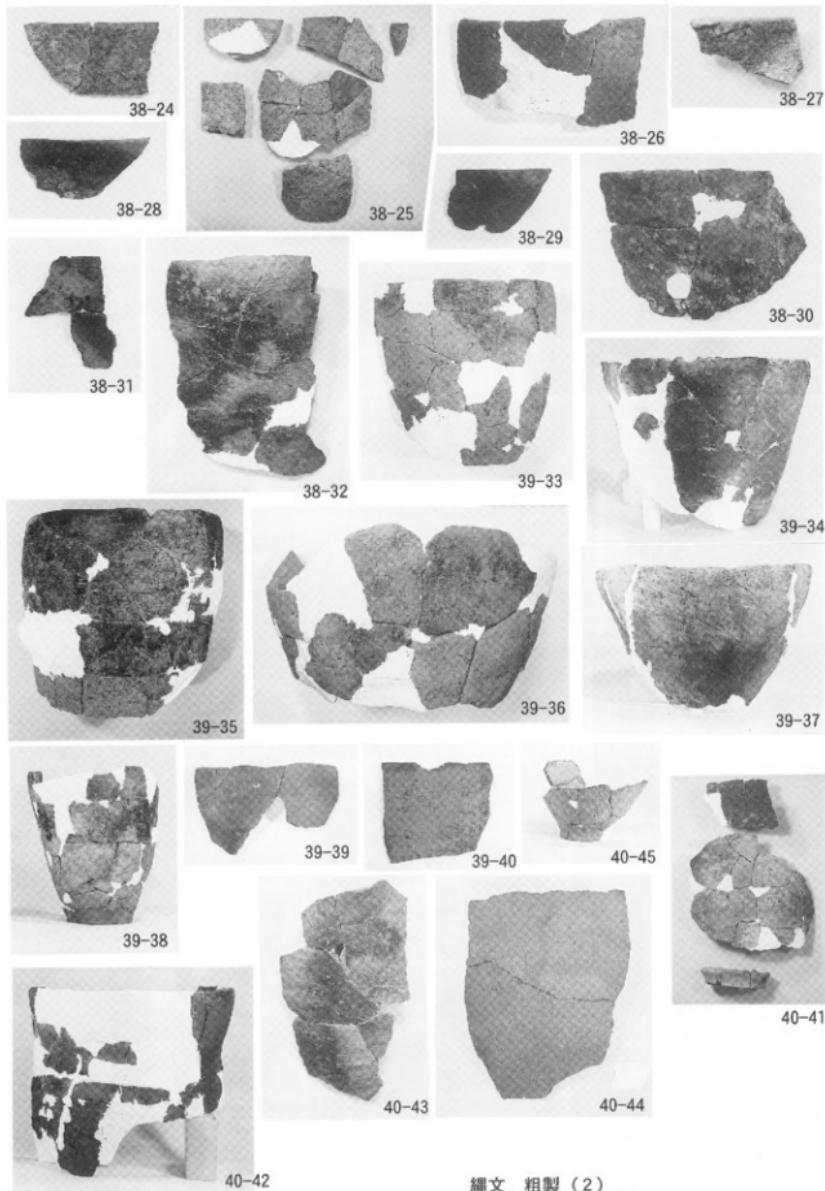


縄文・弥生土器

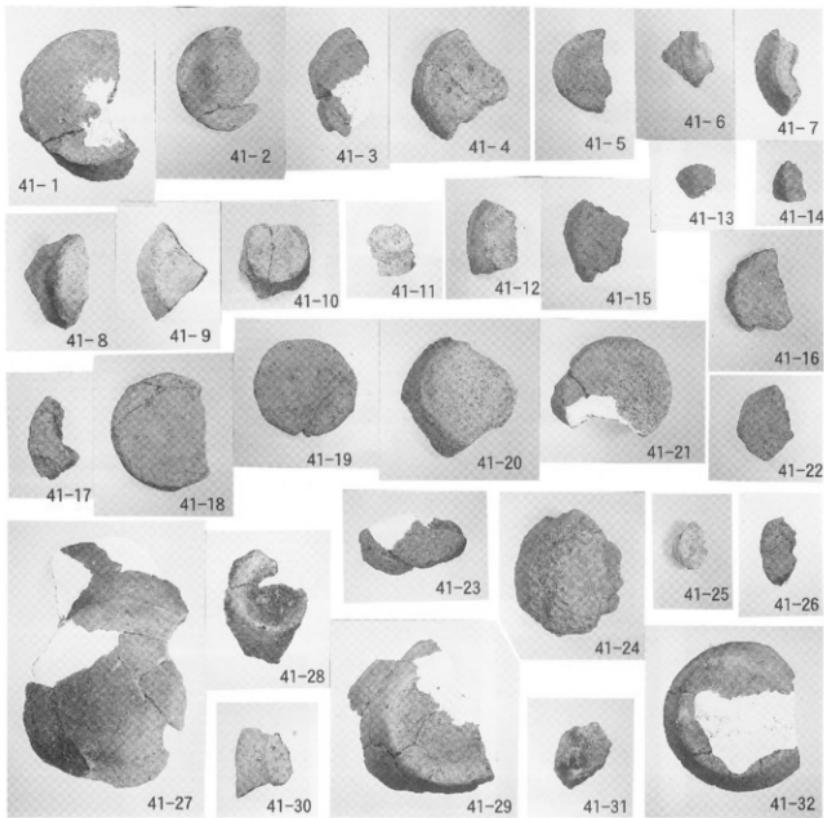
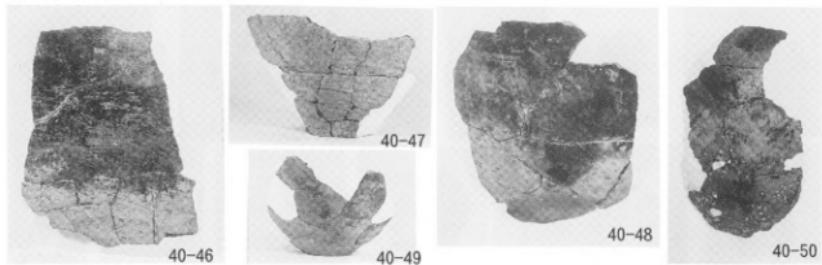


弥生土器他

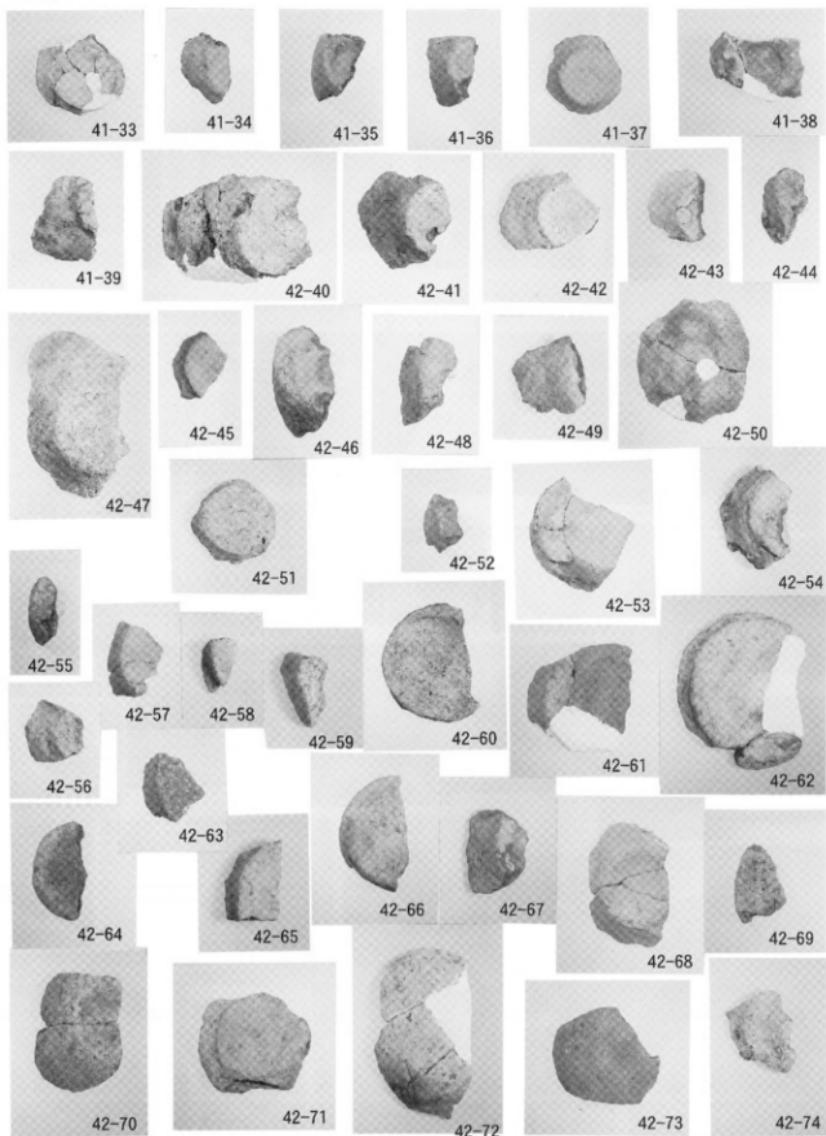




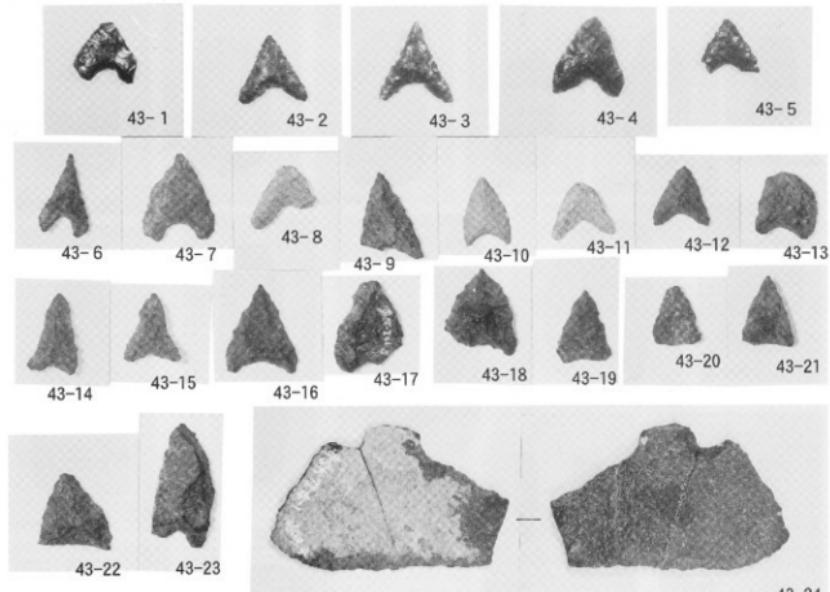
繩文 粗製 (2)



繩文 粗製 (3)



底 部



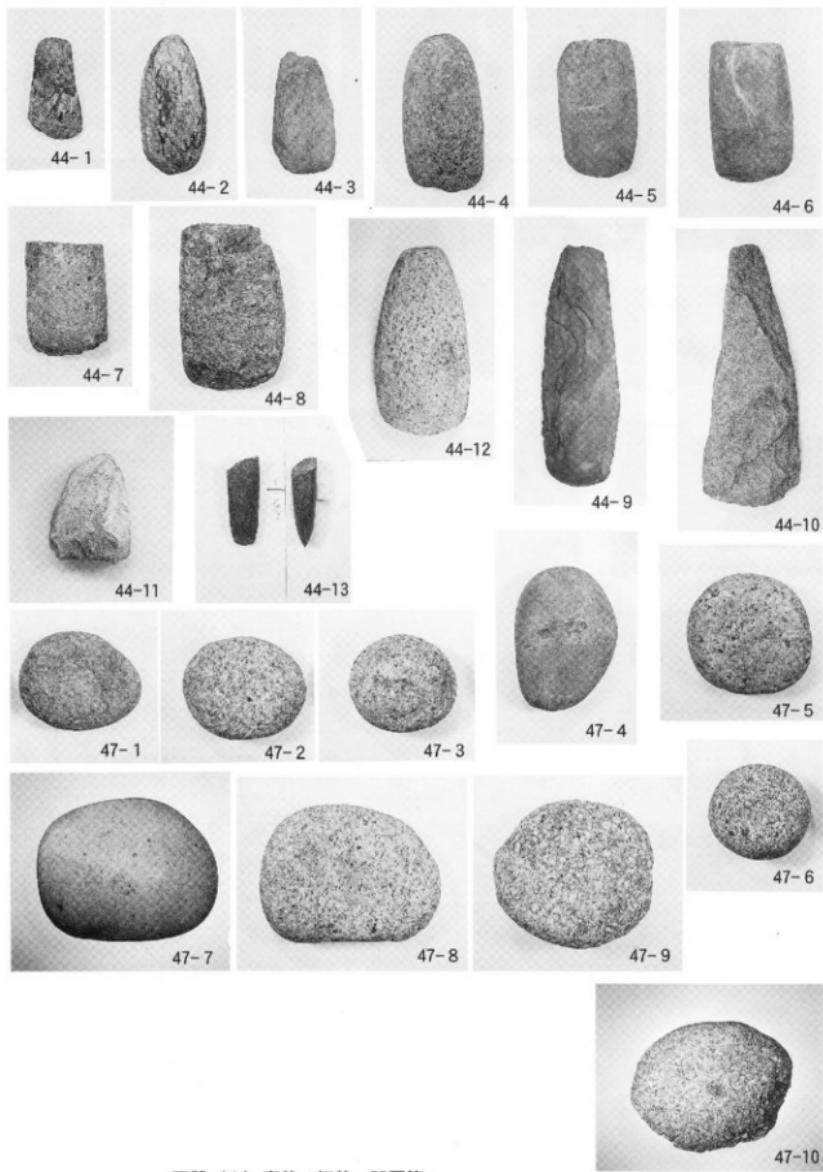
黑曜石剥片

石鏟·石匙·剥片

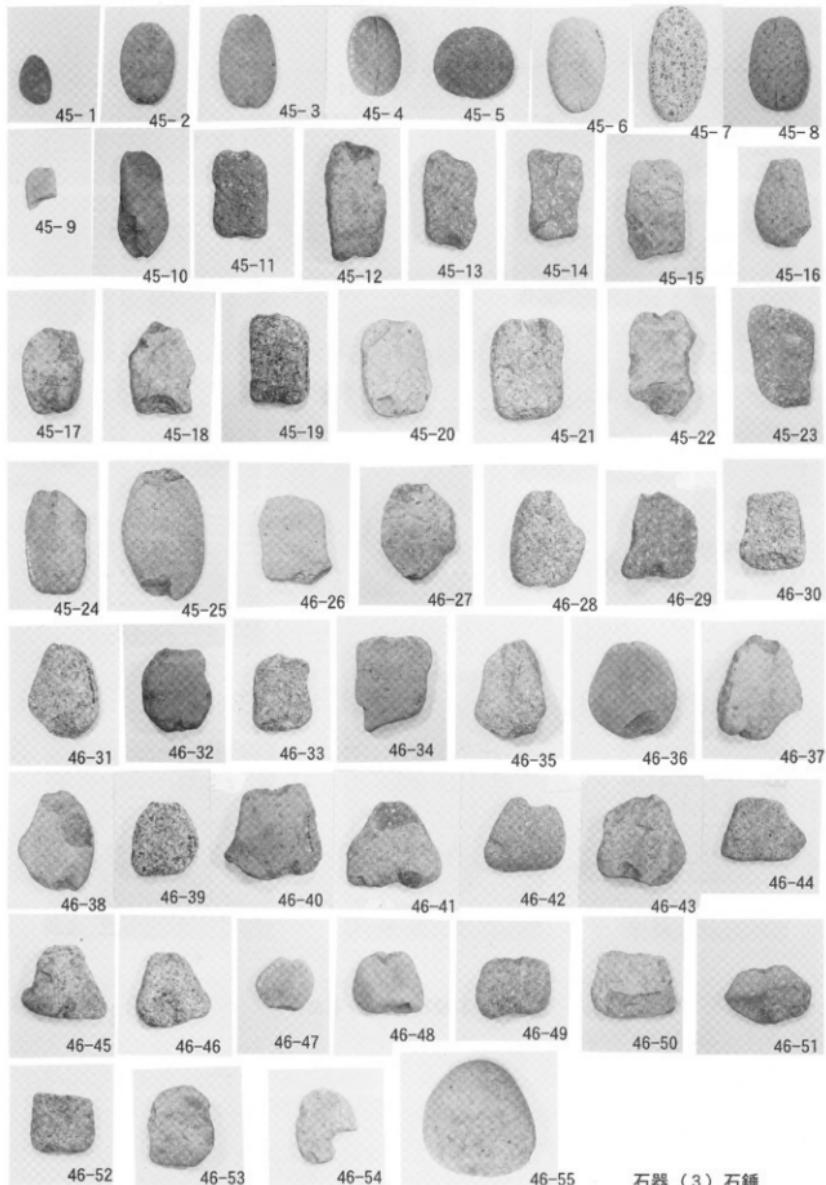


石英·他

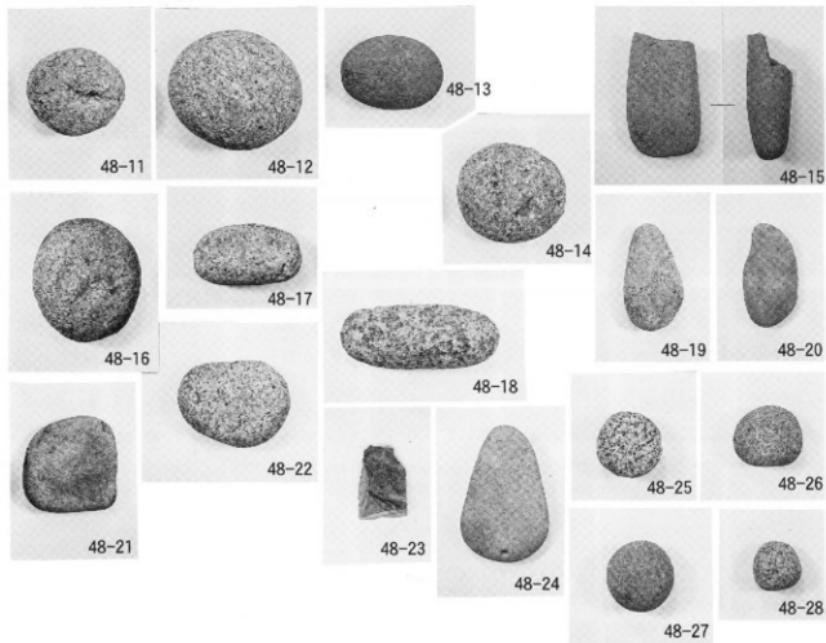
石器（1）石鏟



石器（2）磨斧·打斧·凹石等



石器（3）石錘



石器（4）敲石·磨石·石皿等

報告書抄録

寺宇根遺跡

尾原ダム建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書VI

発行 2008年（平成20年）3月

発行者 国土交通省中国地方整備局

奥出雲町教育委員会

編集 奥出雲町教育委員会

埋蔵文化財調査室

電話 0854-52-2680

印刷 (有)木次印刷

